

越谷市郷土研究会会報第八号

古志賀谷

平成七年六月刊

◇ 巻頭言

小島 誠 1

「研究集録」

「終戦特集」

◇ 逆川堤防切割騒動の済口証文	鈴木 秀俊	2	◇ 会員アンケート	会 員	64
◇ 桜井地区の石仏めぐり	加藤 幸一	9	◇ 戦争末期の出来事を思う時	青山 栄吉	73
◇ 大河土御厨について	宮川 進	35	◇ 東京大空襲	酒井 達男	75
◇ 山王二十一仏板碑究明史	星野 昌治	47	◇ 焼け跡をトラックが往く	匿 名	77
◇ 足立百不動尊	高島 英一	54	◇ 終戦前後	西田 茂	79
◇ 越巻学校開設の時代	高橋 清	59	◇ 最後の試合	小原勘三郎	80
◇ 手葉爾備忘録	古田 美雄	60	◇ 胸中の火	匿 名	81
◇ 薬師仏のお開帳	名倉 さわ	62			

表紙 金子 泰岑

○ 文化祭・展示出品一覧表	82	○ 役員名簿	97
○ 史跡めぐり一覧表	83	○ 会則	98
○ 研究発表会一覧表	89	○ あとがき・編集委員	99
○ 会員名簿・住所録	93		

◆◆◆◆◆ 卷頭言

越谷市郷土研究会前会長 小島 誠

「光陰矢の如し」と申しますが、越谷市郷土研究会は平成七年三月をもって、創立三十周年を迎えました。

私は発足当初より、理事、その後、会長として会員皆様のご支援、ご協力のもとに微力ながら努めてまいりました。

昨年六月の総会において、健康上の理由から退任いたしました。後任の会長には谷岡幹事長がなされました。

新会長は、長い間、当会の事務局を預かり、会運営に精通された方ですので、まことに結構なことで存じます。

私はこれからは常任顧問として、会員皆様とともに出来る限り、当会の行事に参加するつもりですから、よろしくお願い致します。

さて、当会三十年の経過を追想しますと、市立図書館が未だ越ヶ谷小学校にあった頃、木村信次館長（常任顧問）のもとで会設立が企画され、市内外から会員を集めて昭和四十年三月、地域の名士大野伊右衛門氏を会長として発足し、当会の基礎が築かれました。

発会当初の行事は、昭和四十年四月、大野会長による「方言について」を第一回として、会員の研究発表の連続でした。翌年二月から史跡めぐりが始められました。

第一回は大相模不動尊を訪ね、引き続き市内各所の史跡をくまなく巡りました。

さらに近隣の市町、日光街道、御成街道筋から県内西部・都内や近県にも歩を進め、楽しみながら史跡を訪ねて昔を偲び、資料館・博物館の見学により地方史について理解を深めました。

ことに当会発足二十周年記念「信州四賀村に会田氏のルーツを探る」（故山崎善司氏の案内）は、懐かしい思い出です。

現在では、史跡めぐりは二一〇回を越え、研究発表も一一〇回を越えました。

この記録は恐らく、他の市町の郷土史会にも例を見ないのではないかと思えます。

終りに、今後とも当会が会員皆様の余暇活用の一端として、益々発展し永続されますようお願いしております。

逆川堤防切割騒動の済口證文

鈴木秀俊

安政六末年（一八五九）は、四月上旬から冷氣で天候不順であつた。七月二十三日から二十五日にかけての大暴風雨で、二十五日午後四時、遂に荒川の堤防は熊谷と久下との間で二ヶ所崩壊し、元荒川は殆んど本流のようであつた。夜半には利根川が上中条で越水し、次で北河原庚申塚で決壊。翌日午後四時には酒巻の堤防が切れ、両大河の濁水は忍領に莫大な損害を与え（参考行田市史）、さらに下流の村を襲つたのである。

七月二十四日より、追々古利根川と元荒川につながる葛西用水（逆川）、千間堀（新方川）など満水となり、村々は総出で水防に當つた。二十七日には増林村二ヶ村の訴えにより、代官所から普請役が出張して溜井関柵の明け払い、洗流堰切り払いの指図をしていた。

同日、元荒川は岩槻領長宮村（岩槻市川通地区長宮）大光寺脇、その外所々で決壊し、濁流は忽ち新方領村々（大吉・向畑・川崎・弥十郎・大杉を含む）に押し寄せ、まもなく田も畑も円に泥海と化し、民家は床上浸水二・三尺に達した。

そして、漸く古利根川、逆川が減水を始めた八月三日、田畑が冠水して六日となり、内郷の落水を、刻も早くと急ぐ上郷側（大吉村外四ヶ村）は、村人大勢集まり数十人で大吉村地内、宮ノ下、樋を切り流し、これを阻止しようと人数を増して嚴重に警戒していた下郷側（増林村外四ヶ村）と烈しく対立した。

代官所普請役立会中の騒動であつた。

この騒動の資料は、越谷市史（二）に増林村外四ヶ村から奉

行所へ差し出した訴状「万延元年（一八六〇）三月、大吉村堤防切割出入吟味願」があるが、相手方（大吉村外四ヶ村）の資料はなく、結末も不明であつた。しかし、その後、万延元年八月、勘定奉行竹田豊前守宛に、訴訟人、相手方、双方の連署を以て差し出した「済口證文」によれば、この出入は内済（和解）していた、ことがわかる。

用語の説明（古文書用字用語大辞典より）

（一）済口證文 江戸時代、訴訟の際、内済（和解）が成立して被告（相手方）原告（訴訟人）双方で取り交した証文。これが裁判役所に提出され、認められれば裁許とほぼ同様の効力があつた。

（二）出入 一般に紛争の意味に用いられた。法律用語としては原告の訴状提出をまつて、はじめて相手方をよび出し、指定日に双方を対決せしめて、判決を与える手続きをとる裁判をさした。

次に「済口證文」を書き下して紹介する。

表紙

竹田豊前守様

済口證文写

万延元年八月

差し上げ申す済口證文の事

竹垣三右衛門様御代官所、武州埼玉郡小林村外四ヶ村、小前村役人惣代中島村名主直八外二人より、川上金吾助様御代官所

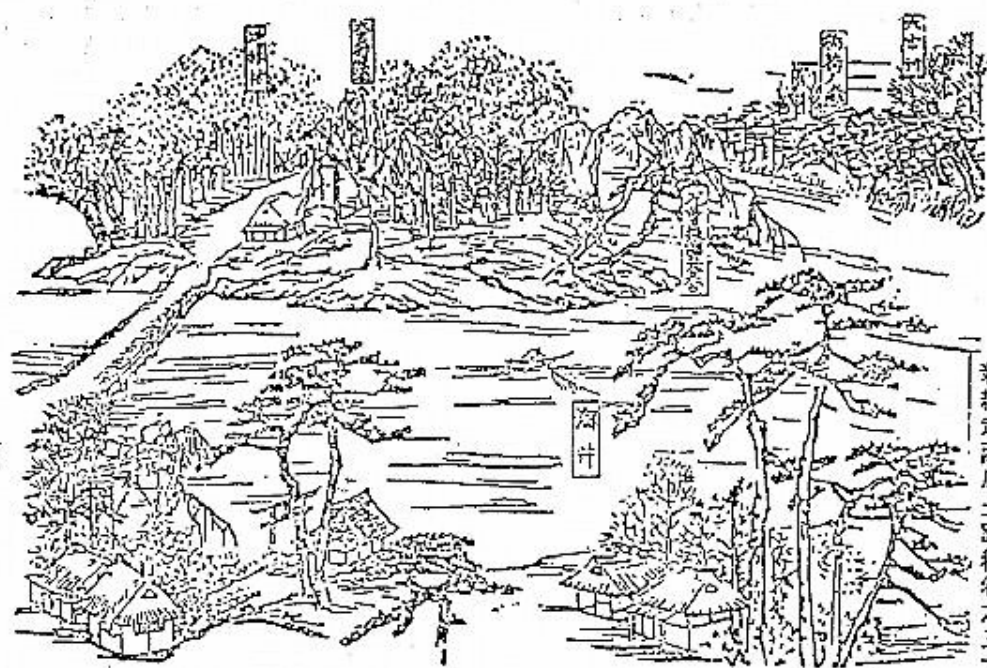
同州同郡大吉村名主周次郎外十一人へ相掛け、理不尽出入の旨申し立て、当三月中、当奉行所様へ出訴奉り、同三月十八日差日（指定日）の御尊判相付き、御差日当日、相手方よりも夫々返答書差し上げ、当時御吟味中に御座候処、扱人（仲裁人）立ち入り、熟談内済（和解）仕り候趣意、左に申し上げ奉り候。

一、右出入訴訟人申し立て候は、去る未七月中、川々満水、忍領（行田市）堤切れ候趣にて上郷より懸水押し来たり、当村々は古利根川・元荒川・荻西井筋（逆川）等四境にこれ有り、増林外二ヶ村は中央に岩槻領新方領懸水路字千間堀（新方川）有り、川々に挟まり居り候故、右水難防ぎ、同月二十七日御支配へ訴え上げ御出役御差略、且つ御普請役様方の御指図受け、五ヶ領用水溜井閘（松伏閘）を明け払い候ても水嵩みに付き、同様御指図、同村洗流堀切り払い方丹精仕り候。

折柄八月三日、大吉村地内、西葛西井筋（逆川）堤へ相手村々の者共多人数駆け集まり、増林村地内、字新違場堤、先年御裁許仰せ付けられ候場所へ大吉村名主周次郎外一人、人足引き連れ得道具持参、船に乗り押し来たり切り掛かる様子につき、驚き水防人足相増し相守り居り候内、啓次郎外七人、その余數十人、字宮ノ下切り流し候に付き、不法の仕成し方懸合候え共、頓着これ無く、強勢のあり様に懸合も相成り難く、余儀なく御出役様申し立てられ、同所へ火急にお越し成られ候内、最早切り割り、右のもの共引き去り候故、右、不法懸合うべくと存じ候中、猶同日、弥十郎村茂十郎外一人爲口等携え、右川へ乗り下り増林村字前波橋へ渡りまいり候に付き、前様御出役様へ申し立て御指図受け、漸く差し押さえ候処、是又、切り割りに罷

り越し候由、当村々堤通り、並びに千間堀、閘井洗流堀最寄危急に罷り成り懸合も出来ず、水防に屈縮罷りあり候処、隣村石川民部より、相手理不尽に切り割り候は心得違ひに付き、早速築留、跡々議定致すべく候間、茂十郎外一人引き渡し候様申し聞き呉れ、相違これ有るまじくと存じ、猶、御出役様へ申し立て、民部申すにまかせ茂十郎外一人共相渡し遣わし候。

然る処、翌日民部より、相手村々切り割り堤築留難く、且つ、議定仕るべく義これなき旨、相断り候趣申し、依つては民部共馴れ合い、当村々愚昧混雑の中と見破り、理不尽に及び候のみならず、民部を以て相透かし候に相違無く、引き続き懸合候ても頓着仕、らず候上、同月十五日、相手次郎右衛門外大勢にて、切り割り堤仮築留致し候に付き、同所築留については、民部より何か挨拶これ有るべく旨、次郎右衛門その外へ懸合に及び候処、立腹にて悪口申し（言）り、一体、増林村閘井溜井は前五ヶ領水元にて、御普請役様付き居り御差引きこれあり、地元村は番給下し置かれ、大切に見守り仕り、閘井並びに溜井通り堤にて、右堤通り切り割り出来候ては水下七万石の水災、恐れながら御上納辻にも響き候儀を。上郷にては、右様理不尽に数ヶ所切り割り候より吐き方防ぎ方差し支え、同郡大沢町堤切れ、及び花田外一ヶ所切れ所出来、花田外二ヶ村は立毛これ無く（水没）、増林外一ヶ村も同様陥り、右訳がら故、閘井御普請所、西葛西井筋堤通り共大切の場所に付き、増林外四ヶ村より永小作、年毎に相手周次郎へ差し出し、堤を丈夫に築留候程の義にて、往古より切り流し候義これ無く、右は先年、増林村字新違場堤切り払いきたき旨、相手村々その外より願ひ出候

[illegible]

松 伏 河 井 園

え共、御取り上げこれ無き程の処、その後出水の砌は最寄切り払い、増林村外三ヶ村より出訴奉り、御裁許仰せ付けられ、相手のもの共御咎受け候儀これ有り候を、とかく強勢の村々故、下郷五ヶ領の難儀も顧みず、向後出水の砌、数ヶ領忽ち水災難儀仕り、聊かも安心相成り難く候間、已来、右体の義仕らず、数ヶ領無難の相続仰せ付けられ度段、申し立て。

且つ、相手方（大吉村外四ヶ村）にては、訴訟人申し立て候趣は事実と相違いたし、一体、去る七月中の大風雨、引き続き稀なる洪水に相成り、同月二十四日より追々、字吉利根川並びに元荒川続き西葛西井筋共悉く満水、私共村々堤通りへ伏せ込みこれあり候用、悪水坎樋押し抜けず候様、大吉村地内御普請所、六ヶ村組合用、悪水字宮ノ下坎樋の儀、年末相立ち大破に及び、洩れ所出来危難に相成り候に付き、杭木を以て、右坎樋築立て防ぎ方致し居り候内、同月二十七日、岩槻領長宮村地内字大光寺脇、その外所々切所に及び、村々田畑の差別無く一円に洪水押し来たり、民家床上二・三尺も押し上げ、銘々竹方これ無く一同悲歎罷りあり候内、漸く増水相定まり。

八月三日に相成り、吉利根川・葛西井筋共、二尺余も川表追々減水に相成り候え共、内郷は減水仕らず相満え居り、必死難渡の私共村々申し合い、右宮ノ下坎樋防ぎ留候土俵・杭木等取り払い、内郷洪水相吐かせべくと存じ候処、同日増林村名主六兵衛外二人は、銘々脇差を帯び、船越し人足代助外二人共田船へ乗り、右場所へ相越し、坎樋相開き悪水吐かせ候儀、成り難しなど申し聞け候え共、右坎樋の儀は悪水落しのため、御入用を以て御普請仰せ付け置かれ候場所に付き、往古より塞開共、

私共限り進退にこれあり候を、訴訟方村々より差し障り候儀これ無く、然るを、何等の所縁にて彼是故障致し候哉の旨、掛け合い候処、否と相答えず、その儘引き取り、間も無く大勢徒党いたし、既に大吉村地内まで押し寄せ何様の変事出来べくも計り難く、右土俵の取り払い半ばにて人足一同、その場を退き候途中、当増林村勘右衛門外一人、伝馬船と唱え候船へ打ち乗り追駆けまいり、支配御出役様方御用先に私共の内、周次郎、次郎右衛門その余、場所へ立ち合い候もの残らず罷り出べき旨、仰せ付けられ候趣、申し来り候に付き驚き入り、即刻跡より罷り越し候趣、挨拶に及び候処、船差し支え候間、差し当り見受け候増林村次兵衛の持船借り受け、罷り出べくと存じ少々漕ぎ出し候処、如何相心得候哉、私共の姿見とめ早鐘を打ち鳴らし、同村名主熊蔵はじめ村役人一同脇差を帯び、小前のもの共数百人竹槍を持ち、又は藻荇刀を携え、何れもたすきをかけ、晒し手拭にて後鉢巻等いたし、存外強勢の有様にて種々難言申し（言）り、変事計り難く、扱無くその場を相退き候後、同日七ツ時（午後四時）弥十郎村茂十郎外一人義は、右混雑の始末弁えこれ無く、只々土俵取り払いの為罷り越し候を、増林村名主又兵衛弟新八重立ち、その外大勢にて茂十郎外一人を散々打擲に及び、水中に踏み込み、その上縄綱に致し、弥増当村のもの共心配罷りあり候折柄、遅刻の旨にて御出役様方より御呼び出し御差紙に付き驚き入り、増林村次兵衛宅前迄罷り出候処、前波堤通りへ幕を張り、同村と松伏両村地内にこれある五ヶ領組合御普請閑枠の儀は、前々より増林村にて見守り給頂戴いたしおりながら、素々、右堰枠番提灯、補理置き候高張、右場所へ

立て置き候を抜き取り、その外、銘々所持の高張、手提灯等數百張持參、品々容易ならざる企ていたしおり、私共より御出役先へ罷り越し候を訴訟方のも共差し妨げ、何分にも罷り出難きに付き、擬無くその段出府の上、支配御役所へ申し立て候つもり談判中、松伏村名主石川民部が私共村々へ罷り越し、御出役様方より只今急御用の由にて罷り出候處、今般、差し纏れ取扱いし遣わすべき旨、仰せ渡され候趣申し聞け、右宮ノ下駄、素々惡水吐かせ來たり、猶、この節の満水吐かせ候を謂無く差し障り候のみならず、弥十郎村茂十郎外一名に手荒の手扱い致し候段、御訴え相成り候ては、水難の中穩やかならず候間、何れにも相任すべき旨申し聞け候に付き、私共心得方は、訴訟方右体不法の義、心得違ひ相弁え、惡水吐き方に差し障らざる筈、別紙一札受け取り度旨挨拶におよび、その段、民部より訴訟方村々へ懸合の上、私共へ申し聞け候は、右村々より已來理不尽の所業、且つ、筋違ひの廉、書付取り置き方は勘弁いたし置き呉れ、差し向き、増林村地内洗流堰向縁、大古村地内葛西井筋上堤、長さ九間を切り割り洪水吐かせ、水難相凌ぎ候を專一と致すべき旨、御出役様より仰せ付けられも受け候程の義に付き、村々用惡水吐き差し障り妨げず候上は、茂十郎外一人の身分、大古村德藏寺も一旦立入り候儀に付き、同僧並びに弥十郎村平六へ引き取るべく旨にて、夫々扱人より掛合中にこれ有り候を、今般の一條には、相携わらず候中島、花田、小林三ヶ村を荷担に引き入れ、私共義、大古村地内堤通り荒神と唱え候場所、並びに大沢町地内迄切り割り、訴訟方村々水腐れ致させ候等、その外品々申し偽り、勝手儘の儀書き筋り候のみならず、天明度、

御裁許に事寄せ品よくとり、巧みに支配御役所へ申し立て候段、逸々、その意得難く、右は畢竟訴訟方のも、自分共容易ならざる取り計らい致し候を押し覆すべくため、右様逆訴仕り候義と相聞き、いかにも穩やかならざる心底、片時も安心成り難く候間、茂十郎外一人に手荒の取り計らいいたし、品々不法の所業におよび候始末、御吟味の上、已來字宮ノ下駄樋御普請役様御用先を差し妨げず、私共村々用惡水懸け引き進退へ、聊か差し紛れず候様、仰せ付けられ度く段、その外品々答え上げ。

御吟味中、扱人立ち入り双方懸合候處、右去る七月中、稀の洪水に付き、下村々においては水防御出役様へ願ひ上げ御差略中にて、素より同領、殊に組合村々相互に御田地相続方專一の儀を、心得違ひより事起り、今般の次第に相成り候え共、篤と懸合の上、後年、上手筋切れ所出来、洪水押し來たり候節は、葛西井筋堤通り地元役人、昼夜見回り取り締りいたし、小前のも共理不尽の所業これなき様取り計らい、相互に実意を尽し合い勝手儘の儀致さず、双方難儀に相成らざる様致し候筈、曉と議定致し、その余、相手方行き違ひの廉々は扱人貰い受け、聊か申し分無く熟談内済仕り、偏に御威光と有難く仕合わせに存じ奉り候。依つては、右、一件に付き御願ひ筋御座無く、これに依り後證の為、濟口證文差し上げ申す處、件の如し

竹垣三右衛門御代官所

武州埼玉郡

小林村

花田村

中島村
川上金吾助御代官所

同州同郡

増林村

増森村

右五ヶ村

小前、村役人惣代

中島村名主

訴訟人 直八

増林村名主

同 又兵衛

増森村年寄

同 亀次郎

川上金吾助御代官所

同州同郡 大吉村

相手 名主 周次郎

同 年寄 啓次郎

百姓清蔵伴

同 儀助

同 百姓 直右衛門

同 百姓 佐兵衛

同 御代官所

同州同郡 向畑村

名主見習

同 次郎右衛門

同 百姓 兵右衛門

同 同 喜右衛門

同 同 和市

同 御代官所

同州同郡 川崎村

名主権兵衛伴

同 伊兵衛

同 御代官所

同州同郡 弥十郎村

年寄伴七伴

同 茂十郎

百姓弥左衛門伴

同 三五郎

同 御代官所

同州同郡 大杉村

同 年寄 軍蔵

右五ヶ村惣代

右

大吉村

相手 年寄 忠兵衛

向畑村

同 名主 運八

御奉行所様

以上が全文である。

このように、訴訟人の申し立てに対し、相手方は激しく反論し対立していたが、吟味（この場合は民事による調べ）中に扱人（仲裁人）が間に入り、双方の話し合いによって内済（和解）が成立した、と書かれている。この證文には扱人の氏名がないので、初めに仲介に出た松伏村名主石川民部は、自村に水害が及んで手を引き、川上金吾助代官所（増林村・増森村と大吉村外四ヶ村は同代官所支配）の勧めによる和解であろう。

参考 越谷地域の水害状況（越谷市史より）

安政六年七月二十三日から降り続いた雨により、七月二十五日に小針領備前堀が決潰した。この押水によって上瓦葺村（上尾市）の見沼用水掛樋が押し流され、綾瀬川通り一帯は洪水になった。元荒川も近年にない高水となり、七月二十六日には越ヶ谷本町新長屋通り堤防から溢れ出た。

越ヶ谷町ではこの溢れ水を徹夜の土俵積み上げ作業で防いだ。翌二十七日には川水がさらに一、二寸程上昇したので、堤防補強を一層急いで実施した。二十八日になると、今度は越ヶ谷町の対岸、花田村の俗称むし齒稲荷の堤防と、小林村川巢塚付近の堤防が危険にさらされた。このため花田村や小林村は破堤に備え、天嶽寺で早鐘を乱打して全村総動員の警備態勢をした。翌二十九日になると事態はいよいよ悪化し、ついに花田村の新土手そのほか処々で堤防が切れ、花田村耕地をはじめ新方領全域が水につかった。古利根川通りも堤防も切れた所が多

く、松伏領・二合半領もたちまち水につかった。

一方元荒川の高水防禦に成功した越ヶ谷領や八条領も、こん

どは綾瀬川通りの押水で背後から水をうけ大洪水になった。このため越谷地域は四面あますところない大海と化したので、日光道往來の旅人は、上り江戸行きが瓦曽根村の角久（屋号）から草加まで、下りが大沢町の町はずれから粕壁まで船で継送られた。この船はいずれも農家の船で、相対による船賃であったという。（以下略）



きみようちよらい地蔵尊
由来は遠くいにしへの

平方村のせんぞたち

延宝元年秋の月

二世安穩のためなりと

こゝに建立したもう

安産子育の御誓願

あまたの衆生をすくわんと

行きかふに立ち給ふ

またこの地区の約三十軒のうち当番にあたった三軒が

この地蔵の石仏と隣の庚申塔にお供えや飾り付けを行う。

夕方になるとこの地区の住民が三々五々ここにお参りに

やってくる。すでに用意された縁台にすわって雑談する

人もみられる。そして一方では白鳥電機店から照らされ

るライトの明かりのもとで何人かの婦人が中心になって

盆踊りを披露する。そのような集いが十時半頃まで続く。

飾り付けは、以前は白米を臼で粉にしてからふかして二

段飾りの供え餅を作って供えたり、手作りの造花を飾っ

たり、またお団子を供えたりした。そして翌日二十四日

に各戸に半紙で包んだお供え餅と造花を配ったという。

今では市販のお供え餅を供えるなどして簡略化し、さら

に翌日にお供え餅や造花を各戸に配ることはない。

図2、6、7、8、14、17、21、22、23、
43、44、45、48、49、54、62は庚申塔で

その霊験もあらたなり
浮世の変わりながめつ、

右手に錫杖 左手に

宝珠をもちしおん姿

無明を照す光なり

末代までもありがたや

南無南の地蔵尊

南無南の地蔵尊

(ルビは原文のまま)

ある。青面金剛の像容を刻んだものと「青面金剛」とか

「庚申塔」「庚申」と文字で刻んだ文字庚申塔とがある。

像容塔の方は「日月・青面金剛・二鶏・三猿」が基本形

である。青面金剛は手は六本あり、それぞれにさまざま

な武器を持ち、足元に鬼を踏み潰している。図2、7、

21、49がそうである。他は文字塔である。

図3は石橋供養塔である。日光道中から現在地に入る

所に橋が架けられていた。ここに新たに石橋が建立され

たことを記念し供養の意味も込めてこれを造立したので

ある。この石塔に刻まれた銘文によると、造立した一人

である願主・信誓意覚は浅草観音に毎月参拝し、それを

三年間も続けたという。江戸との人的交流がうかがえる。

この供養塔には言い伝えが残っている。江戸時代のこと、

この地に架かっていた橋がもろいため荷馬車が馬もろと

も川に落ちてしまった。馬は死んでしまった。そこでそ

の馬を連れて来た江戸浅草の人が土橋を頑丈な石橋に直

した。その記念にこの塔が建てられたという。

図4、61は、菅原道真(学問の神様、天神様)を祭

る天満宮の石塔である。神社の境内に天満宮の小祠を祭

ることがよく見られた。天神様の信仰は庶民の子供たち

の学習塾である寺子屋とも関連して盛んであった。

図5、9、42は普門品供養塔である。普門品という

經典の名を刻んだ刻経塔の一種である。「普門品」とは
「法華経」の中にある一観世音菩薩普門品第二十五」を

さしている。俗に『観音経』とも呼んでいる。普門品供養塔は観音経を誦する信仰が庶民の間に広まっていたあらわれである。

図10の石塔には、『女帝』との文字が見られる。つまり、この女体神社では、この頃すでに名称が卑しく感じたためか『女体』の代わりに『女帝』の文字が使われていたことを示すものである。地元の人は「によてい」神社とも言っている。

図11は無縫塔（卵塔）を描いた墓石である。この神社東側にあった寺院跡地から移された石仏類の一つである。図31のように無縫塔は僧侶の墓石によく使われた。

図12、18、65は六十六部廻国塔である。六十六部廻国とは、大乗妙典（法華経）をわが国の六十六カ国すべてに納めることを目的として六十六カ国を廻ることである。

図13、32、34、35、36、55、56は馬頭観音菩薩である。像容は頭の上に馬頭を置き、両手は胸の前で馬頭印を結んでいる。運送馬や農耕馬が普及するにつれ、江戸時代中頃から馬を使用する人々によって馬頭観音の信仰がさかんになった。それにともない馬の供養や馬の無病息災の祈願を込めて三面多臂の馬頭観音菩薩の石仏が全国各地で造立されるようになった。そして時代が下るにつれ死馬の供養としての墓石もみられてくる。この場合は一面二臂となる。図13や34、36は

馬の墓石であろう。

図14、17は道しるべを兼ねた文字庚申塔である。

図14は向かって左側面に『向大どまり道』と刻まれている。今はないが、ここから田を突っ切って大泊に通じている道があったのである。図17は向かって左側面に『右 粕壁道』と刻まれ、右は奥州道中に出て粕壁宿に通じることを示している。向かって右側面は『左 赤沼渡シ場』と刻まれ、左は香取神社先より土手道を通り、戸崎稻荷神社や西光寺を通じて赤沼渡し場に通じること示している。旧平方村案内地図を参照されたい。

図15は宝篋印塔である。本来の目的は宝篋印陀羅尼経をこの石塔の中に納め、その經典の供養のために造立されるものであるが、江戸時代中頃から村の有力者の墓石として多く造立されるようになった。

図16は板碑型をした初期の墓石である。板碑とは中世に見られた供養塔で、頂部が山形になっている。

図20は六阿弥陀参りのために寺院に建てた標識である。六阿弥陀参りとは阿弥陀如来を安置している六ヶ所の寺院を春と秋の彼岸に巡拝する信仰である。江戸の町で盛んに行われた。この越谷地域にも江戸の六阿弥陀参りをまねて『新六阿弥陀参り』として行われたのである。現在、増林の林泉寺に『新六阿弥陀二番』、ここ林西寺に四番、大泊の安国寺に五番、大松の清浄院に六番の標識が残っている。願主はすべて船渡村の受道である。

また登戸の報土院は三番であった。以上の寺院はすべて阿弥陀仏を本尊とする浄土宗寺院である。なお、一番は不明であるが、天岳寺かもしれない。

図24、25、26、53は『南無阿弥陀仏』と六字名号が刻まれた名号塔である。

図27、30は六面石幢に描かれた六地藏菩薩である。六地藏は、苦しみの『地獄』、貪りの『餓鬼』、愚かさの『畜生』、争いの『修羅』、『人』(人間)、喜びの『天』(天上)の六つの迷界である六道を輪廻転生する人々がどこにいて迷っていても救いの手を差し伸べられるようにと、六つの分身として表されたものである。図27は、向かって右から幢幡(一種の旗)を持つ地藏、合掌する地藏、天蓋(日よけの傘)を持つ地藏、両手で宝珠を持つ地藏、柄香炉を持つ地藏、宝珠と錫杖を持つ地藏である。図30は、向かって右側から右手は柄香炉を持つ地藏、右手は施無畏印で、左手は宝珠を持つ地藏、右手は錫杖を持ち、左手は与願印の地藏、両手で幢幡を持つ地藏、右手は錫杖、左手は宝珠を持つ地藏、両手で数珠を持つ地藏となる。上部には、遊化六道、拔苦與樂、法界平等と刻まれている。

図28は敷石が敷かれたのを記念して造立されたものである。

図29は白石六兵衛が建立した供養塔で、子供にすがられてゐる地藏菩薩が実によく描かれている。地藏にす

がっている子供は安永八年(一七七九)八月二十四日に亡くなった到開童子を指し、その両親は孝養長順信士と團營恵林信女であろう。

図31は吞龍上人の墓石である。群馬県太田市の金山にある大光院は『子育て吞龍』として有名であるが、吞龍上人は弘治二年(1556)に平方村の隣にある一ノ割村(現、春日部市)で井上將監信貞の次男として生まれ、永禄十二年(1569)、十四才の時に浄土宗の林西寺に入り、第八世叡井のもとで出家し、名を曇龍と称した。二年後に浄土宗の増上寺の学寮に入り深く学んだあと、天正十二年(一五八四)に林西寺にもどり第九世の住職となった。吞龍上人が大光院を開山し、悪龍を呑み込む夢を見て名を曇龍から吞龍と改めたのは後のことである。吞龍上人は大光院にて元和九年(一六二三)に亡くなっているが、その時に大光院に造立された墓石はここ林西寺に造立された墓石と同じであるという。

図37は、平方村から対岸の備後村に渡るための石橋が完成したのを記念に建立された石橋供養塔である。

図38、50は不動明王三尊像である。中央には炎の中に岩座にすわる不動明王が剣と羂索を持ち、下には不動明王の脇侍である矜羯羅(向かって右)・制多迦(向かって左)の二童子がある。矜羯羅童子は優しい顔付きをして立っていて、開敷蓮華(蓮の花が開いた花)と未敷蓮華(まだ開いていないつぼみの花)とがついた長い

蓮華の柄を、左手は上げて右手は下げて両方の手で持つ姿である。また制多迦童子は怖い顔付きをして、半跏座で、左手は胸のあたりの衣をつかみ、右手は下げ宝棒を持って、いる姿をしている。これらの像容は成田山新勝寺のものと同じである。図38の二童子の間には『成田山』との文字が刻まれているが、図50はその部分が空欄となっていて『成田山』の文字は見られない。刻み忘れたのであろうか。

図39の『石坂』とは石段のことである。石段が完成した記念に建立されたものである。

図40は石造の鳥居が完成した記念に建立されたものである。

図41の『大天狗』『小天狗』を伴った石尊大権現とは神奈川県の大山にある阿夫利神社の本尊である。石塔に刻まれている『小御岳』とは大山をさすのである。大山石尊さん（大山大聖不動明王石尊大権現）の石尊参り（大山参り）は、江戸時代に関東のみならず東海一円で盛んであった。

図46と58は水神様を祭る石塔である。古利根川が荒れ狂うのをなだめようと造立したものであろう。

図47は図3と同じ石橋供養塔である。昔はこの地に橋が架かっていた。つまり近くの古利根川から用水とし水を取り、その用水路は平方五一二番地の小川家と六二九番地の中村家との間を通して平方北通り（この名称は

越谷市制施行三十周年を記念して名付けられたもの）を横断していた。小川家を使用している平方北通りに入る南北の直線道は用水路跡地である。

図51は六地藏の石塔である。向かって右から、香炉を持つ地藏、天蓋（一種の日よけ傘）を持つ地藏、宝珠と錫杖を持つ地藏、数珠を持つ地藏、幢幡を持つ地藏、合掌する地藏が描かれている。

図52は十三仏塔である。最上段には虚空蔵菩薩、二段目は向かって右側から大日如来、阿如来、阿弥陀如来、三段目は薬師如来、観音菩薩、勢至菩薩、四段目は弥勒菩薩（本来なら宝塔を持つが、この像は持たない）、地藏菩薩、普賢菩薩、最下段は不動明王、釈迦如来、文殊菩薩の計十三の仏さまが描かれている。十三仏信仰とは、十三仏をそれぞれの忌日に本尊として死者の追善供養をするものである。この十三仏信仰の名残が今日でも見られる。人が死亡してから七日目の初七日の法事（法要）から始まって、数えて三十三年目の三十三回忌までの計十三回の法事にそれぞれの本尊として配当されている。それぞれの本尊をあげると次の通りである。

初七日は不動明王、二七日は釈迦如来、三七日は文殊菩薩、四七日は普賢菩薩、五七日は地藏菩薩、六七日は弥勒菩薩、七七日は薬師如来、百ヶ日は観音菩薩、一周忌は勢至菩薩、三回忌は阿弥陀如来、七回忌は阿如来、十三回忌は大日如来、三十三回忌は虚空蔵菩薩となる。

図53は浄土宗を開いた円光大師法然の像が見られる。法然は「専修念仏」（専ら念仏を修めなさい）を奨励し、百万遍唱えることを目標とさせている。この名号塔には「百万遍」との文字が刻まれている。

図57は平方一〇〇番地の大塚家にある墓石である。この墓石には次のような言い伝えが残っている。戸崎の宇田川家の本家（現、平方一〇五七）より大塚家に嫁いだ娘（この墓石の銘文によると、喚誉清倫）が亡くなると、宇田川家（銘文によると、宇田川七郎右衛門）は娘のためにこの大塚家の地に墓を建てた。そして供養しにここまでよく出向いたが、それが大変なためこの墓石を自分の屋敷内に移した。すると宇田川家では不幸が続出した。そこで元の場所である大塚家に戻したと言う。大塚家は勿論のこと、今でも宇田川家の人によって八月二十四日の地藏盆の時などに大切に供養がなされている。なお墓石は宇田川家に向けて建てられている。

図58は図46と同じく水神宮の石塔である。このあたりは対岸の赤沼に渡るための渡し場があった所で、ここに渡し守を務める小早川家（現在は、平方九六三―一に移転）が住んでいた。今でも小早川家の人が供養をしている。

図59は弁才天十五童子の石祠である。弁才天は十五人の童子を従えているという。

図60の石祠には「本宮」との文字が見られる。本宮

とは神社の本社という意味ではあるが、ここでは熊野本宮をさしているのであろうか。つまり「本宮大権現」とは熊野三社の一つ熊野本宮（熊野坐神社）に祭られている「家都御子神」を指すのであろう。

図63は銘文を見ると「庚申の供養」と刻まれているので庚申塔である。江戸時代の寛文年間（一六六一―七二）になると青面金剛と呼ばれる仏様が初めて主尊として描かれるようになる。それまでは阿弥陀如来であったり地藏菩薩であったり、主尊が一定していなかった。主尊を如意輪観音菩薩としたこの庚申塔は江戸時代初期の貴重な庚申塔である。

図64は頭上に多くの顔はないが、手がたくさんあるので千手観音菩薩像と思われる。千手観音の像容は中央の合掌した手の他に左右併せて十六手あり、また頭上には十一個くらいの顔があるのが普通である。

2. 旧大泊村の石仏類

大泊観音堂は千手観音菩薩を本尊として祀り、左甚五郎が一夜で建立したとの言い伝えがあり、馬喰たちなどの参詣で大いに賑わった。堂内右手上方には縁日の賑わいを描いた額絵馬が掲げられている。

この境内には図1の六観音石幢がある。六種類の観音菩薩像が浮き彫りされている。正面から時計回りに紹介すると、如意輪観音、十一面観音、馬頭観音、合掌する

観音、千手観音、正観音である。台石には大泊村の名主である高崎三左衛門の名前が見られる。図2の仏は頭上に十面の顔があり、さらに多臂であるので千手観音と思われる。図3・4・5は庚申塔である。主尊である腕が六本もある青面金剛は鬼を踏みつぶし、三猿を従えている。上部には日月が見られる。図7の地藏菩薩像には輪廻車（後生車、地藏車）を設置するためにあけた大きな空洞がある。現在は輪廻車はない。図8は

『またもとの くにへ生れむ たねふくべ』

と詠んだ辞世の句を刻んだ石塔である。図10・11・12は六地藏を刻んだ石幢である。宝珠と錫杖を持つ地藏、数珠を持つ地藏、天蓋（一種の日傘）を持つ地藏、柄香炉を持つ地藏、幢幡（一種の旗）を持つ地藏などさまざまなものである。

大泊香取神社には、図14の鈴羯羅・制多迦の二童子を従えた不動明王像の石塔がある。『成田山』との文字が大きく刻まれている。成田山新勝寺に参詣した記念として造立されたものであろう。奉納者や造立年代は不明である。

大泊安国寺はもと熊谷蓮生坊直実の営む草庵であったという。室町時代になると足利尊氏が夢窓疎石の勧めで国家の安泰と戦死者の冥福を祈って国ごとに安国寺を建立した。この大泊の安国寺はその一つであるという。

安国寺の門を入ると右手には大きな宝篋印塔が目につ

く。本寺の中興である宏善上人が明治四年三月に再建したものである。左手は墓地となっている。その墓地内には図18の『南無阿弥陀仏 雨晴』と刻まれた名号塔、安政コレラがこの地にも流行し被害を受けたことがきっかけとなって結成した『万人講』を記念として造立された図19の名号塔、さらに明治二十五年に他界した宏善上人の供養墓塔（上部には地藏菩薩像が載せてある）がある。

図18の名号塔の向かって左側面には『かれがれの いねもあをさに かへるなり 神のめぐみの 雨のふりきて』との宏善上人の短歌が刻まれている。図19の名号塔の裏面には安政五年（一八五二）に長崎に上陸したコレラが東進して江戸に達した時のこの近辺の様子が宏善上人によって刻まれている。江戸近在のコレラ大流行の当時の様子を知る貴重な碑文といえる。その碑文内容については安国寺に置いてある資料をご覧いただきたい。地藏菩薩像付きの宏善上人の墓塔には数えきれないほどの多くの人々の名前が刻まれているが、上人の遺徳の偉大さが偲ばれる。

この墓地の奥の南西の隅には、図20の六地藏石幢、図21の名号塔、図22、23の庚申塔、図25の三界万霊塔や図24の『新六阿弥陀五番』の標識石塔がある。この六阿弥陀参りに関しては旧平方村の林西寺の項を参照されたい。

3. 旧上間久里村の石仏類

地元では下堂と呼んでいるこのお堂はもと稲荷山正覚院（真言宗寺院）の跡地である。江戸時代の上間久里村名主である上原家の墓塔が多く見られる。この墓地内に図1の巡礼塔がある。西国三十三ヶ所、四国八十八ヶ所、秩父三十四ヶ所、坂東三十三ヶ所のすべての巡礼地合わせて百八十八ヶ所を徒歩で巡った記念の石塔である。巡礼の盛んさが窺える。

上間久里の閻魔堂の塀の外の道路側に並べられている庚申塔などの石仏類（図2・7）は、不動三尊像石塔を除いてはすべて上間久里自治会館北西側道路沿いの地にあったものである。この地にはかつて地藏堂があったが、道路の拡張にともない消滅し、現在の自治会館となった。不動明王三尊線刻像の石塔はもと閻魔堂北東の今はなき道路沿いにあったが、ここに移転してきたのである。

この石塔は明治十八年（一八八五）に不動信仰のための『神風社』という講を記念して造立されたものである。なかなかよく描かれた不動三尊像である。

図5の念仏塔の本尊は肉髻と螺髪が見られ、さらに左右の手とも人差し指が伸びていないために阿弥陀来迎印を結んでいる如来像と推定できる。また、この像の両脇には阿弥陀四十八誓願にちなんで四十八名の人名がびっしりと刻まれていて珍しい。

4. 旧下間久里村の石仏類

下間久里香取神社は例年七月十五日に行われる『下間久里の獅子舞』として有名で、県の無形文化財に指定されている。この境内に木製の祠に収められた図1の瘡瘡神供養塔がある。江戸時代は瘡瘡（天然痘）はとても恐れられ、瘡瘡除けのまじないとしての、鍾馗様、鎮西八郎為朝、桃太郎などを赤色で描いた『赤絵』と呼ばれる護符があちこちで売られた。一度この厄を切り抜けて命が助かると免疫となって二度とかわらなくなるが、あばたを残したり、中には失明をする者も多かった。そのために瘡瘡神への信仰は庶民の間によく広まった。

下間久里公民館の百メートル南先の道路西側に集会所と墓地がみられる。春日山開演寺（真言宗）の跡地と推定されている。地元では『寮』と呼んでいる。この墓地内には筆子（寺子屋の生徒）だった教え子ら五十五人が師匠金子源次郎、かつ（船渡村出身）夫婦のために安政二年（一八五四）に建立した図3の墓塔がある。金子家（下間久里一三八六）の先祖が江戸時代にこの開演寺で師匠となつて寺子屋を営んだのであろう。

日光道中から離れて奥まったところにある不動堂は金子家（下間久里一三八六）が代々管理している。不動堂は開演寺境内の一部であり、また金子家とは何らかの密接な関わりがあったのであろう。『越谷市金石資料集』の「普請供養九番」によると、開演寺の建立を示す安永七

年（一七七八）六月十日建立の「奉建立開演寺一字」と刻まれた柱状型の普請供養塔がこの不動堂境内にあるというが、残念ながら今は不明である。願主は下間久里村の開厳法師となっている。

この境内には出羽三山供養塔や百堂巡礼塔、庚申塔などがある。図4は出羽三山供養塔である。出羽三山とは山形県にある月山、羽黒山、湯殿山をさし、修験道の山々である。三山のうち特に湯殿山は庶民にとって最も崇拜している山である。講中の仲間たちが出羽三山を巡拝した記念として造立したものである。図11は神社仏閣の百のお堂巡りが完了したのを記念して造立したものである。数にものを言わせて功德を得ようとする百堂巡りは千社参りとともに盛んに行われた信仰である。図8は板碑型をしているので初期の庚申塔とわかる。庚申塔の中には数が多ければ多いほどそれだけ功德があるとの考えから『百庚申』と刻むものがあるが、図9はさらに欲張って『千庚申』と刻んでいる。

5. 旧大里村の石仏類

大里自治会館は春日山秀蔵院（真言宗寺院）の跡地である。この墓地には多くの庚申塔がみられる。特に図4は、女人を左手でぶら下げている青面金剛像であるが、左手を降ろしているのではなく、上方に挙げて女人をぶら下げる姿を描いているのが珍しい。

図7の大六天とは、正しくは「第六天」と書き、この天に生まれた者は他の作り出した楽しみを自由自在に自分の楽しみとすることができるといふ。他化自在天ともいう。この天には仏法の妨げをするといわれる魔王の住所があるといふ、「第六天の魔王」の魔力で願い事をおこなえてもらおうとする信仰のあらわれである。

藤田家（大里八二三番地）北隣りにある吉田家（大里八二二一）の旧日光道中に面した入り口北側あたりに数基の石仏類があり、これら石仏類は藤田家が管理してきたという。今は開発の波に飲まれ、惜しくも撤去・処分されてしまった。処分される前にこれらの石仏類を紹介した『越谷ふるさと散歩（下）』（本間清利氏著）から失われた石仏類を推定すると次の四基である。

寛文九年の供養塔、天和二年の地藏像供養塔、元禄十一年の観音像供養塔、寛政二年の青面金剛庚申塔このうち寛文九年（一六六九）の供養塔は、『越谷市金石資料集』に載せてある「庚申塔八番」によると、寛文九年十月二十七日の造立の板碑型で、日月・三狼が見られ、『奉造立石仏□□庚申塔□□』と刻まれた庚申塔であるという。つまり貴重な初期の庚申塔であった。

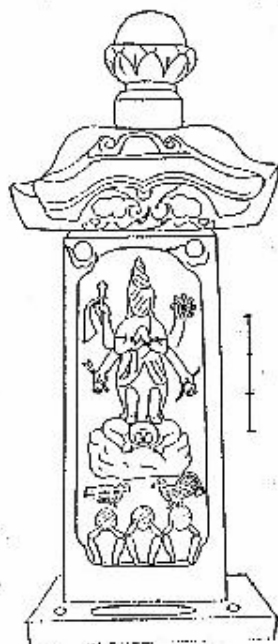
大里五三四番地の中村家路傍には中村家が代々管理している図10の庚申塔が建っている。奉納者名を見ると大部分が中村の名前が刻まれている。中村家と縁が深い庚申塔であろう。

旧平方村

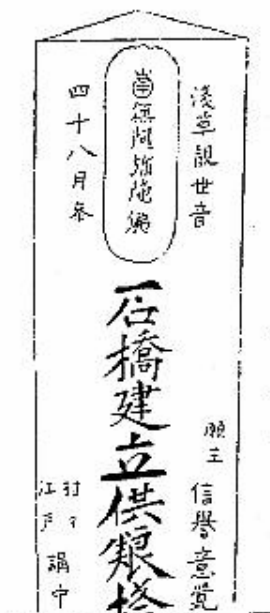
1. 平方
南の地藏尊念仏塔



2. 平方
庚申塔



3. 平方
石橋供養塔



4. 平方
天満宮石祠



5. 平方
普門品供養塔



6. 平方
庚申塔



7. 平方
庚申塔



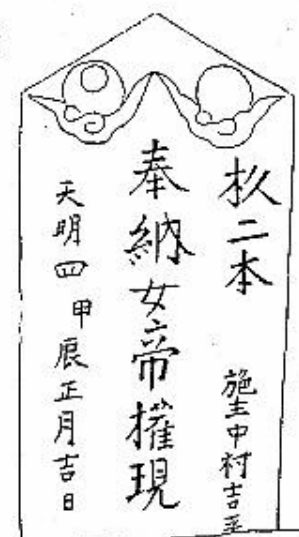
8. 平方
庚申塔



9. 平方
普門品供養塔



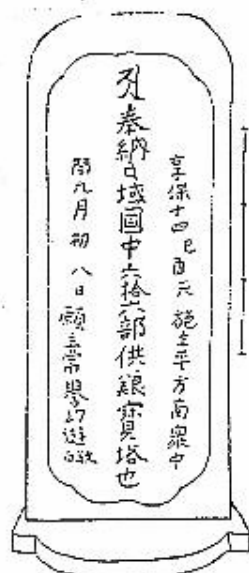
平方
10. 奉納記念塔



平方
11. 僧侶の墓塔



平方
12. 六十六部廻国塔



平方
13. 馬頭観音菩薩像



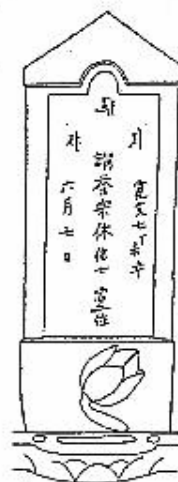
平方
14. 道標をかねた庚申塔



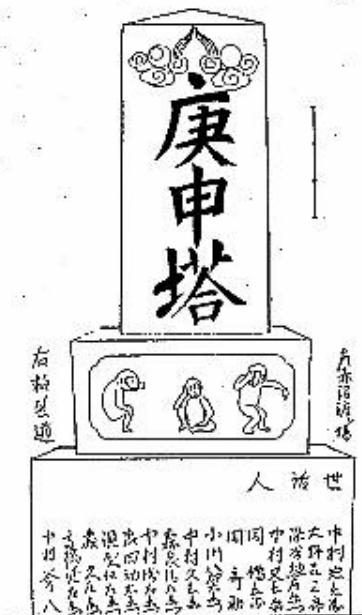
平方
15. 宝篋印塔



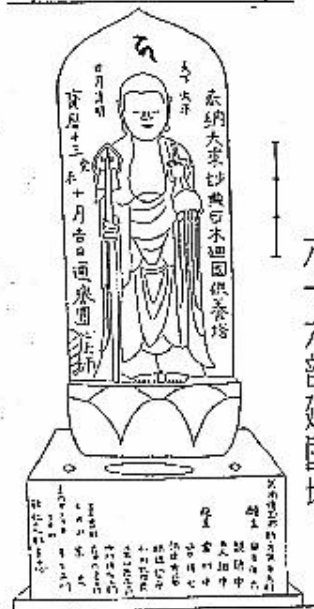
平方
16. 初期の墓塔



平方
17. 道標をかねた庚申塔



平方
18. 地藏菩薩像付き 六十六部廻国塔



19. 地藏菩薩像



20. 『新六阿彌陀仏四番』
標識石塔



21. 庚申塔



22. 庚申塔



23. 庚申塔



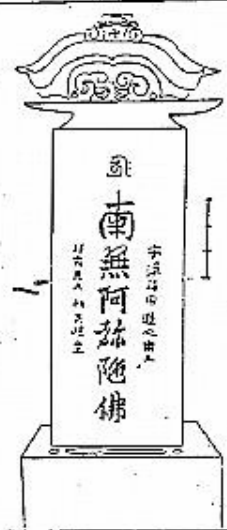
24. 名号塔



25. 名号塔



26. 名号塔



27. 六面幢六地藏



平方
28・丸彫地藏菩薩像付き
敷石供養塔



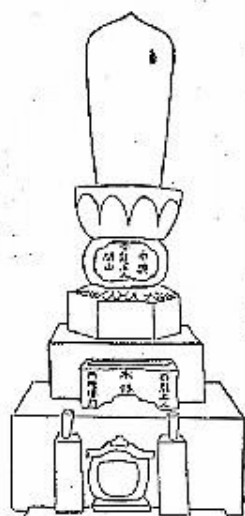
平方
30・六地藏石幢



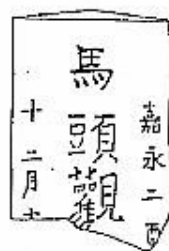
平方
29・地藏菩薩像



平方
31・吞龍上人墓標の無縫塔



平方
32・馬頭観音菩薩文字塔



平方
33・地藏菩薩像



平方
34・馬頭観音菩薩像



平方
35・馬頭観音菩薩像



36. 馬頭觀音菩薩像



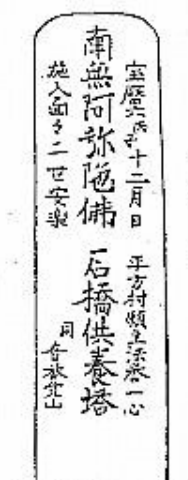
39. 石段供養塔



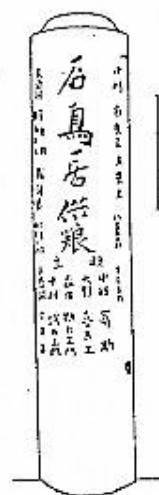
42. 普門品供養塔



37. 名号付き石橋供養塔



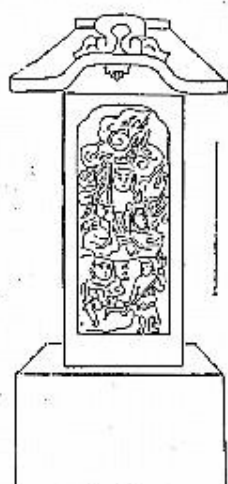
40. 石鳥居供養塔



43. 庚申塔



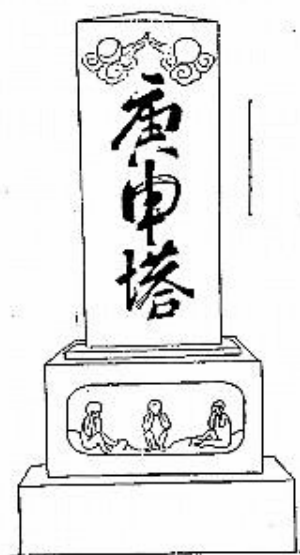
38. 不動三尊像



41. 大山石尊供養塔



44. 庚申塔



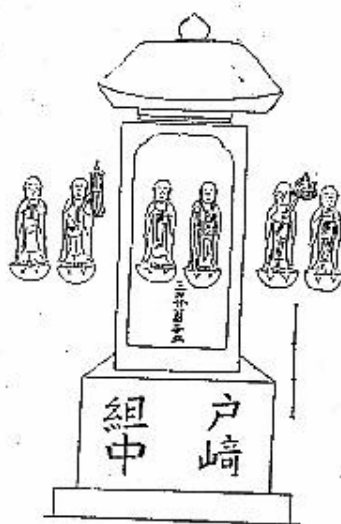
45. 庚申塔 平方



48. 庚申塔 平方



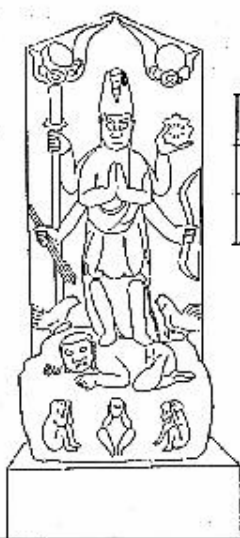
51. 六地藏塔 平方



46. 水神宮石祠 平方



49. 庚申塔 平方



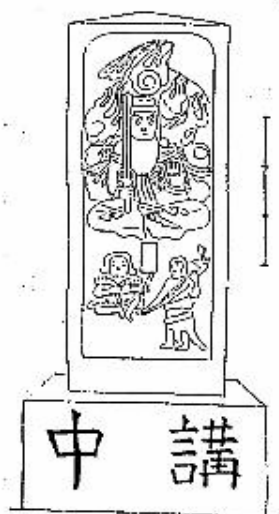
52. 十三仏塔 平方



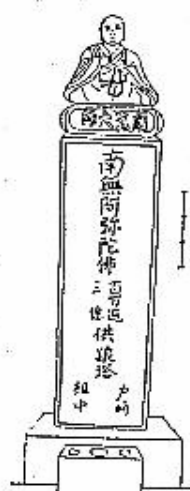
47. 石橋供養塔 平方



50. 不動三尊像 平方



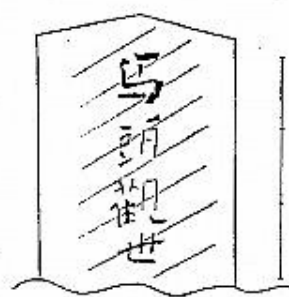
53. 丸彫り法然像付き
名号塔 平方



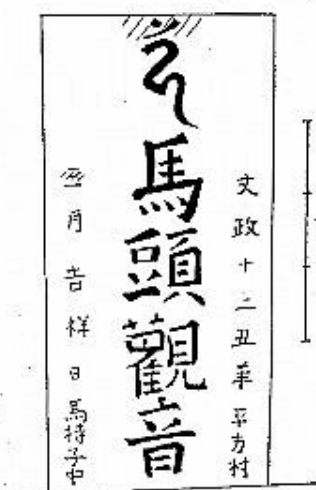
54. 庚申塔 平方



55. 馬頭観音菩薩文字塔 平方



56. 馬頭観音菩薩文字塔



57. 地藏菩薩像の墓塔 平方



58. 水神宮文字塔 平方



59. 弁才天十五童子石祠 平方



60. 本宮大権現石祠 平方



61. 天満宮文字塔 平方



62. 庚申塔 平方



旧大泊村

1. 大泊
六観音石幢



2. 大泊
千手観音菩薩像



3. 大泊
文字庚申塔



4. 大泊
青面金剛像庚申塔



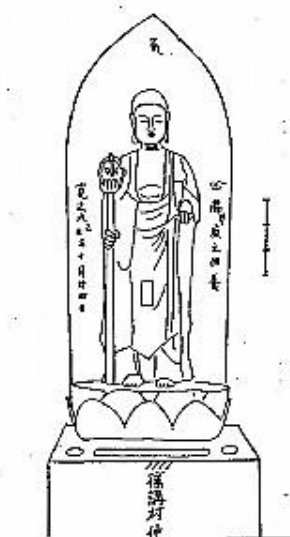
5. 大泊
青面金剛像庚申塔



6. 大泊
普門品供養塔



7. 大泊
輪廻車付き地藏菩薩像

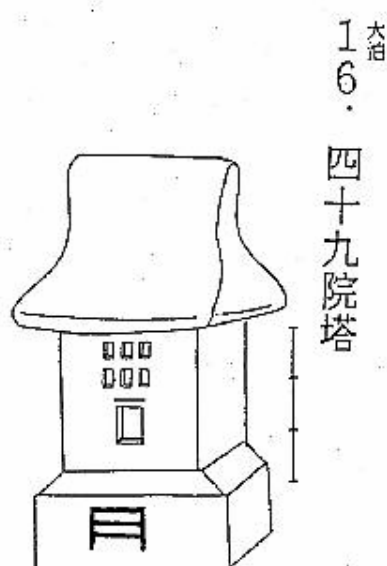
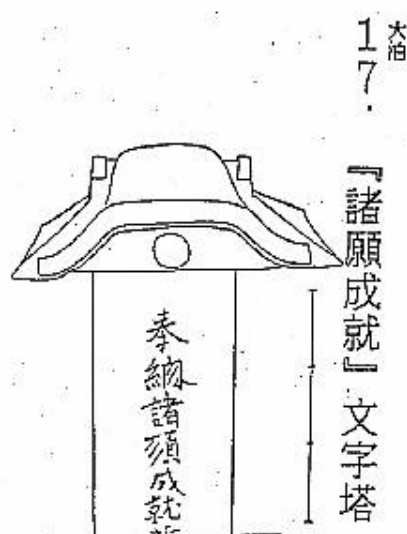
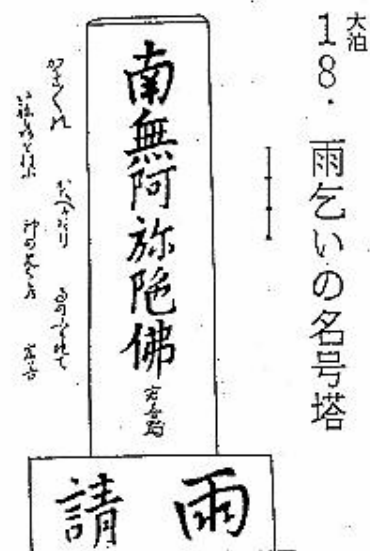
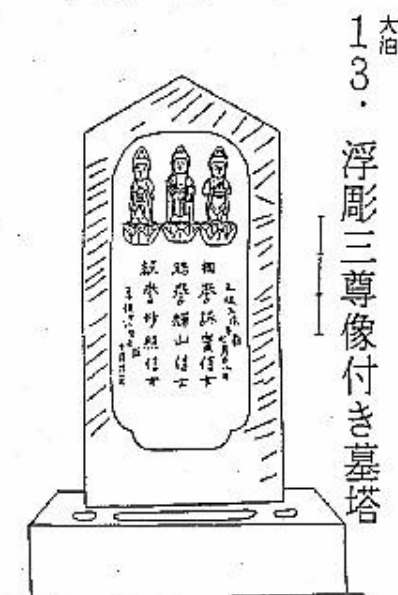
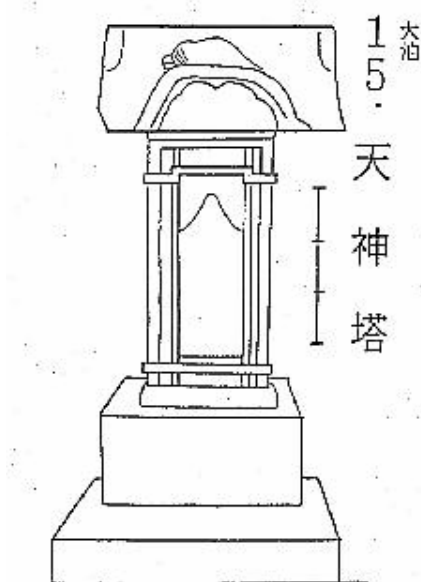
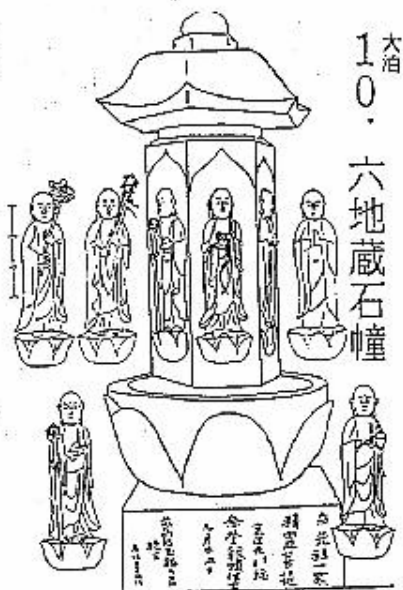


8. 大泊
精霊供養塔



9. 大泊
地藏菩薩像墓塔





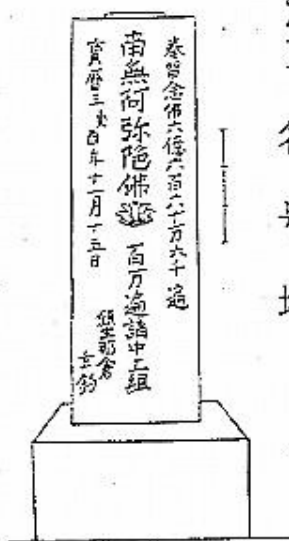
19. 安政コレラの名号塔



20. 六地藏石幢



21. 名号塔



22. 青面金剛像庚申塔



23. 文字庚申塔



24. 六阿弥陀五番標識石塔



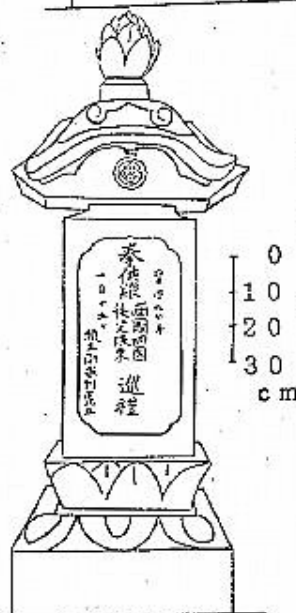
25. 三界万靈塔



26. 馬頭觀音像



旧上間久里村
1. 巡拝塔



上間久里
2. 文字庚申塔



上間久里
3. 青面金剛像庚申塔



上間久里
4. 青面金剛像庚申塔



不動明王三尊線刻像(明治十八年)

吉岡重太郎
五原治郎右衛門



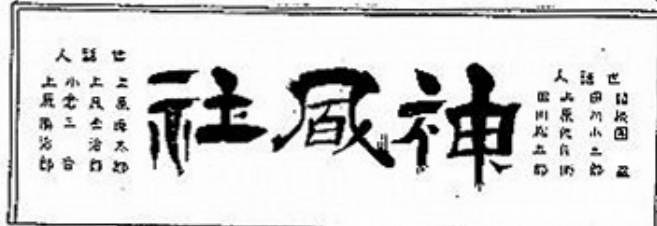
形内婆安金剛像足

鶴龜山鎮

上間久里
5. 阿弥陀如来像付き念仏塔

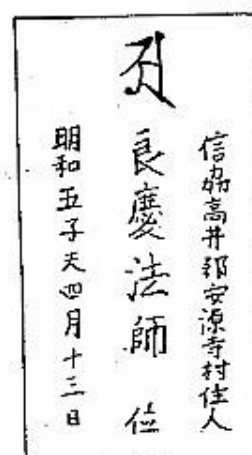


上間久里
6. 名号塔

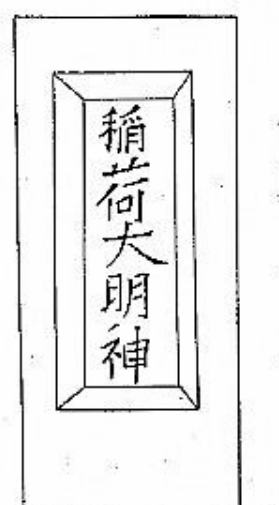


上間久里間魔堂南東側道路沿い

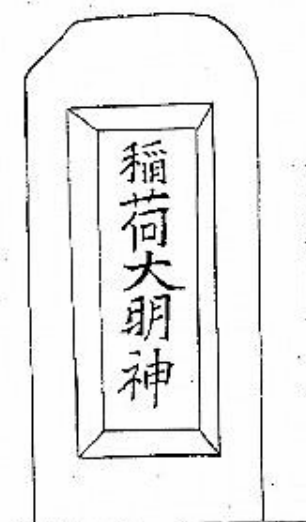
7. 上間久里
供養塔



8. 上間久里
『稻荷大明神』文字塔

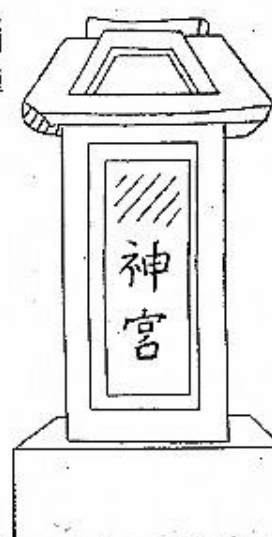


9. 上間久里
『稻荷大明神』文字塔



10. 上間久里

『神宮』文字塔



11. 上間久里
『良公神』文字塔

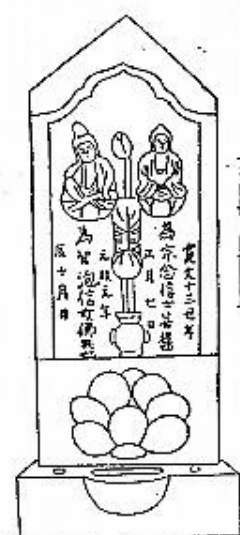


1. 下間久里
旧下間久里村
庖瘡神供養塔



2. 下間久里

阿弥陀・如意輪
浮彫り像付き墓塔



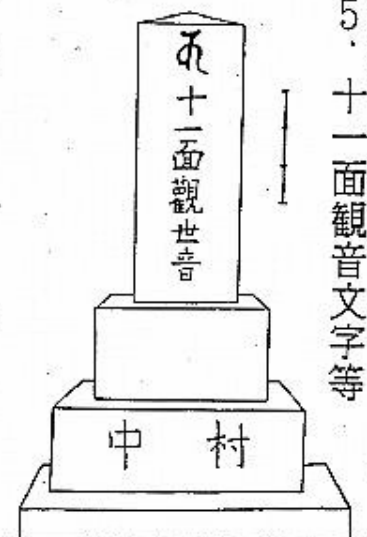
3. 下間久里
筆子建立墓塔



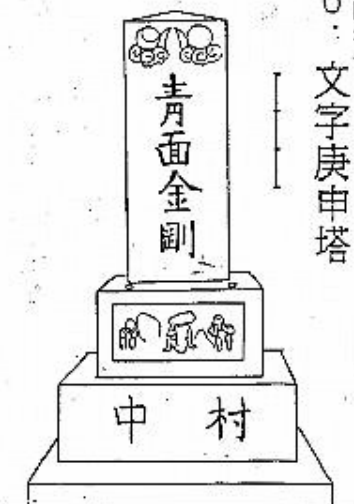
4. 下間久里
出羽三山供養塔



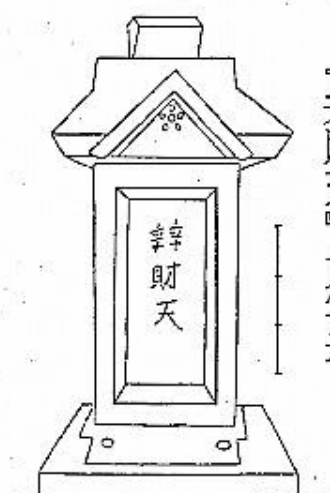
5. 下間久里
十一面觀音文字等



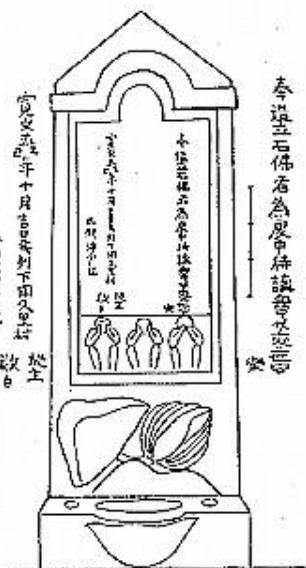
6. 下間久里
文字庚申塔



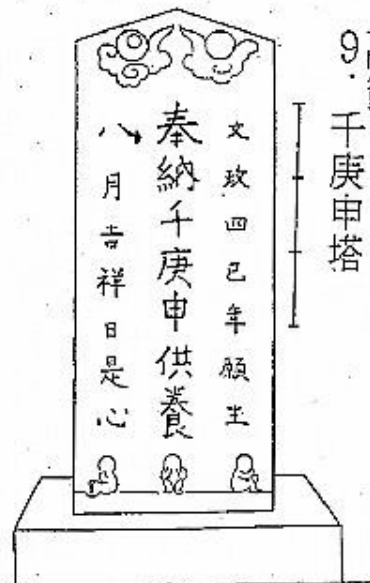
7. 下間久里
『弁財天』文字塔



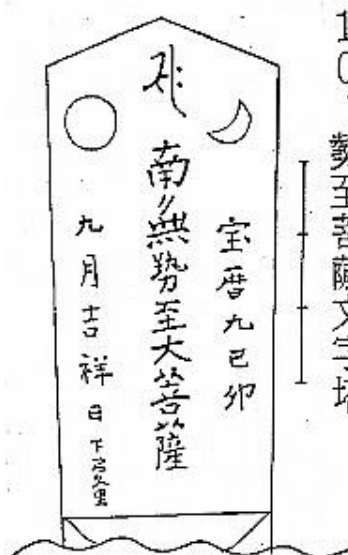
8. 下間久里
初期庚申塔



9. 下間久里
千庚申塔



10. 下間久里
勢至菩薩文字塔



11. 下間久里
百堂巡礼塔



12. 下間久里
青面金剛像庚申塔



1. 大里村
永代施餓鬼供養誌塔



2. 大里
文字庚申塔



3. 大里
文字庚申塔



4. 大里
青面金剛像庚申塔



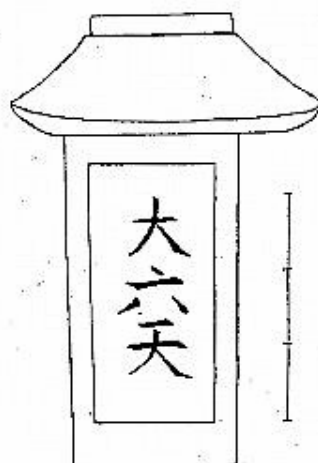
5. 大里
普門品供養塔



6. 大里
文字庚申塔



7. 大里
『大六天』文字塔



8. 大里
名号塔



9. 大里
出羽三山供養塔



10. 大里
中村家青面金剛像庚申塔



安政コレラの碑

乙未年七月のめいあやしき夜お來初て世命ふてやみの一ア醫むえんひもく小あつ傳
 阿つれふとこのあくうせり人よく世はくのかくつとおたしれの高とて八月廿七日より
 十月までの月までおつれある限は精全ふつとひ種はれ今てを救はれ小體佛の竹急喝へてき
 しとひつるいひとくかあもやとていあくうとあふふをのうあれわふとて拘せふハ
 あつれや其現世の自むくひさめなふやあんといともたふとくそんえは度碑をつり
 ちとてらんやれいよくいせつとあれ喝めそののれささくあつて後の世に彼人てとてふ
 一つ其の世よりあつ小体の佛ををあふらんわ 疑ふるくとあふらん其所由あるさき
 と善業の抑えをかりしにやとてあふとて

去年の七月はかり いとあやしき傑出^{きやくしゅつ}米^{こめ} 初^{はつ}て世^よ中^{ちゆう} なへてやミのしり 医^いむかへん ひまだにあらで
あはれにも はかなくうせにし人よ いくそバクか かそへも尽^つぬ それが為にとて 八月廿七日より
十月望^{しやう}の日までこゝろある限^{かぎ} 此^こ摺^{すり}合^あにつとび 相^あ々^々の乎^か向^{むか}して 晝^{ひる}夜^やわかず 弥^や陀^だ仏^{ぶつ}の御^お名^な唱^なへて 懸^か二^に
とふらひつる 此^こひとく^くにハ 露^るもやミたるハあらざりき せらるハ おのか志^ししの為にとて 物^{もの}せしにハ
あらねと 其^{その}功^{こう}徳^{とく}の旨^{しみ}にむくびきめる故^{ゆゑ}にやあらんと いとらふとく 算^{そろ}えて 此^こ度^{たび}障^{さう}をつくり
尚^{なほ}もとてなん か^かれバ いよく 此^こ世^よは万^{まん}の機^け事^じをのかれ さきくなからへて 後^{のち}の世^よは彼^あら^た々^々とにも
一^{いつ}つ蓮^{れん}の台^{たい}にのり 常^{じょう}に月^{げつ}の御^お面^{めん}をあふかん事^{こと} 疑^{うたが}ふへくもあらずなん 其^{その}所^{ところ}由^{よし}しる さまく
宮^{みや}築^{つく}の拙^{せつ}きを かへりみず やかて筆^{ふで}をとる

人の身は あざきねさしの 光なれやししの おくにも かれぬはかりそ
みつせ川 わたりわつらふ 人しあらハ ねひをしとりて するへをハせん

安政 六年 十月 行 誓 宏 善

安政六年十月

行營宏崗

※のしるゝ勢いが盛んである

いくぞばく(幾十許)……幾何

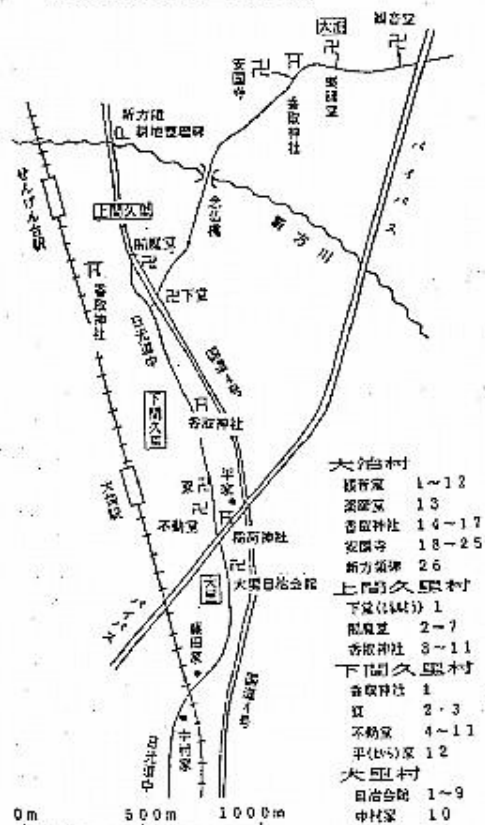
わかず…分かず

27. 28. 29. 30. 31. 32. 33. 34. 35. 36. 37. 38. 39. 40. 41. 42. 43. 44. 45. 46. 47. 48. 49. 50. 51. 52. 53. 54. 55. 56. 57. 58. 59. 60. 61. 62. 63. 64. 65. 66. 67. 68. 69. 70. 71. 72. 73. 74. 75. 76. 77. 78. 79. 80. 81. 82. 83. 84. 85. 86. 87. 88. 89. 90. 91. 92. 93. 94. 95. 96. 97. 98. 99. 100. 101. 102. 103. 104. 105. 106. 107. 108. 109. 110. 111. 112. 113. 114. 115. 116. 117. 118. 119. 120. 121. 122. 123. 124. 125. 126. 127. 128. 129. 130. 131. 132. 133. 134. 135. 136. 137. 138. 139. 140. 141. 142. 143. 144. 145. 146. 147. 148. 149. 150. 151. 152. 153. 154. 155. 156. 157. 158. 159. 160. 161. 162. 163. 164. 165. 166. 167. 168. 169. 170. 171. 172. 173. 174. 175. 176. 177. 178. 179. 180. 181. 182. 183. 184. 185. 186. 187. 188. 189. 190. 191. 192. 193. 194. 195. 196. 197. 198. 199. 200. 201. 202. 203. 204. 205. 206. 207. 208. 209. 210. 211. 212. 213. 214. 215. 216. 217. 218. 219. 220. 221. 222. 223. 224. 225. 226. 227. 228. 229. 230. 231. 232. 233. 234. 235. 236. 237. 238. 239. 240. 241. 242. 243. 244. 245. 246. 247. 248. 249. 250. 251. 252. 253. 254. 255. 256. 257. 258. 259. 260. 261. 262. 263. 264. 265. 266. 267. 268. 269. 270. 271. 272. 273. 274. 275. 276. 277. 278. 279. 280. 281. 282. 283. 284. 285. 286. 287. 288. 289. 290. 291. 292. 293. 294. 295. 296. 297. 298. 299. 300. 301. 302. 303. 304. 305. 306. 307. 308. 309. 310. 311. 312. 313. 314. 315. 316. 317. 318. 319. 320. 321. 322. 323. 324. 325. 326. 327. 328. 329. 330. 331. 332. 333. 334. 335. 336. 337. 338. 339. 340. 341. 342. 343. 344. 345. 346. 347. 348. 349. 350. 351. 352. 353. 354. 355. 356. 357. 358. 359. 360. 361. 362. 363. 364. 365. 366. 367. 368. 369. 370. 371. 372. 373. 374. 375. 376. 377. 378. 379. 380. 381. 382. 383. 384. 385. 386. 387. 388. 389. 390. 391. 392. 393. 394. 395. 396. 397. 398. 399. 400. 401. 402. 403. 404. 405. 406. 407. 408. 409. 410. 411. 412. 413. 414. 415. 416. 417. 418. 419. 420. 421. 422. 423. 424. 425. 426. 427. 428. 429. 430. 431. 432. 433. 434. 435. 436. 437. 438. 439. 440. 441. 442. 443. 444. 445. 446. 447. 448. 449. 450. 451. 452. 453. 454. 455. 456. 457. 458. 459. 460. 461. 462. 463. 464. 465. 466. 467. 468. 469. 470. 471. 472. 473. 474. 475. 476. 477. 478. 479. 480. 481. 482. 483. 484. 485. 486. 487. 488. 489. 490. 491. 492. 493. 494. 495. 496. 497. 498. 499. 500. 501. 502. 503. 504. 505. 506. 507. 508. 509. 510. 511. 512. 513. 514. 515. 516. 517. 518. 519. 520. 521. 522. 523. 524. 525. 526. 527. 528. 529. 530. 531. 532. 533. 534. 535. 536. 537. 538. 539. 540. 541. 542. 543. 544. 545. 546. 547. 548. 549. 550. 551. 552. 553. 554. 555. 556. 557. 558. 559. 560. 561. 562. 563. 564. 565. 566. 567. 568. 569. 570. 571. 572. 573. 574. 575. 576. 577. 578. 579. 580. 581. 582. 583. 584. 585. 586. 587. 588. 589. 590. 591. 592. 593. 594. 595. 596. 597. 598. 599. 600. 601. 602. 603. 604. 605. 606. 607. 608. 609. 610. 611. 612. 613. 614. 615. 616. 617. 618. 619. 620. 621. 622. 623. 624. 625. 626. 627. 628. 629. 630. 631. 632. 633. 634. 635. 636. 637. 638. 639. 640. 641. 642. 643. 644. 645. 646. 647. 648. 649. 650. 651. 652. 653. 654. 655. 656. 657. 658. 659. 660. 661. 662. 663. 664. 665. 666. 667. 668. 669. 670. 671. 672. 673. 674. 675. 676. 677. 678. 679. 680. 681. 682. 683. 684. 685. 686. 687. 688. 689. 690. 691. 692. 693. 694. 695. 696. 697. 698. 699. 700. 701. 702. 703. 704. 705. 706. 707. 708. 709. 710. 711. 712. 713. 714. 715. 716. 717. 718. 719. 720. 721. 722. 723. 724. 725. 726. 727. 728. 729. 730. 731. 732. 733. 734. 735. 736. 737. 738. 739. 740. 741. 742. 743. 744. 745. 746. 747. 748. 749. 750. 751. 752. 753. 754. 755. 756. 757. 758. 759. 760. 761. 762. 763. 764. 765. 766. 767. 768. 769. 770. 771. 772. 773. 774. 775. 776. 777. 778. 779. 780. 781. 782. 783. 784. 785. 786. 787. 788. 789. 790. 791. 792. 793. 794. 795. 796. 797. 798. 799. 800. 801. 802. 803. 804. 805. 806. 807. 808. 809. 810. 811. 812. 813. 814. 815. 816. 817. 818. 819. 820. 821. 822. 823. 824. 825. 826. 827. 828. 829. 830. 831. 832. 833. 834. 835. 836. 837. 838. 839. 840. 841. 842. 843. 844. 845. 846. 847. 848. 849. 850. 851. 852. 853. 854. 855. 856. 857. 858. 859. 86

石工春日部宮仙蔵

旧大泊村安国寺の『19. 安政
コレラの名号塔』の裏面より

旧上間久里村古道案内図



旧大泊村より大里村案内図



旧平方村

赤沼渡し場までの山道



大河土御厨について

宮川 進

一 大河土御厨

鎌倉幕府の記録書である吾妻鏡の元暦元年（『寿永三年』一八四）正月三日の項に「武蔵国崎西・足立郡内大河土御厨」を「武衛（頼朝）」が「豊受大神宮（伊勢太神宮）」へ寄進したことが記されている。

御厨（みくりや）とは「御園（みその）」と共に、中世神宮の経済を支えた神領（「下総国の御厨と船橋の神明社」・梅田義彦）である。

東国にあっては、私領地に関する朝廷への貢納を少なくするために、形式上だけ、領主が神宮に寄進したものが多いといわれる。

つまり、領土を名目的に神社（特に伊勢神宮が多い）に寄進し、生産物をすこし上納することにより、領主としての地位は確保され、朝廷へ貢納しなくてもよいことになるのである。

大河土御厨の場合は、以前から源氏の領土であったものが平氏にとられていた。それを取り戻した機会に、頼朝が伊勢神宮に寄進したものである。

二 謎の地名

以上のとおり、大河土御厨は鎌倉時代には確かに存在したものであるが、具体的に、いまの「どこ」にあったかは、わからなくなっている。

同じ時代に、この大河土御厨の南にあった葛西御厨については伊勢神宮外宮の瀬宜・松垣氏に伝えられていた古文書（松垣文書または榎本文書という）の中に「下総国葛西御厨注文」というものがあり、それに御厨に属する郷名があることから、境界がほとんどわかる。北は猿俣・飯塚（葛飾区）あたりから東は上・下小岩（江戸川区）、西は隅田川の東（足立区）、南は二江・長嶋（江戸川区）あたりまでである。

これに対し、大河土御厨の方は、松伏町に「大川戸」という地名を残っているものの、明確に所在を記したものは残されておらず、現在の地名その他により推測が行なわれているのみである。

三 これまでの研究から

御厨に関する研究としては、所在地論のほか、成立について、領主について、経済について、神社についてなど、種々のものがある。本稿は所在地論のみを取り扱わせていただくこととする。

さて、その所在地論であるが、これまで、どのような説があったかについて、ふりかえってみたい。

(1) 柴田常恵氏の説 昭和7年
「松伏町大川戸中心」

現在の「松伏町大川戸」の字神明の神明社が大河土御厨の主要な位置を占め、その中心地であった」との説である。

また、この松伏町が北葛飾郡にあることは、当時、埼玉、足立の他、いまの北葛飾の一部にまで境域がのびていたのであるうとも述べておられる。

特に天照大神を祭神とする神明社が松伏に多いことが、その説のよりどころである。

(柴田常恵「大河土飯倉の両御厨に就て」 埼玉史談第四巻第二号 S7・11 埼玉郷土会発行)

(2) 華城散士(梅田義彦)氏の説 昭和8年
「松伏町大川戸中心」

「その称がたとえ大字にしろ、大川戸として残れるを見れば、特別の理由なき限り、先ず此の辺の地が御厨の本拠であり、之より御厨全体の名も出たとすべきである。是に於て同じ地名辞書(吉田東伍「大日本地名辞書」)の別考に、今「南埼玉」郡の東南の境を少なく隔て、葛飾郡内に大川戸村あるは、地の変遷して彼郡に入りしにや、とあり、大日本史にも「大河戸、後入下総葛飾郡、」とあるを断案としなければならぬ」としている。利根川の変遷で今は北葛飾郡となっているが、以前は南埼玉郡であったというわけである。

これは前項の柴田氏の説のとおりで、大川戸にある神明社のことも論拠として受けついでおられる。

(華城散士「関東八州に於ける大神宮領と其遺蹟(二)」
史蹟名勝天然記念物第八集第四号 S8・4 史蹟名勝天然記念物保存協会発行)

(3) 萩原龍夫氏の説 昭和43年
「埼玉郡北半から八条郷まで」

同氏は越谷市史の監修をされた方であり、かねがね旧・利根川流域の低湿地の歴史に着目しておられたが、「旧利根河畔の中世文化」という論文のなかで、要約すると次のとおり述べておられる。

「大河土御厨は「吾妻鏡」によると寿永三年、頼朝が伊勢豊受大神宮に祈願をこめて、権掾宣光親に付与して寄進したという。その文面には「武蔵国埼玉郡内」とあり、埼玉郡西半(実際はほとんど北半)を指し、それに足立郡の南西部が加わるのである。(略) 大河土御厨は埼玉郡北半にあり、太田庄と必ずしも明確には分離されていなかったことを暗示するものである。(略) 降って建保元年五月大河土御厨内八条郷(現南埼玉郡八潮村八条)を幕府は式部大夫重清に与えたが、この地はこの御厨の南限であろう。(略)」

(萩原龍夫「旧利根河畔の中世文化」 駿台史学22号 S43・3 駿台史学会編・発行)

(4) 越谷市史の説 ―昭和60年―

「北足立・南埼玉・北葛飾郡南部にわたる地域」

まず、埼玉郡とは埼玉郡のほとんどが属していた地域の私称である……とし、現在の中川流域である八潮・吉川・松伏・春日部市の一部にまたがる地域や松伏町大川戸にある熊野神社所蔵の正和五年(一一三六)の弘明寺進状に「下河辺下方大河戸熊野権現」とあることから、下河辺庄南部に当る地域も含まれ、現在の北足立・南埼玉・北葛飾郡南部にわたる広汎な地域が御厨の地に比定されている。北葛飾へまたがるのは河の変遷によるものとし、大川戸の神明社の存在を「御厨との関連を示している」としている。

(越谷市史 第一巻 通史上 S50・3 越谷市役所発行)

(5) 竹内理三氏の説 ―昭和50年―

「越谷市中心」

同氏の「荘園分布図」は全国をこまかく分けた地図上に中世の荘園名を記載されているものであるが、この武蔵国の部において、大河土御厨は松伏町大川戸から西、まさに越谷市のあたりに記入されている。

(竹内理三「荘園分布図」 S50・6 吉川弘文館発行)

(6) 岩槻市史の説 ―昭和60年―

「おおむね、今の北葛飾南部と南埼玉郡・北足立郡にかか

る八〇〇町余の地」

これは前項の越谷市史とはほぼ同じである。埼玉郡は、中世の武蔵に行なわれた郡の私称である……とし、御厨に属する八条郷は現在の八潮・草加近辺とみ、その名は松伏町大川戸が受け継ぐとしている。また弘明寺進状により下河辺庄南部の地域をも含むと考えている。

(岩槻市史 通史編 S60・3 岩槻市役所発行)

(7) 鷺宮町史の説 ―昭和61年―

「八潮市八条を中心に三郷市・八潮市、そして東京都の足立区の東北部など」

吾妻鏡記載の八条郷は八潮市にある。そして、大河戸は松伏町にあるが、この地が中世には下河辺庄にも属していたと考えられるために、これは比定を留保、八条を中心に三郷市、八潮市、そして東京都の足立区の東北部などが荘域に含まれていたのではあるまいか……としている。

(鷺宮町史 通史 上巻 S61・12 鷺宮町役場発行)

(8) 浦和市史の説 ―昭和62年―

「越谷市中心」

浦和市史では「浦和周辺の武士と荘郷」という図において「大河戸氏」の表示を越谷市の大相模における「大相模氏」の西

に記入している。したがって、越谷市域の元荒川と綾瀬川には
含まれた地域が「大河戸氏」の本拠となっている。大河戸氏の
本拠ということは大河土御厨の中心ということとなる。

〔浦和市史 通史編Ⅰ S62・3 浦和市発行〕

〔9〕「荒川・人文Ⅰ」の説 昭和62年1

〔中川（古利根川）右岸に位置し、現在の北葛飾郡松伏町
大川戸を中心とする地域に比定される〕

〔吾妻鏡により崎西（埼玉）・足立両郡にまたがるかなり広
大なものであったと考えられ、おそらく、その領域内には元荒
川流域も一部含まれていたのではないかと推測される〕として
いる。

〔荒川・人文Ⅰ S62・3 埼玉県発行〕

〔10〕埼玉県史・通史編2の説 昭和63年1

〔大川戸中心比定か、八潮市から三郷市あたりの地域比定
もある〕

大河土御厨は埼玉郡に属し、現在の松伏町大川戸を中心とし
た地域に比定されるが、また「大河土御厨内八条郷」は八潮市
から三郷市あたりの地域にする考えもある……としている。そし
て吾妻鏡による「崎西（埼玉）・足立両郡にまたがっていた」
という記事を紹介している。

〔新編埼玉県史 通史編2 S63・3 埼玉県発行〕

〔11〕八潮市史の説 平成元年1

〔八潮市を中心に三郷市・松伏町・吉川町そして足立区の
東北部〕

大河土御厨の荘域は現在のところは確定していないが、一応
八潮市を中心に三郷市・松伏町・吉川町そして足立区の東北部
の範囲と言われている……とする。

〔八潮市史 通史編Ⅰ H1・7 八潮市役所発行〕

〔12〕白岡町史の説 平成元年1

〔八潮市・三郷市から足立区北東部〕

大河土御厨は八潮市、三郷市から足立区の北東部と考えられ
る……としている。

〔白岡町史 通史編上 H1・3 白岡町発行〕

〔13〕岡田精一氏の説 平成三年1

〔葛西御厨の北辺、下河辺庄の西端、太田庄の南端をむす
ぶ範囲〕

岡田精一氏は東北福祉大学教授であるが、「大河土御厨をめ
ぐる二、三の問題」や「葛西御厨小考」など、この地域に関す
る論文を「発表いただいている。そして、『大河土御厨をめぐ
る二、三の問題』においては、その位置については直接ふれて
おられないが、周辺地域として前述の荘境をあげておられる。

また、同論文中の「大河土御厨と河川路・河関」という図において、大河土御厨を越谷市と草加市の間地点あたりに表示されている。

〔岡田精一〕「大河土御厨をめぐる二、三の問題」一埼玉県史研究第26号 県民部県史編さん室編 埼玉県発行 H3

・2)

〔14〕久喜市史の説 一平成4年一

「現行市町村でいえば、越谷市以南・草加市・川口市・八潮市域にかけて自然堤防が発達した低地帯。毛長堀川が南限か」

同市史は御厨内の郷・八条は八潮市とし、御厨は古利根川と古綾瀬川の地域としている。また、松伏町大川戸を大河土御厨とする説については、大川戸の南にある同町上赤岩・下赤岩は下河辺荘域なので、大川戸も同荘域であるうとしている。

〔久喜市史 通史編上 H4・1 久喜市役所発行〕

四 御厨はここに…

各説さまざまであるが、一体、大河土御厨はどこにあったのだろうか。

神明社の分布と考古学的遺物の散布状況から、御厨の所在を推測してみたい。

〔1〕神明社の分布からみた大河土御厨

神明社とは御厨や御園の領域内に勧請されることが多く、もちろん、伊勢神宮と同じ天照大神を祭る神社である。

御厨の領域外には決して存在しないとはいえないが、特に中世においては御厨内に多い神社である。

一たとえば梅田義彦氏の論文で「下総國の御厨と船橋の神明社」〔瑞垣36号 S33・1 神宮司庁刊〕、岡田米夫氏のもので「大神宮領・信州七御厨と同神明社」〔瑞垣91号 S46・6 神宮司庁刊〕などがある。一

吾妻鏡にいう隣西郡と足立郡の範囲内で、神明社の所在を分析することにより、御厨の領域を推定することはできないだろうか。

もちろん、神明社があるから、あったからといって、その地のすべてが御厨であったことを示すものではない。純粹な宗教活動によって建てられた神明社もあるだろうし、分村の際、親村のものを引き継いだ神明社もあるだろう。

しかし、それらのことを頭にいれつつも、神明社の存在は、この御厨の領域推定のため残された、わずかな手掛かりであるうと思われるのである。

現在では、すでに消滅したり、他へ合祀されてわかりにくくなっている神明社もあるだろう。できる限り、古い資料による必要があるので、江戸時代の「新編武蔵風土記稿」における神

明社の存在を調べてみた。

ア 葛飾郡における神明社

(ア) 松伏領

松伏村、上赤岩村、下赤岩村、大川戸村、赤沼村

(イ) 二郷半領

花和田村、番匠免村、彦成村

(ウ) 西葛飾領・新田筋

柳島村、亀戸村、押上村、八郎右衛門新田、大塚新田

(エ) 東葛飾領・上の割

上平井村、中平井村、鑿戸村、曲金村、中小岩村、下

小岩村、笹ヶ崎村、西小松川村、東一ノ江村、西一ノ

江村、本一色村、興野宮村、松本村、下篠崎村、上鎌

田村、下鎌田村、長島村、東宇喜田村

(オ) 幸手領

幸手宿、上高野村、清地村、小淵村、下宇和田村、上

吉羽村、内国府間村

(カ) 島中川辺領

広島村

葛飾郡の南部は「葛西御厨」に属していたため、右記の神

明社には、この領域のものも含まれる。

イ 埼玉郡の神明社

(ア) 越谷領

越谷宿、神明下村、四町野村

(イ) 八条領

二町目村、伊勢野村、青柳村、蒲生村

(ウ) 新方領

小林村、増林村

その他、岩槻領に大竹村(現・越谷市)を含め19、百間領4、葛蒲領1、騎西領15、向川辺領5、羽生領7、忍領13

ウ 足立郡の神明社

(ア) 淵江領

梅田村、鹿浜村、嘉平新田、久左衛門新田、保木間新

田

(イ) 谷古田領

新堀村、上谷塚村、原島村、篠葉村、大竹村、領家村

吉岡組、古千谷村、蓮沼村、赤井村、鳩ヶ谷宿、中尾

村、小淵村、飯塚村

(ウ) 戸田領

下戸田村、新曾村、上青木村、西新井宿村、前川村、

蕨宿、岸村、白幡村、根岸村、文蔵村、道祖土村、元

太村

(エ) 木崎領

上木崎村、領家村、三室村、大谷口村、井沼方村

四正寺村、大牧村、根岸村、道合村

(オ) 三沼領

大門宿、戸塚村、差間村、大間木村、上山口新田

(カ) 南部領

中丸村、大和田村、砂村、蓮沼村、御倉村、白岡村

膝子村、宮下村、小深作村、深作村、上瓦葺村、柄山

村、小貝戸村、大針村

(キ) 上尾領

上尾宿、上尾村、上平塚村

(ク) 大谷領

大谷本郷村、上野村、向山村、川村、西谷村、別所村

桶川宿、上村、南村、小針内宿村、小針領家村

(ケ) 鴻巣領

上中丸村

(コ) 忍領

八幡田村、前砂村、糠田村、宮前村

(サ) 石戸領

荒井村、枝郷北袋村、下日出谷村、川田谷村

(シ) 平方領

平方村、領家村、地頭方村

(ス) 差扇領

下宝来村、上野本郷村、北野貝土村、原村、内野本郷

村、清河寺村

(セ) 吉野領

上加村

(ソ) 大宮領

本村、土呂村

(タ) 植田谷領

植田谷本村、上下内野村、中野林村、島根村、側海斗

村、在家村、塚本村、上大久保村、下大久保村

(チ) 与野領

与野町、上落合村、中里村、大戸村、町屋村、千駄村

道場村、西堀村、田島村

(ツ) 笹目領

美女木村

以上、葛飾郡：39、埼玉郡：74、足立郡：111 とい
う総数となる。

足立郡は、これまでの常識では、氷川神社の本拠地であって、
それ以外の神社は全くないようにさえ思われる郡であるが、実
は神明社が数多く（単独社として、あるいは合祀社として）存
在していたのであった。

これを地図におとしてみると、次図のとおりとなる。

① まず、現・古利根川の川筋に沿って、松伏町大川戸、上

赤岩、下赤岩、赤沼のグループがある。

ここは御厨の生産物を当時の利根川の水運で輸送する拠点
であると考えたい。

② ①のグループの現・古利根川対岸に越谷宿、神明下村、四町野村、小林村、増林村のグループがある。

③ ②のグループの南東部に八条領がある。このグループは八条郷として「吾妻鏡」に記載されている、まさに「大河土御厨」の範囲内のものである。

現在の越谷市南部から草加市東北部である。

なお、②のグループとこの③のグループとの間には武蔵七党野与党の大相模氏の拠点（現・越谷市大相模附近といわれる）が存在する。大相模氏の勢力範囲と推測される地域には神明社は存在しない。

④ 八条領グループの南西部は足立郡であるが、淵江領、谷古田領があり、神明社をもつ村が19ヶ村ある。このグループは八条郷に、ひいては埼玉郡に近くもあり、吾妻鏡にいう「足立郡におよぶ大河土御厨」に含まれることに間違いないと思われる。

⑤ また、②越谷宿のグループの西側、綾瀬川をこえて、これも足立郡に入るが、大門宿のある三沼領、木崎領、戸田領がつづく。

現在の浦和市域である。これまで、まさに大宮・氷川神社のお膝もと、他の神社の存在すら考えもつかなかった地域に神明社をもつ村があったのである。

なぜ、神明社があるのか。浦和市史によると、このあたりの中世領主は不詳のようであるが、神明社の存在からみて、

御厨領であったとの主張をしておきたい。

このグループの北に大宮氷川神社があり、神明社の分布はとぎれている。さらに北には、また神明社が散在しているが、グループを構成するほどではない。

その他、埼玉郡岩槻領においては現・岩槻市域から蓮田市域までの間に神明社の存在する村が18ある。ただ、この地域は武蔵七党・野与党の柏崎氏や須久毛氏の領域といえるのであり、御厨に属するものではないと思われる。

以上により、大河土御厨は、東西を現・古利根川（当時・利根川）から現・荒川（当時・入間川）まで、南北は現・越谷、浦和市域から現・八潮、草加、川口、浦和、東京都足立区あたりまでという、広大な地域を占めていたのではないかと推論する。各説により相違のある事項については次のとおり考える。

① 現・大川戸が葛飾郡であったことについて

吾妻鏡の記事、そのものが厳密なものか、どうかということがある。また、川の流路を郡境とした場合、特定の地域の属する「郡」が流路変更により変わることはいえる。これらの理由から、大川戸が葛飾郡に属していても御厨に含まれるとして問題は無い。

② 下河辺庄との関連について

弘明寺進状により、大川戸が下河辺庄に属していたのではないかとの説がある。萩原氏の説に「太田庄と大河土御厨との境界未分離」があったが、当時の各庄、郷などの境界は現在のよ

県主要部

1cm=1.0km

ニューエスト埼玉県都市地図

1979. 8 昭文社刊の上に製図
○は同時期に武蔵七党の各氏や郷が
あったと思われるところ。

地名は神明社のある村。(新編武蔵
風土記稿による)



うに明確ではなかったのではないか、そのような事情と神明社の存在から現・古利根川左岸も大河土御厨境界内にいれてよいのではないかと思われる。

地域の特徴としては、東西を大河にはさまれ、南北を武蔵七党の各氏の領土に規制された、広い低湿地の中の自然堤防を基盤とした領域（西の部分は大宮台地の南端にかかるが）であったといえよう。

なお、大河土御厨の境域が前述のとおりだとすると、吾妻鏡の建久五年（一一九四）六月三十日の項「頼朝が大河土御厨と久伊豆宮神人が喧嘩したことを聞いて、二階堂行光を遣わす」との記事の「久伊豆宮」は越谷のそれということとなるだろう。

大河土御厨のなかにある越谷の久伊豆宮の神人が何らかの理由で御厨の役人と喧嘩したということである。

（注 「久伊豆宮」は「伊豆宮」であるとの説もある）

（2）考古学的遺物の散布状況からみた御厨

全国的に「御厨」（鎌倉時代）の遺跡として判明しているところは少ない。例えば、県内においては児玉町に指定史跡である「飯倉御厨あと」があるが、これは戦前の指定であって、遺物発見などの証拠があつてのものではない。

県立歴史資料館の栗原館長、駒宮先生がご親切に「御厨に関する埋蔵文化財調査報告」を全国規模でお探しくださったのだが、「茨城県の鹿島町神野向遺跡（常陸国鹿島郡衙跡）」につい

て、厨家あとの遺構あり」とされているぐらいらしい。

他にも、例えば県下本庄市の将監塚・古井戸遺跡は、奈良・平安時代の遺跡であり、「厨」の墨書土器が発見されているとのことであるが、これが「御厨」を示すのか、「郡」や「郷」の施設としての「厨」を示すものか明確にはなっていない。

このように、たとえ、考古学的発掘調査が行なわれても、何が出てくれば「御厨」と断定できるのか、決められない状況である。

前述の神明社の分布地のどこから、なんらかの「御厨」関連の決定的遺物が出てくればよいのだが、いまは全く白紙の状態である。

現在、わずかの手掛かりは、松伏町大川戸において奈良・平安時代の土師器・須恵器が散在している場所があることぐらいである。「御厨」の時代より一時代、古いものであるが、前代に人の住んでいたところが次の時代に受け継がれることはありうる。大川戸という地名のところに歴史時代の生活の痕跡があつたことが、今後の研究の発展に資すればと考えている。

さらに、もうひとつ。

「御厨」は古くは「万奈久利也（まなくりや）」と訓されていた。「マナ」は魚鳥料理のこと、「クリヤ」は食物を調理するところの意味である。

古い方の「埼玉県史」は市内の「間久里」を「御厨」の音便で「マクリ」となったのではないかといっている。（越谷市史による）

郷土の歴史解明のポイントとして、この「大河土御厨」の研究とそれに伴う論争が盛んとなることを期待させていただきたい。「邪馬台国は大和にあったのか、北九州にあったのか」、それを考えるのと同じようなロマンが、この越谷に眠っている。

宋文ながら、ご多忙中のところ、資料探索などにご配慮をいただいた東立歴史資料館の栗原館長、駒宮史朗先生、いつも何かとご指導いただいている埋蔵文化財調査事業団の高橋一夫先生にお礼を申しあげたい。

◎参考資料

(文中紹介のもの以外)

葛西御厨小考 岡田精一 東北福祉大学紀要 第四巻第二号

80・1 東北福祉大学編・発行

葛西御厨強域考 柳岡良弼 歴史地理 第三巻第十一号

M34・11 日本歴史地理研究会編・発行



山王二十一仏板碑究明史

星野 昌治

はじめに

越谷市を中心にした地域には、全国でも稀な二十一個の種子（梵字）を刻んだ板碑が、数多く存在していることは、かつて本誌（「山王二十一仏板碑と庚申信仰」『古志賀谷3』）にも述べたところでもある。

現在では、この二十一個の種子が、山王神道の山王二十一社の本地仏を表しているものである、ということに疑うものはない。

しかし、昭和七年ごろまでは、板碑に刻まれる二十一個の種子が、いったい何を意味し、何を示すものなのか、何の信仰を表すものなのか、全く見当がつかなかったのである。

本稿では、二十一仏板碑の究明から六十年余りを経た今日、これまでの研究の経緯について、一応の整理を行い、それらを検討し、今後の研究に資するようにしたい。

なお、本稿を成すきっかけとなったのは、縣敏夫氏の「武蔵野時代の三輪善之助―板碑研究史の視点から―」（『庚申82、昭和五五年六月』）における二十一仏板碑の究明についての項に拠るものであることを付け加えておきたい。

一、二十一仏板碑究明前までの文献

昭和七年八月、君塚好一氏は、流山市鰯ヶ崎東福寺千佛堂の天正五年銘二十一仏板碑の発見に因んで、「松戸付近の板碑」

（『武蔵野』19ノ3）を発表された。そこでは、

・胎蔵界曼陀羅？（二十字の梵字あり） 年号不明

・千佛堂に、種子、タラクの板碑を発見したのは、板碑研究

の上に、参考になる事があるだろう。

と述べられ、当時この板碑をどのように表現したらよいのか、

その困惑ぶりを察することができるとともに、今後の研究の重

要性を示唆している。

近代になって、二十一仏板碑を取り上げた文献は、これが最

初でもある。それ以前は、江戸時代に遡るのである。

さて、江戸時代の「江戸名所図会」には、東京都文京区小日

向日輪寺の元亀四年銘二十一仏板碑について、

・氷川神社祠当所に元亀の年号ある庚申待供養の古碑あり。

と記され、その碑面に「庚申待供養」の趣旨銘が刻まれている

ことから、この板碑を庚申待供養の古碑と呼んでいたことが判

明されるのである。

また、「集古一瀉」にも、

・豊島郡牛込小日向水道町水端曹洞宗日輪寺境内氷川神前方

板碑にあり青石高二尺二寸横九寸余

とある。ここでは形状以外のことは、特別に記されていない。

なお、この板碑は古くから好事家たちの目にとまり、「遊歴

雜記」「散步漫録」などにも取り上げられている。

一方、「新編武蔵風土記稿」には、埼玉県松伏町上赤岩地藏

堂の天正二年銘二十一仏板碑について

・古碑一基、名主新八郎持地の内にあり、天正二年の古碑なり、古より是れを勢至菩薩と称し崇敬せり。

と記され、当時、この二十一仏板碑を古碑、勢至菩薩と呼び崇拝していたことが分かる。しかしなぜ、碑面に勢至の種子（サク）が刻まれているのに、また、申侍供養の趣旨銘が刻まれているのに勢至菩薩なのか、疑問が残るところである。因みにこの板碑は、タラーク（虚空蔵）が主尊となつてゐる。山王神道はもと、釈迦を重視する天台宗から発せられたものであり、二十一仏板碑の主尊には、バク（釈迦）を用いることが普通である。タラークを主尊としたことは、十三仏信仰の系統を受け継いだからであるとする考えがある。また十三仏板碑には勢至を崇拝する例もある。本板碑はそうした背景があつてのものだつたのかも知れない。

いずれにしても、二十一箇の種子が何を表したもののなかまでは言及しておらず、昭和七、八年ごろまでは、発見される例も少なく、永い間、全く謎とされていたのである。

ところで、越谷市、北越谷稲荷神社にある永禄元年銘二十一仏板碑は、もとは同地浄光寺東側の路傍にあつたもので、古くからこの付近の土地の人は、「さんのうさま」と呼び、正月になると、この板碑の頭部に注連縄を飾つたり、祝いの事があつたりすると赤飯を供えたりして祭つていたという。この話は私が板碑の調査を始めたころ、今から三十五年ほど前、この板碑に隣接して住む黒田氏の老婆から実際に聞いたことである。このことは、小澤國平氏の『板碑入門』にも、「土地の人は山王様といつてゐる」と紹介されているところでもある。

こうしたところに、二十一仏板碑と山王神道を結び付けて考えるヒントが隠されていたのかも知れない。

二、服部清道氏による二十一仏板碑の究明

昭和七、八年ごろ、そのころは服部清五郎氏（後に僧籍に入られ服部清道と改名）が、大著『板碑概説』の著作に取り組んでいるころであり、二十一仏種子は、何としても解決しなければならぬ課題であつた。当時、服部清道氏は手元にある日輪寺の板碑をはじめ、四基の二十一仏板碑の拓本をもとに、その解明に腐心していたのである。そして、その結果、天台宗の典籍からヒントを得、二十一箇の種子は、正しく、かの山王二十一社の本地仏であることを突き止めたのである。

その時の状況は、以下の昭和八年九月の「二十一佛板碑と山王一実神道」『板碑概説』の論述によつて知ることが出来る。

・板碑には稀に二十一箇の種子を配したものが存在する。私達は従来それを二十一佛板碑と称して、何を意味するものであるか、其の解釈に腐心していたのであつたが、近頃ふとした機会から、いくぶん解明ができた事をここに披露したい。

・此の二十一種子は、詳細に研究すると、多少の相違はあるが、大体かの山王二十一社の本地佛種子に該当することが察せられる。即ち寛文七年沙門澄禪の手に成つたと思われる「種類集」に拠ると、山王二十一社種子として次の二十一個を挙げている。此の澄禪の説に従つて日輪寺板碑の種子を上より順次二十一社に配当すると次のようになるであろう。（略）

・凡そ以上の如くにして、私は二十一種子を以て山王二十一社に該当せしめたが、敢えて牽強付会といえそうもいえず、また種子の配当の不当を詰めれば、敢えて語れぬこともないであろう、固より私はそうした事に関しては眼に一丁字なき一介の若輩なれば、斯かる誹謗を甘受する覚悟はあるが、またそれに対して、充分に抗弁するだけの反面をもためでもない。二十一社の配当に關しても、本来なれば確實なる史料に徴して、その組織及び變遷の過程を研究すべきであるが、今はその余裕を持たず、只從來の謎に對して解く可き端緒を、ここに提示する機会を得たることを以て甘んじ、残るところは専門家の今後の研究にまきたいと思う。

と、かなり激しく、しかも自信に満ちた論調で、二十一仏板碑の解明の経緯と結果を述べられ、ここに二十一個の種子の謎が服部清道氏によつて、初めて明らかにされたのである。

三、『板碑概説』以後の二十一仏板碑の文獻

昭和八年十月、入本英太郎氏は、「武蔵吉川町付近の板碑」(『武蔵野』20の10)を発表された。その中で、越谷市千足東義寺の天正三年銘(原文では四年)はじめ、四基の二十一仏板碑を紹介し、

・從來この種のもの、その如何なる信仰を意味するものなるや、専門学者の間にも永く不明を伝えられていたが、最近三輪・服部両氏その他に依つて、それは彼の山王二十一社の本地佛を現せるものにて、即ち山王一実神道信仰を意味するものであることが発見されたのである。

と述べられ、服部氏の他に、三輪氏(三輪善之助)の名前を挙げられたのである。そしてそこからは、二十一仏板碑の解明には複数の学者が関わつたような印象が感じられる。

服部清道氏が、あれだけ厳しく自説を述べていたにもかかわらず、『板碑概説』以後の二十一仏板碑に關する論文の中の解明の記事には、服部清道氏・三輪善之助氏の両氏の名前が揃つて登場するようになるのは、如何なものなのだろうか。

このようなことに對し、そのころの当事者である三輪善之助氏や服部清道氏はどのような見解を持っていたのだろうか。

三輪善之助氏は、昭和八年十一月、「庚申待と庚申塔」

(『武蔵野』20ノ11)において、

・此の二十一佛種子板碑とは、如何なる信仰を現はすものなるや、從來全く不明であつたところ、服部清五郎氏が文獻典籍の上から研究して、これは正しく山王権現廿一社の本地佛であることが明瞭になつた。又私は別に、江戸時代初期の庚申塔から考証して、これは全く山王廿一社信仰を示すものなることを、確かめ得たのである。

寛永十六年山王廿一社銘塔、阿弥陀立像、二猿、東京都北区赤羽寶幢院

・山王権現廿一社が、何故に室町時代の申待供養板碑の本尊に選ばれたか、私の考えでは、カノエサルが山王の神使猿と結び付いてできた新しい考案と想うのである。

と述べられ、二十一仏板碑の解明には、服部清道氏が文獻、典籍から解明されたことを明確にされている。そして、別に三輪氏自身は、二猿のある山王廿一社銘の山王塔と申待銘のある二

十一仏種子板碑の関連性から、二十一仏板碑を解いていることが分かる。

さらに、二年後、三輪善之助氏の著書である昭和十年一月の『庚申待と庚申塔』においても、以下のように同様なことを述べられている。

・これらの板碑に二十一箇の梵字種子あるは、何を示すかに就て従来別に注意する者も無かつたところ、服部清五郎氏が種子の比較と文献典籍の上から研究して、これは正しく山王廿一社権現の本地佛であることを明瞭にせられた。私は別に、徳川期の寛永十六年の東京赤羽寶幢院庚申塔の銘記に、明らかに山王二十一社と刻されているのから考証して、これは全く室町時代二十一佛板碑と、同じ信仰のものなることを確かめ得たのである。

以上の三輪氏の論文から察せられることは、江戸時代の山王系の庚申塔と、二十一仏板碑の結び付きを認めることはできるが、それは服部清道氏の二十一仏板碑究明の延長上に存在するもの、つまり二十一仏板碑は、山王二十一社の本地仏を表したものである、という論拠があつて言えるものであつて、三輪氏の論からは、二十一仏板碑そのものと山王二十一社との直接の関連は、読み取りにくいようである。

一方、服部清道氏は、昭和十八年八月、「久喜甘棠院の記」『郷土文化を探索』において、尤もこれは昭和八年三月に草稿したものゝを所収したものであるが、甘棠院の板碑について、
・此の種のものは従来不明に属し、単に二十一佛板碑という名によつて呼ばれて居つたのであるが、私達の近來の研究

によれば、それは珍しくも山王二十一社の本地仏であることが知れたのである。

と述べられ、『板碑概説』での論調とは打つて変わつて、謙虚に「私達の近來の研究」という表現を使っている。この私達とは服部氏自身と三輪善之助氏を言っているか分からないが、この曖昧さが、後の研究者にも影響をもたらす結果にもなるのではないだろうか。

四、戦後の二十一仏板碑の研究

戦後になつて初めて、二十一仏板碑を取り上げた文献は、昭和三十四年十二月、清水長輝氏の「山王二十一社本地仏」『庚申塔の研究』であり、そこでは、

・板碑に二十一の種子があることは古くから知られていたが従来それが何を現しているのか不明であつたところ、昭和六、七年頃、三輪善之助氏が服部清道氏らと共に、典籍と遺物を比較して考究された結果、これが山王二十一社の本地仏であることを初めて明らかにされたものである。

と述べられ、二十一仏板碑の解明の主体は、「三輪善之助氏が服部清道氏らと共に」とあるように、服部氏よりも、むしろ三輪善之助氏にあるような印象を与えている。どのような経緯でこのようになったのか、よく分からないが、本書の序文は三輪善之助氏が書かれており、清水氏の庚申塔の研究には三輪氏の影響が相当あつたことが推察され、その過程において三輪氏自身から、二十一仏板碑究明の状況を直接聞いていたのかも知れない。

そして、清水長輝氏の『庚申塔の研究』以後、二十一仏板碑

に關する論文の中の解明の記事には、服部氏・三輪氏の両氏の名前が揃って挙げられるようになるのである。

昭和四十二年大護八郎氏「山王信仰の系統」『庚申塔』では、

・板石塔婆に二十一仏の種子を刻んだものは天文頃から現れてくるが、この種子を山王二十一社の本地仏とされたのは服部清道・三輪善之助の両氏であり、三輪氏は更にその中に庚申待、申待の文字を刻んだもののあるところから、庚申信仰と山王信仰の結びつきを問題にし、山王の狼が庚申の申と結合の機縁をなしたことを述べられた。(略)

・三輪氏は、赤羽の寶幢院の寛永十六年の山王廿一社の文字と、阿弥陀立像と二狼の像のある板碑型のもので、庚申供養塔であることが分かったので、二十一仏の種子を、山王二十一社に結びつける考えを、持つようになったといわれている。

とあり、本書は、三輪善之助氏や清水長輝氏の著書の影響を受けて書かれた様子が伺えるのである。

私も、昭和四十五年九月、「山王二十一仏板碑考」(『東京の歴史』9)において、以下のように述べたことがある。

・板碑に刻まれる二十一個の種子が何を意味するか、久しく学会のなぞであったが、これが山王二十一社の本地仏を表したものであると最初に気づかれたのは、服部清道氏・三輪善之助氏の両氏といわれている。

また、昭和五十四年十二月、「山王二十一仏板碑について」(『日本の石仏』12)においても、

・南関東、就中、埼玉県東部を中心とした地域には、全国で

も稀な二十一個の種子を刻んだ板碑が数多く造立されている。この二十一個の種子が何の信仰を表したものであるか。昭和六年頃までの間、学会では全く不明とされていた。是れを山王二十一社の本地仏の種子を表したものであると最初に解かれたのは、服部清道、三輪善之助の両氏といわれている。

五、戦後における三輪・服部両氏の見解

さて、戦後の三輪善之助氏、服部清道氏の見解はどうなっているのだろうか。

三輪氏は、昭和三十五年、「山王二十一佛庚申塔」(『庚申』14)において、

江戸時代の庚申塔に山王廿一社信仰のものが存在することは、窪徳忠氏や清水長輝氏の調査によって明らかに、今では確実的な事実になっているが、昭和の初期にはそれが甚だ不鮮明なものであった。大正の末頃に、私は板碑の研究をしていたので、自分の住所に近い、小石川水道端の日輪寺の、申待供養元龜四年の二十一種子の板碑を、よく見に行った。

この板碑は遊歴雜記や江戸名所図会に記され、江戸時代の学者の注意にのぼったものである。

この廿一個の種子が何を意味するかを知るために諸方を探していたところ、入本英太郎氏が昭和八年十月「武蔵野」第二十巻第十号の誌上に「武蔵吉川町附近の板碑」と題し

・て埼玉県南埼玉方面に二十一佛種子に申待供養と刻んだ板碑があると発表されたので、入本氏から説明をきき、実物調査に行き、この板碑が庚申待信仰のものであることを確認できたのである。

・次に廿一個の梵字種子が何を表示するかにつき、服部清道氏と考えてみた処、服部氏は天台宗の僧籍に入っていたので、山王廿一社の本地仏を調査して、板碑の種子二十一個は、山王権現廿一社の本地佛であると認定せられたのであった。

・これで問題は解決したのであるが、文字で証明する資料が必要であった。その頃、私は赤羽駅に近い寶幢院境内にて寛永十六年己卯霜月十八日、岩淵赤羽根村寶幢院祐真と刻し、上部に「山王廿一社」の文字と阿弥陀立像と二猿の像から、この塔が庚申待供養塔であることが判ったのである。そしてこの寛永十六年塔を通して室町時代の廿一仏申待供養板碑は山王信仰のものであることが確認せられ、尚今後発見せられるべき江戸時代の山王信仰の庚申塔も皆これに一連のものであることが知られた。そして、庚申待に山王信仰のあることと、庚申塔に三猿をつけることは、山王の二猿からでていることを確かめたのである。

と述べ、入本氏から説明を聞いたことや服部氏とともに自分も考えてみたこと、自分は文字で証明したことが記述され、戦前の三輪氏の見解とは少々異なる点がみられるようである。

これに対して、服部氏も、昭和四十六年三月、「続三浦半島の庚申塔」注2（「三浦古文化」9）において、次のように述

べ、二十一仏種子の解説の経緯の誤謬を厳しく批判している。東京都練馬区春日町一丁目稻荷社の板碑系庚申塔に「奉申待供養結衆、長享二年戊申十月廿九日」と銘あり、また同文京区水道端町二丁目日輪寺の板碑系庚申塔は山王二十一社本地仏種子の主尊とし「申待供養元龜四年癸酉二月吉日」と刻まれてある。因にこの板碑系庚申塔は「江戸名所図会」や「遊歴雜記」「散歩漫録」などによつて報ぜられて著名であった。その二十一個の種子は何を示し、何仏の種子であるかは全く解明されないまま昭和七年に及んだ。私はその存在を三輪善之助氏の案内で知ったが、昭和七年春にまたま故島居滝藏博士の斡旋によつて「板碑概説」を著述することとなり、稿を進める間に、如何ともして、一百余年にわたるこの謎を解くべく、拓本を机前にかがけて静慮を懲らし続けた結果、天台宗系板碑の項をまとめている途中において、山王一実神道に思いをいたし、そこによりやく解説の端緒をつかみ、「板碑概説」第二篇各論第二章第二節「廿一仏板碑と山王一実神道」をまとめたのであった。そしてそのなかに鯖ヶ崎千佛堂・久喜甘棠院・草加の三基を紹介した。赤岩地藏堂の天正二年庚申塔は「板碑概説」出版（昭和八年）の翌年三輪氏と同伴で拓本をとつたのであった。

この二十一種子の解説に対して、世上ややもすれば誤解しているやに感じられる。例えば清水長輝氏はその著「庚申塔の研究」において「昭和六、七年ごろ、三輪善之助氏が服部清道氏とともに、典籍を比較して考究された結果、

・これが山王二十一社の本地仏であることが初めて明かにされたものである」と言い切っているが、真実は前述の通りであつて私が板碑研究は三輪氏に入門手引きされたことは事実であるが、一基一基の解釈迄には及ばず、二十一仏の解説をはじめ、その他のものにおいても、互いに意見の交換はあつたが、それぞれ独自の立場を持して新分野の開拓に突き進んだのであつた。しかし、当時三輪氏は未だ日輪寺の板碑の解明には達していなかつたのであつた。その後三輪氏は昭和十年一月「庚申待と庚申塔」を篠塚四郎氏が営む不二書房から出版したが、その中に板碑系二十一仏種子庚申塔について私が当時未だ知らなかつた埼玉県増森葉師堂、上赤岩地藏堂、千足東養寺の三例を加えてゐる。

『板碑概説』の出版から四十年近くが過ぎ、服部清道氏は、二十一仏板碑の究明についての沈黙をやぶり、これまでの誤解を徹しく正している。

いずれにしても、縣敏夫師の言（前掲「武蔵野時代の三輪善之助」）をかりれば、「三輪氏への評価も意見の交換はあつたが別々に歩んだとお互いの独自性を強調している」ということになるだろう。

おわりに

山王二十一仏板碑は、これまでのところ全国で四十七基確認されておられ、そのうち九基（約20%）が、越谷市に集中している。越谷市は山王二十一仏板碑の最密集地域といえるだろう。本稿では、二十一仏板碑の究明をするに当たつて、それに関わるこれまでの論文を原文のまま取り上げてみた。そのため、

繰り返しの部分があり煩わしい点が多くあるが、これを歴史的な事実として捉えるならば、掲載されているいずれの論文も資料的に価値があり、意義があるものと考えてゐる。

服部清道氏の二十一仏種子の解明によつて端を発した山王二十一仏板碑の研究は、現在では、その分布状況や種子の配列状況等が究明されつつあり、研究は飛躍的に進められている。

今後は、三輪善之助氏が問題とされた山王二十一仏板碑と江戸時代の山王系庚申塔との結び付きを捉え、その地域における山王神道の組織、変遷等の実態を明らかにしていくことが課題である。そのためには、江戸時代の山王系庚申塔の一つ一つを新たな視点で改めて調査し、検討を加えていくことが必要であらう。

山王二十一仏板碑についての解説は、本稿では紙数の関係で述べることはできなかったが、詳しくは拙稿「神道の板碑」（坂詰秀一編『板碑の総合研究』）を参照していただきたい。

また、山王二十一仏板碑を歴史的な価値として捉えた文献として、千々和利氏の著書『板碑とその時代』（山王二十一仏板碑の分布）を是非ともお読みいただきたい。



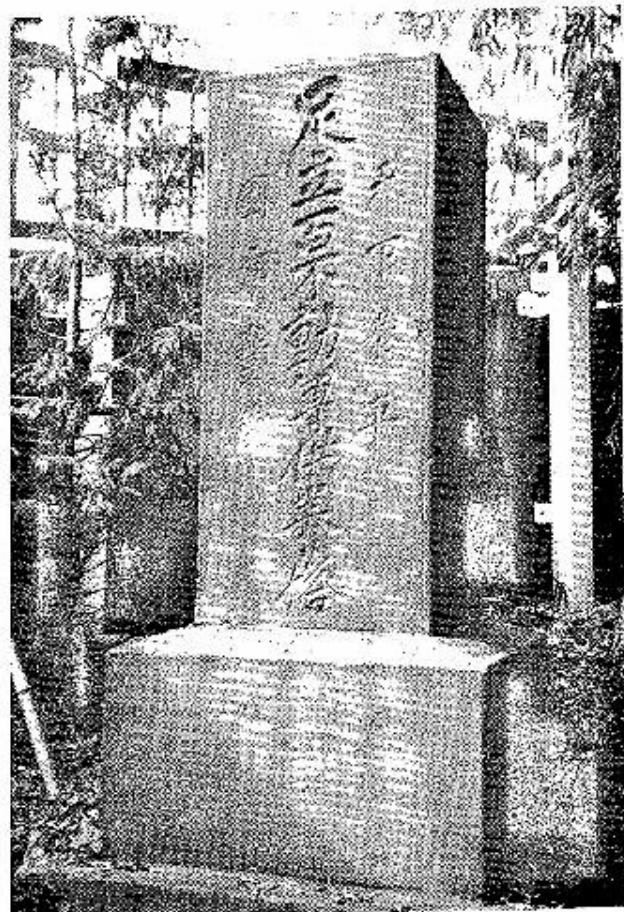
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

足立百不動尊

歩いて確かめた巡拝記

高島 英一

行弘寺供養塔



浦和市太田窪に行弘寺がある。寺の奥に二米をこす「足立百不動尊供養塔」と刻まれた石塔がある。

供養塔の右側面に一番から五十番、左側面に五十一番から百番までの寺院名と、所在する村の名が刻まれている。

江戸時代の庶民信仰を知る上で保存価値の高い石塔である。この百不動尊は、寺を称するもの四十九、院四十一、堂八、坊二となる。地域別では浦和市四十八、川口市三十九、戸田市六、大宮市・与野市・鳩ヶ谷市各四、蕨市三、都内北区二である。百寺院中、以前と同じ所にあるもの五十の内、廃寺が十二ある。寺院はなく、墓や堂だけ認められるもの二十、寺院跡はないが、その場所を確認できるもの十九、移転又は自治会館・集会所になっているもの十一となっている。

武州足立郡

武蔵輿地図（埼玉県文書館蔵・作成年代不詳）によると、足立郡とは、鴻巣・桶川あたりから草加・千住を越して都内墨田区・江東区・葛飾区までとなっている。これとは別の古地図では都内の各区は入っていないものもある。

百不動尊巡拝図をみると、西は荒川、東は綾瀬川で仕切られ、北は大宮、南は都内北区浮間に及んでいる。

百不動尊は、昔の武州足立郡の真ん中にひろがっていることになる。

百不動尊の成立

行弘寺の石塔は一八五九（安政六）年再興とあるから、それ以前に成立したと考えられる。

古文書からみて、百不動尊の成立はいつころなのか、それを知る手がかりはないようである。戦国時代は山伏（修験者）が、その地方の状況を領主に報告することによって修験者の地位を安堵されたもので、当時の為政者は霞の寺々に民衆を管理させ、その寺を修験者（先達）を通じて管理させた。

いずれにしても、百不動尊は修験道の不動尊信仰と関わりがあったと思われる。

神仏分離

足立百不動尊には、神社と寺が並んでいることが多い。

足立郡も例外でなく、神主と僧職を兼ねる「別当」が多かった。わが国では、神と仏の共存・神仏混淆が長く続いた。

一八六八（慶応四・明治元）年、明治新政府は、神道を国教として神仏混淆を禁止した。この廃仏毀釈で、足立郡の各寺院の中でも、別当寺の多くは一八七一（明治四）年ごろまでに廃寺に追いこまれている。

一八七四（明治七）年、天台宗も真言宗も分裂した。

現在、浦和市を中心に吉祥寺・清泰寺・東泉寺などが天台宗であるのに対して、百不動の他寺は真言宗智山派・豊山派が多いのは、この時の影響が続いているのである。

十二年に一度のご開帳

足立郡には、昔から酉年の不動まいり、寅年の薬師まいり、午年の観音まいりが行われ、衰微しつつも現在まで続いている。十二年に一度の酉年には、四月五日から十五日まで、十一日間、足立百不動尊のご開帳が行われる。

平成五年には、行弘寺に世話人が集まって、十一日間とした。これは札元・ふれ元といい行弘寺から各寺院へ集書で通知する。昔は一番の中尾玉林院がふれ元であったが、玉林院が消滅してからは、百番の行弘寺になったようだ。

この十一日間は、全長二十九里十五丁半（百十五杆）を歩くのに余裕のある日数である。百不動のそれぞれの寺院では、世話



人が毎日の当番をきめ、食事・湯茶の接待・お札授与をおこなった。大きな寺院では宿泊の面倒もみたようである。

開帳は、厨子などに納められた不動尊の扉を開き、寺院前に角塔婆を立てる。

その角塔婆から、不動尊の手へ五色の「善の綱」をわたす。信者は「善の綱」にふれることで、お不動様の手にもふれることになる。

貴重な古文書

足立百不動尊については、多くの古文書がある。

◆武州足立郡百不動巡拝図（鳩ヶ谷市 嶋田家蔵）

縦三一、五釐・横四六、五釐 木版刷り

一八五九（安政六）年再版とある。

一番から百番までの番号、村名、寺院名が入っており、次の札所への距離が記入されている。

◆武州足立郡百不動巡拝記（浦和市 内田家蔵・大沢家蔵）

安政五年又は六年に発行され、手帳ほどの大きさで、数枚の和紙をとじてつくられている。村名・寺院名・ご詠歌が記されている。

◆武州足立郡百不動巡礼歌（浦和市 中村家蔵）

一八五八（安政五）年につくられ、村名・寺院名・ご詠歌が記入されている。ここに記された村名・寺院名は、行弘寺の石塔と一致する。

石塔型六地藏

百不動尊の寺院の中で、石塔型・灯籠型の六地藏尊がみられる。石を六角にカットして、その表面に六体の地藏尊を浮き彫りしたものである。六十二番から七十一番までに集まっております。作成年代が、江戸初期の寛文から元禄までというものも何か意味があるのかも知れない。

扁額

扁額は百不動が札所であった証しである。大きさが一定し（縦六十六釐、幅三十八釐）、中央の大聖不動尊の文字の大きさが・字くばり・右上の番号の入れ方まで均一の様式でできてい

る（塚本神明寺だけは別格である）。

行弘寺石塔が再興された一八五九（安政六）年以前に、玉林院で扁額を一括作成して、各寺院へ配布したとも考えられる。

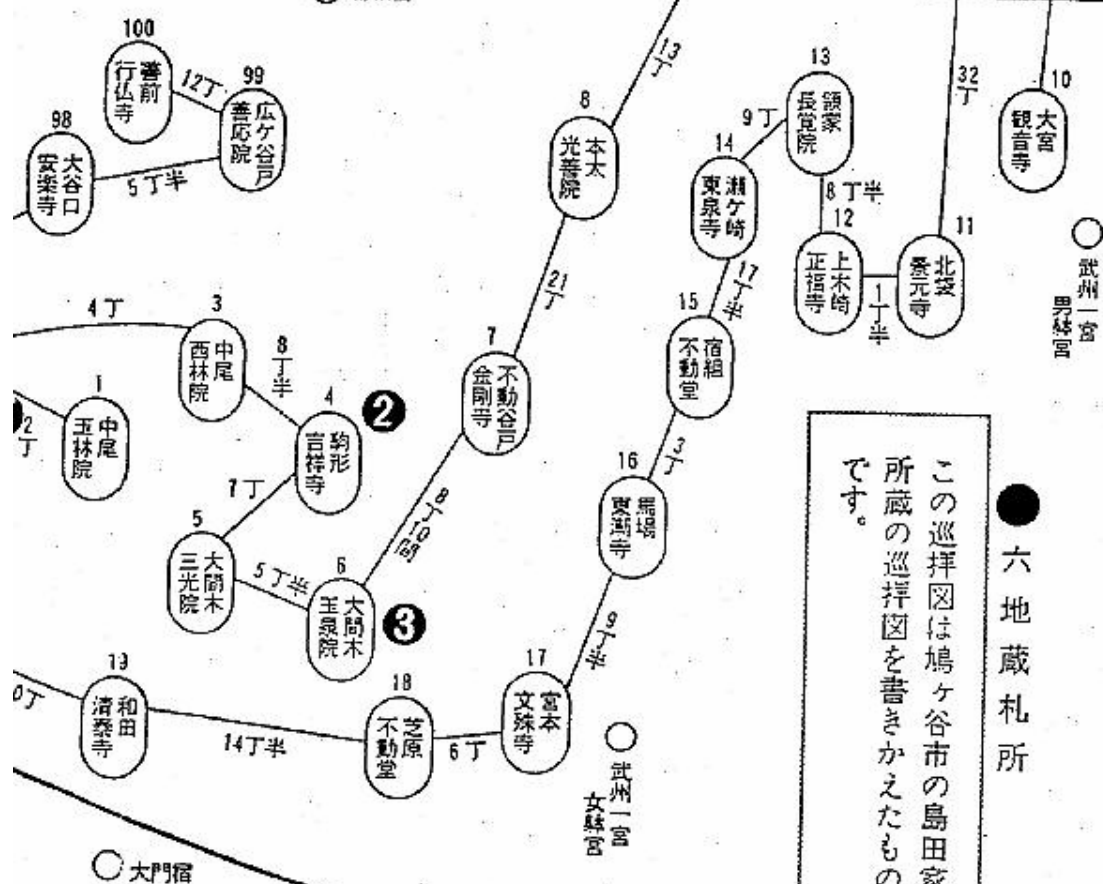
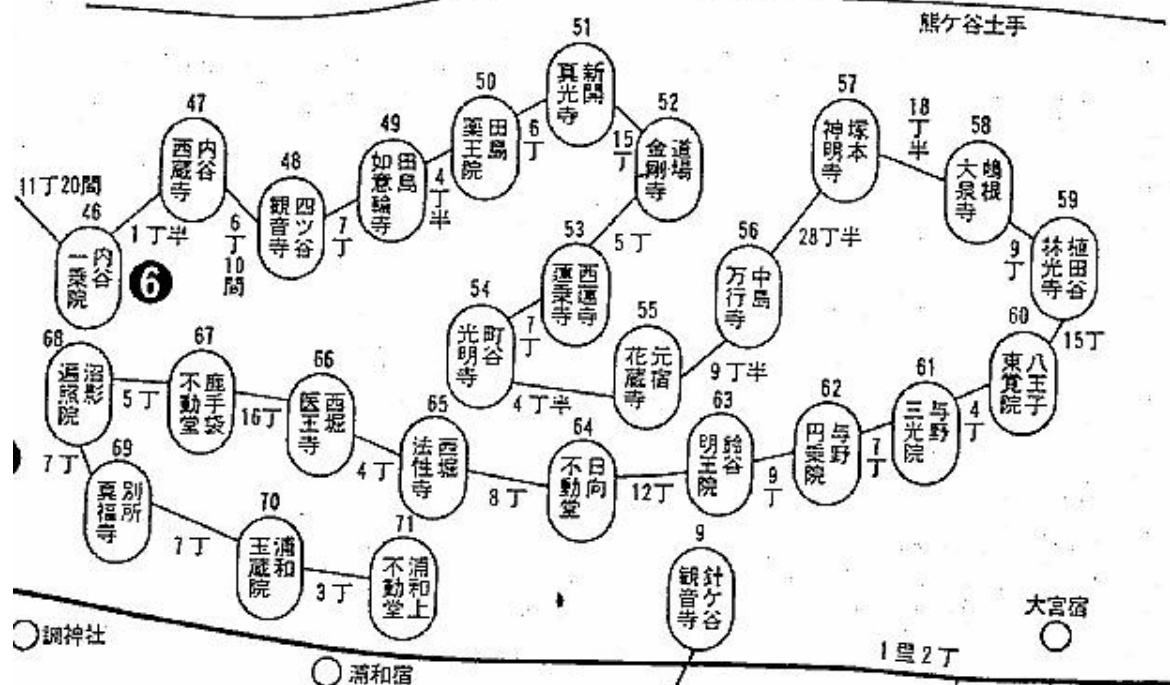
六地藏札所

巡拝図の中に、百不動尊のほかに、六地藏尊札所がある。

百不動巡拝コースに六地藏尊札所が組み込まれたのは、修験者が訪れる熊野の峰々に地藏菩薩がまつられていたことによるらしい。

◆足立坂東六地藏札所

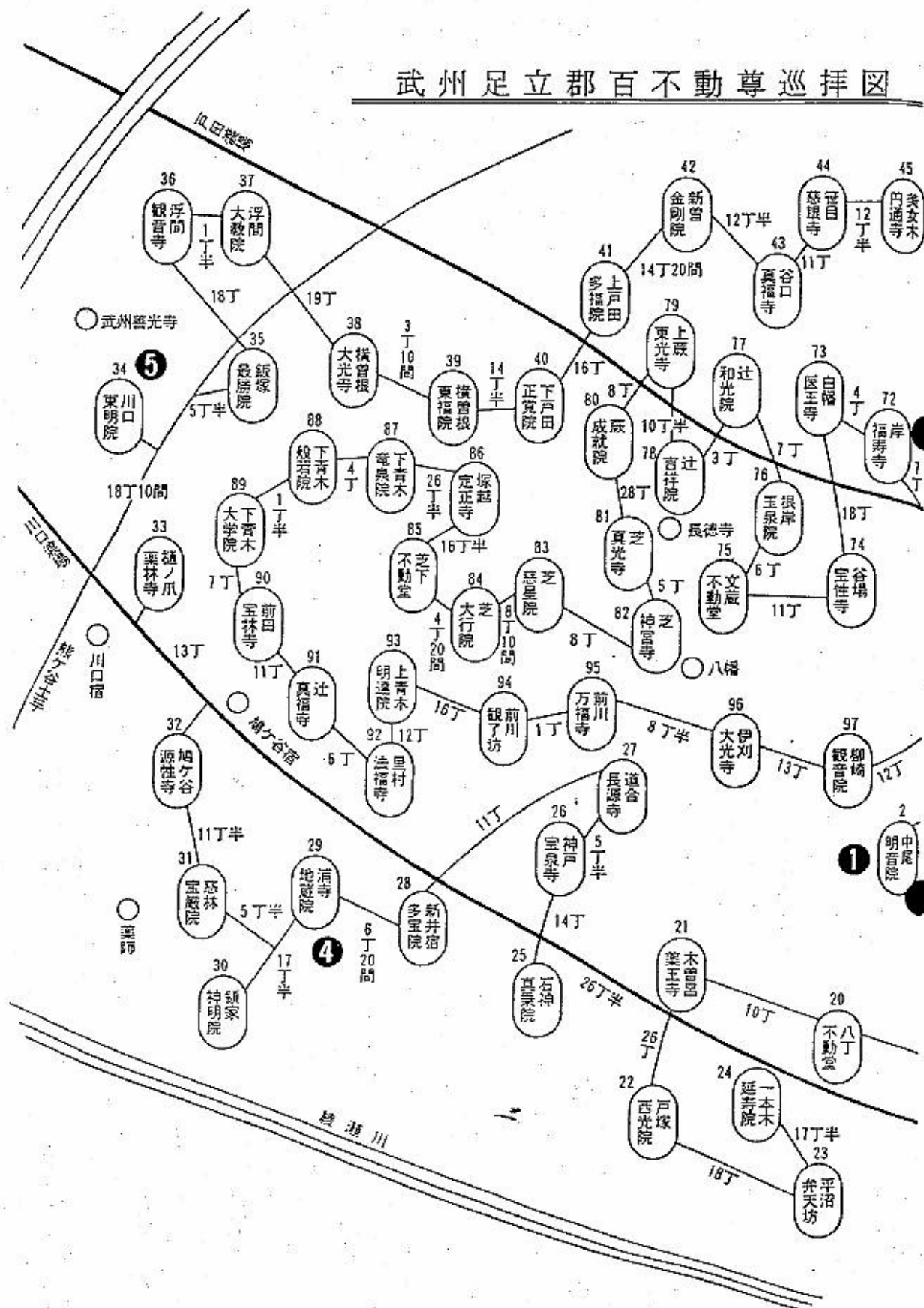
| | | | | |
|----|-----|-----|------|------|
| 一番 | 中尾 | 明音院 | 浦和市 | （廃寺） |
| 二番 | 駒形 | 吉祥院 | 浦和市 | |
| 三番 | 大間木 | 玉泉院 | 浦和市 | （廃寺） |
| 四番 | 浦寺 | 地藏院 | 鳩ヶ谷市 | |
| 五番 | 川口 | 東明院 | 川口市 | （廃寺） |
| 六番 | 内容 | 一乗院 | 浦和市 | |



●六地藏札所

この巡拝図は鳩ヶ谷市の島田家
所蔵の巡拝図を書きかえたもの
です。

武州足立郡百不動尊巡拝図



◆◆◆◆◆越巻学校開設の時代◆◆◆◆◆

高橋 清

明治五年八月、明治政府による学制と共に出された「学事奨励に関する仰出され書」は大変わかりやすく高い理想をもった立派なものであるとされている。その一節を引用すると、

「人々みずからその身をたて、その産を治め、その業をさかんにして、もってその生をとぐるゆえんのは他なし、身を修め智を開き、才芸を長ずるによるなり。」

自今以後一般の人民、かならず邑の不学の戸なく、家に不学の人なからしめざるべからずものなり」。

支配者だけが学問してきたこれまでのやり方を批判し、さらに国家のため、主君のための学問でなく、自分自身のためになる学問こそが必要であると説いているのであった。

この近代的な学問観・教育観が、政府の専制主義と必ずしも矛盾しなかったのである。

愚昧な人民につきつぎに出す改革を理解させるためには、学校教育が絶対必要だったのである。

その意のもとに明治六年四月、公立越巻学校が創立された。当時の村の指導者の意気込みがうかがい知れる。

「日本地名大辞典・埼玉県」によれば、学校開設時の村勢は次の通りである。

「越巻村・戸数四十五。人口二五二人。学校校舎は真言宗万藏院。生徒数二十六」とされている。

今は、この付近は様変わりして、その面影はない。

平成五年四月、有志の手により小学校百二十周年を記念して

「明治六年公立越巻学校開設の跡」の石碑を建てた。



◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

手葉爾備忘録

古田 美雄

何だ。そんな「てにをは」も知らないのかと、言われた記憶がある。はじめての勤労奉仕の工場で、ある測定値を特性曲線を使って、その製品の良否を出す簡単な検査の時である。

その時は「てにをは」の意味がわからずに、何んとなく初歩的なことも知らないのかと言われていると思つて教えを請うた。

古文書クラブが開講したのは、平成三年の五月四日、毎月の第一・第三土曜ということであった。

講義は、温故知新が好きな言葉と言われる鈴木秀俊氏と、継続は力なりが好きと言われる吉田敏子氏のお二人が、交互に担当されて始まった。

古文書クラブに入つて、古文書をやってみようと考えた理由の一つは、史跡めぐりの会があるたびに、石碑や古文書を見る機会が多くあるが、ただ眺めるだけで読めない。口惜しいやら情けないやら、一寸でも引っかければなあ！

もう少し遡ると、あれは、中学二年生の頃の、昭和十四年、東京は大塚駅より田町駅までの通学。その頃の省線、今のJRの山手線で行けば早く着くが、料金が十銭と高い。

そこで、市電、今の都電を利用した。当時の市電は何処まで行つても、乗換えをしても、七銭であった。また、早朝割引があ

つて、朝七時前？に乗ると往復九銭になった。

通学の道中に同じ学校に行く友達もできた。いろいろの本を交換して読む。一晚か二晩で読んでしまう。次々と読み回していたある日、その友人が一冊の古ぼけた本を持ってきた。

何々草紙というもので、絵入りのあやしげな本である。

彼の家は古美術商で、こんな本はたくさんあるとのこと。

一晚借りることにしたが、「変体かな」で、ぜんぜん歯が立たなかった。親に聞くわけにもいかない。読めたのは片仮名のみ、しかし、絵ははじめて見るものでビックリした。

古文書クラブの教本のはじめは五人組前書で、天保四年（一八三三年）のもので、響谷慶三郎氏蔵のものであった。

これは、徳川幕府による行政・行刑の基本を書き綴つて、百姓に守らせるためのものである。辞書によれば、

五人組 江戸幕府が村々の百姓、町々の地主・家主に命じて

作らせた隣保組織。近隣の五戸を一組とし、火災・

盗難・浮浪人・キリシタン宗徒等の取締まり、また

は、婚姻・相続・出願・貸借等の立会と連印の義務

及び納税・犯罪の連帯責任を負わせたもの。

五人組帳 五人組に関する法令を前書に列記し、村役人以下五

人組員が連名・連印して違背ない旨を誓約した帳簿。

とある。また、読んでいくと知っているようで案外わからない

言葉が出てくる。百姓・脇百姓・家抱・前地・店の者など。

これも辞書を繰ってみると、

百 姓 本百姓、江戸時代、家屋敷・田畑を所持し、年貢・

諸役を負担し、村の一人前の構成員として権利義務

をもつ農民。高持百姓ともいう。高持の高とは、収穫とか収入を意味する。

脇百姓Ⅱあまり聞いたことがないが、やはり繰ってみる。

名主または本百姓より低い階層の農民。

家抱Ⅱ江戸時代、百姓の下人で耕地を分けられた後、まだ完全に独立していないもの。家抱百姓・門百姓ともいった。

前地Ⅱこれは辞書にのっていない。本によると家抱と同じだが、区別は不明とある。百五十年ほど前に使用していたのである。

店の者Ⅱ商家に勤める番頭、または手代、丁稚など。

一寸読んでもこんな具合でわからない言葉に出会いながら読み、教本を仕上げていく。

斎藤来由という教本の中に、九世斎藤徳三郎白扇人道佳峰の項の文に、俳諧は葛飾其日庵七世烈山の門に入り、東都四家の奥秘を探る。手爾葉は、烏丸亜相広光の伝えを受け、綾瀬正風一派を起し普く世上に弘め、宝机庵相統す、とある。

この文にある手爾葉は、何んだということになり「てにをは」は、聞いたことはあるが「てには」は聞いたことがない人がほとんどであった。そこで調べてみた。

てにはⅡ弓爾波、手爾葉、三論宗の仏家で用いた「をこと点」の四隅の点を、左下から左中・左上の順に読んだことに由来する名称「てにをは」も同じとある。

をことてんⅡ平古登点、遠己登点、漢文訓読の漢字のよみを示

すため、字の隅などにつけた点や線の符号。その形的位置により、よみが決まる。

てにをはⅡ弓爾平波、天爾遠波、博士家の用いた「をこと点」の四隅の点を左下、左上、右上、右下の順に読ん



だことに由来する名称。例えば「引」の字の左下の隅に点があれば、「引きて」と読み、左上隅に点があれば「引くに」と読む。類で、その右上の二点をとって「ヲコト点」と名付けた。これは、平安時代から室町時代までおこなわれ、流派によって種々の形式があった。

現代でも「てにをは」の用い方にはいろいろある。初歩的な基本を知らない、言葉遣いをしらない、語のつじつまが合わないなどがある。

江戸時代の古文書の書体や筆遣いは、みな一定の形式に統一されていることに気がついた。

調べてみると、この書体はお家流というのである。

能筆家であられた伏見天皇（一二六五〜一三一五）の第六皇子尊円入道親王（一二九八〜一三五六）は、父に劣らぬ能筆家であった。京都の青蓮院門跡を勤められたので、その書流は青蓮院流とよばれている。この書流を天皇は「伝えて家の流とせよ」と仰せられたのがもとで、御家流なる言葉が産まれたと伝えられている。

江戸時代に至って、公文書はこの青蓮院流の書体に限られるようになった。松花堂昭乗が招かれてれて幕府の右筆にその書

体を伝えて、公用体となったといわれる。

また、青蓮院流をよくした右筆・建部伝内のいわゆる伝内流を徳川家の御家流としたともいわれている。いずれにしても幕府初期の右筆の書風が公用体にされたようである。

古文書クラブは平成六年三月で一応、てにをはの講義が終了して、各人がそれぞれ研修中である。

この講座のお陰で辞書をひくのが億劫でなくなり、石碑や古文書も眺めるから少し抜け出せたようである。

これから古文書を勉強される若い人は、漢字の略字しか知らない。昔の字をくずして書いた古文書は、もとの字を知らない人には。現代仮名遣いで育った人には、蝶は「ちょう」であり「てふ」ではない。広辞苑では「てふ」では蝶が出てこない、しかし、大辞林にはある。

大字典では「てふ」であり、「ちょう」はない。

尺貫法・ヤードポンド法・メートル法を使った世代としてはいささか心配である。テレビを見聞きしたりしていると、化粧品や服装の宣伝文句に何とカタカナの間にひらがなが少し、まるで古文書を眺めている感じで意味不明。若い人に聞けば、何だそんな「テニヲハ」も知らないのかと言われるかも知れぬ。

『参考資料』

・広辞苑

・大辞林

・大字典

・古文書判読演習

・古文書判読入門

第二版

第一版

昭和五二年版

樋口政則

樋口政則

岩波書店

三省堂

講談社

名著出版

名著出版

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 薬師仏のお開帳

名倉 さわ

新川町一丁目の万蔵院を過ぎると、武蔵野線の下をくぐり右に折れる。田園風景の中の古風な高垣に見え隠れする懐かしい道路を谷中方面に向かって行くと、新川町二丁目の薬師堂が見えてくる。

この薬師堂は、正徳三年に建築されたと伝えられている。今は現代風の瓦葺の平屋に変わってしまった。また町民の集会所として使用されている。

墓域も整理されている。新しい墓域は古い墓地と向かい合い、整然と区画されている。墓域には、正徳四年（一七一四）の地藏供養塔、寛文四年（一六六四）・享保九年（一七二四）の観音供養塔と共に、「四国供養塔」がある。

正面に榊の大樹があり、その下に元治元年（一八四六）、俳諧の師（蕉休居士）の句が刻まれた碑が、蒼むして建っている。ほかにも、俳諧にちなんだと思われる嘉永六年（一八五三）「色よきもの」と題した奉納額が保存されている。

薬師堂では、毎年五月の、七日・八日に恒例の供養祭が行われている。この祭には、病氣治療の仏として多くの人々が参拝にこられ、供え物を奉納する、当地の方々は参拝者に親しみを感じ、夕べの一刻にお接待をする。

薬師様には、恒例の行事のほか、七年ごとの四月にお開帳が行われる。今年はお開帳の年に当たった。

当地の人々は全員でそれに取り組むのである。

正面入口に、アーチを作り、赤白の布を巻きつける。

赤い丸い五個の提灯がアーチに吊される。夕刻になると灯が点じられる。本堂の中の薬師様は秘仏であり、七年目にお厨子が開かれる。お供え物は糯米一斗を餅に搗き上げる。

中央には、五升一組の供え餅を作る。当地の人々は大きい供え餅をけんめいに作る。残りの五升は六組のお供え餅に丸める。

計七組が供えられる。

手作りの鏡布団の錦の布は、金糸銀糸の彩とりどりに輝き、奉納下さった方には感激した。

そのほか、当地の方々の深い信仰には驚くばかりである。

飾り付けの準備が済むと方丈様をお招きする。

七年間閉ざされていた秘仏のお厨子の扉は、方丈様によりいよいよ開かれる。

静かに、そして左右に扉の開く軋みは、あるなしの風を伝って、人々の耳に残った。黄金の光を放つ一瞬、目映さに合掌した。

薬師様の額に一つの光る物があつた。

「古いことでさだかではないが、この光る物は薬師様の装飾品で……水晶かダイヤに代る貴い飾りであろう」

「この薬師様は、奈良かあるいは、その他より移されたらしい」方丈様から丁寧な説明が一同にあつた。

人々はそれを聞き、合掌してお厨子の中を覗き込んで、感嘆の声をあげた。お厨子の両側に、お前立の仏が立っておられる。

秘仏をお守りしているように見える。

秘仏の薬師様のすだれも静かに巻き上げられた。

お開帳式の読経が始まり、参拝者が正座すると、広間は水を打ったようになつた。

方丈様の焚く香煙が人々の上を流れていった。

薬師様のお手より、五色の布が広間をよぎり、鰐口の紐に結ばれる。参拝者は鰐口の紐を握ることで、薬師様におすがりできることになる。健康・豊作・病氣快復、それぞれの祈願をすることができるのである。

そのあと、当地の方々の心温まるご接待を戴き、穏やかな心の安らぎを感じつつ、お開帳席をあとにした。



終戦特集

激動の時代から半世紀を過ぎた今……………。

アンケート (順不同)

ご芳名 年齢

- ① 昭和二〇年八月十五日、どこにおられましたか。
- ② 昭和二〇年八月十五日、何をしておられましたか。
- ③ 終戦前後、最も鮮烈な印象を一つお書きください。

長谷川鉄太郎 74

- ① 昭和二〇年一月、沖縄より台湾に転進し、台湾の花蓮港飛行場。
- ② 台湾花蓮港飛行場にて勤務。
- ③ 昭和十九年、沖縄にて米軍の攻撃に会い、建物は百%焼失。洞くつにて軍務についていた。米軍上陸三ヶ月前に台湾に転進終戦をむかえ生きて復員できたこと。

高島 英一 68

- ① 南洋群島 ロタ島。
- ② マリアナ諸島のロタ島で、ジャングル内の避難所で代用教員をしていた。
- ③ 島にいた陸海軍四千人が降伏調印のあと、グアムにいき、米軍が来た。翌年二月一日、私達が米軍の船で引きあげる迄の半年間、彼等の紳士的な態度には敬服した。女性に手を出したという話は、一度も聞かなかった。

小酒井 信治 81

- ① 中華民国。自宅は河北省豊台鎮。勤務地は北京南河街現地法人義合祥建設会社、水道部技術者で、当日、天

津支店に出張中、終戦となる。

- ② 天津支店。山海關塩化公司建築に伴う水道設備工事打合のため出張中。
- ③ 昭和十八年、河北省石家莊站。内地より初年兵約二百名が駅に到着。米軍機 B 17・B 29 の爆撃により、駅長の指示による防空壕への散開に対し、引率指揮官これに従わず、多数の死傷者が出た。我々は防空壕内に於いて爆撃を受けるも命あり、終わって地上に出て、付近が一変していた。在郷軍人の班長をしていたので、直ぐに連絡を取り、皆と共に指示を開始した。

中村 忠夫 69

- ① 海軍、追浜海軍航空隊 第七夜間飛行隊。
- ② 八月十四日午後、明日十五日に、天皇陛下の玉音放送があると上官から言われておりました。当日昼頃と思いますが、「玉音放送」で隊員全員が日本の敗戦を知りました。夕食に酒が出て、一人の将校が日本刀を振り廻してあばれ、逃げ廻っておりまして。
- ③ 昭和二〇年五月二〇日午後二時頃、追浜航空隊石黒大尉、某一等飛曹の乗った、日本初めてのジェット機、秋水の試験飛行の際、離陸には成功したが、主液体燃

料に点火せず、墜落、両名殉職した。

K・H

73

①ポルトガル領スンパワ島。

②船舶工兵・上陸用舟艇での輸送任務。

③内地帰還・インフレ・ギンシャリを手にしたときの感激・幸福感。

平井 五六

75

①昭南島。

②終戦を迎えました。

③内地に帰れるという喜び。

木原 徹也

51

①千葉県野田市の自宅といます。

②不明。

③月日は不明ですが、夜、自宅前の未舗装道路を、数十人の兵隊さんが、隊伍を組んで通るのを、恐ろしく、そっとのぞき、その時の、ザック・ザックとした足音を、幼心にはっきりと憶えています。

青山 栄吉

59

①足立区保木間町の自宅。

②昼に「玉音放送」が予定されていたので、自宅でも聞いていなかったと思う。

③アメリカ兵との出会い。

近くにあった高射砲陣地に米軍が進駐してきた。

子供（小五）だった私は、近所の友人と陣地に行くとき米兵が明るい声で話しかけてきた。聞かされていた米兵とは、違いが大きかったので強い印象を受けた。

山梨 隆司

72

①重慶に一日行程の貴州省まで迫りましたが、友軍機の通信筒により反転、星子にて終戦を聞きました。

蕪湖の居留民が惨殺されていることを聞き、蕪湖の平定をしておりました。

②我々は敗戦の経験もなく連戦連勝だったので、五号無線の日本敗戦もデマと思っていました。大隊長の訓示により、兵隊の猛挙を治めるよう掌握に大変でした。

③私は遺骨をハッも抱いて、佐世保に上陸しました。行軍中、誰一人として頭を下げるものも居らず、悲憤慷慨しました。復員列車の窓から乗り下りする乗客、日本はこれからどうなるものかと。

名倉 さわ

77

①新川町一の八二、家族三人戦争に出ていました。両親と子供三人、丁度、雑炊の昼餉を済ませた時でした。

②増産にはげみ、畑に出ようとしました時、両親とラジオを共に聞き、陛下のお言葉に頭を垂れました。

出征者はどうなるか？母共々声を上げて泣きました。

③私には乳香子がおりました。母乳が出ないため、山羊を飼って子を育てました。

後藤千代子

48

①母親の胎内。

②

③今みたいな飽食の時代と違い、卵やお菓子等、姉妹で仲よく大事に分けあって食べたのがなつかしいです。

匿名

72

①愛知県瀬戸市。

②尾張瀬戸駅から名古屋堀川へ出て、東京へ帰京する途中、尾張瀬戸駅前の日通事務所で、終戦のラヂオ放送を聞いていた。

③三月十日の翌朝、品川駅着。夜行列車で帰京。歩いて本所の自宅の焼跡へ立ち、自宅の焼けたことが信じられなく、まだ熱い土の上に腰を落としたこと。

井田 康雄

71

①川崎市東芝柳町工場。

②空襲が激しくなり、工場を山形の酒蔵に疎開するために機械等の荷造りをしていった。

③私は工場の防護団の団長付でしたので、家には殆ど帰れず泊り込みでした。川崎が空襲され、附近は火の海鉄製の窓ガラスが壊れ、火が室内に吹き込むので、書類や机をかたし、懸命に水をかけていました。これで私も死ぬのかと思いましたが幸い工場は無事で、その功によりキャラメル一箱を戴きました。皆んなで一ヶずつ分けて、なめたその甘っとろい味は

忘れられません。

若松 清一

68

①千葉県習志野（市？）に居りました。

②習志野（連隊？）の富嶽隊に所属し、甲種幹部候補生として教育訓練中でした。小生は今の学校での副級長でした。

③私が昭和十九年に入隊したのは、秋田十八連隊で、第二中隊（これははつきりしません？）で、小生は選ばれて、昭和二十年七月甲種幹部候補生になりました。そして某日、一泊二日の休暇をいただき、故郷に帰り両親に会い、その写真をいただき、水さかづきを交わして隊にもどりました。その後、千葉習志野の教育隊に派遣されます。そこでの訓練は、南方戦線での生き残りされた某大尉の、実戦経験にもとづく、肉弾戦、即ち肉弾突撃を主とした特殊訓練でした。当時の報国精神に徹していた若者には何の不思議もない当然の訓練でした。小生自身、人生二十五歳を覚悟し、何の恐れもなく、例えば「戦後、家に帰る」とか「会社にもどる」とかいう事は全く考えてもおりませんでした。したがって、敗戦を迎えた時の私は、茫然自失の状態でした。又、其の後、人伝に聞いたことですが、秋田の同年兵達が、丁度、私が甲種幹部候補生として千葉県習志野に派遣された後、鉄砲もなく、竹みつの銃剣をぶらさげて、朝鮮半島を経て、満州に派遣され、間もなく敗戦となり、全員シベリアに連れていかれた

とか？。その真実性、又、その後の消息を、今の私には全く解りませんが、何とも言えぬ空しさが、私の心の深奥に消えることがございません。

中村 建生 72

① 中国安徽省南京憲兵隊。

② 平常通り勤務。市内のパトロール・情報蒐集。

③

小原勘三郎 64

① 都内で四度の戦災で全てを失い、岡山へ行った。

八月七日より、全身黒焦げになった人々が、広島から列車で次々と着き、駅舎で息絶えていった。原爆と判ったのは敗戦後である。

② 岡山・水島飛行機工場動員中。ここも空襲で全滅。

正午の放送は聞きとれず、「停戦協定に天皇が調印した」の流言がとんだ。

③ 昭和二〇年三月四日。文京区千駄木。B29による爆弾投下。至近弾でわが家は倒壊。紙一重で助かった。

直撃弾で一家全滅した知人も少なくない。

山崎 政隆 67

① 自宅 広島県高田郡三田村。

(現在は広島市北安佐区白木町)

② 福岡高等商業(現在福岡大学)学生で、九州飛行機株式会社(中島飛行機)に学徒動員中。

③ (原爆投下一週間後の広島駅前で見えた惨状)

原爆で倒壊した瓦礫の中の累々たる屍骸、その焼けただれた屍骸に真黒にたかっている親指大の蛆の大軍。ただれた傷口にウヨウヨとはい廻っている蛆虫。鼻をツキサスような悪臭。東練兵場で屍骸を山のように積上げて石油をぶっかけて焼いている真っ黒い煙。二度と戦争はイヤだなあと心に誓ったことを思い出す。今日此の頃です。正義の戦争なんてあり得ない。

Y・T 73

① 台湾・台南市。台南海軍航空隊司令部。

② 市外の山地にて(市中より約三里山奥)迫撃砲指揮陣地設営。

③ 前夜と違い、当夜の街の明るさに平和の有難さを感じました。

森屋 英龍 79

① 世田谷区池尻町・東部十部隊。

② 部隊に於いて補充兵教育。

③ 原子爆弾投下。

高橋 清 70

① 八月五日。北朝鮮宣徳飛行場を出発して、現在の横田飛行場に集結した。特攻組の九七重爆七機の搭乗員と整備員事務要員だけ。部隊の大部分は八月十五日以降、混乱の中でした。

筆舌につかない苦勞をして、内地にたどりつく。

②私は滑空飛行第一戦隊といって、大型グライダーを曳航する部隊であった。八月二十日頃「月明」を期して沖繩本島に強行著陸、特攻をかけることになっていた。八月十五日夜も夜間演習が行われることになっていた。で、それぞれ部署に従って整備をしていた。

(但し、午前中だけ、午後は敗戦の混乱に入る)

③特攻隊に指名、編成を発表されたときの心境。

昭和二〇年七月二四日、北朝鮮宣徳にて。

戦争に負けたという、その事実を知ったとき。

八月十五日午後のこと。どちらもショックでした。

中西 昭子 48

①熊本県熊本市春日町

②生後二ヶ月。

③毎日ラジオから「尋ね人」が流れていた(物心がついた時)。

原田 熊蔵 74

①小笠原母島沖村。

②機関銃小隊長として、沖村地区の防備。

③米艦隊から艦砲射撃(約一時間半)を受けたとき、米飛行機は我が陣地の上空を飛行し乍ら弾着の位置を肉声で艦隊に知らせていた。科学技術の差を痛感した。次第に弾着が目標に近づいて来た。

川田佐一郎 73

①軽井沢

②皇太后陛下の防空壕構築工事。

③一装用の軍服で倉前に整列して玉音放送を聞いた時。

長峰 栄子 68

①埼玉県川口市

②前日、熊谷に空襲があり、罹災した方へ炊出をしておりました。

③東京空襲。

会田 俊 85

①越谷郵便局に勤務しておりました。

②郵便局の業務にたずさわって居りました。

③つつしんで天皇陛下の玉音を拝聴したことです。

西沢 許女 62

①松本市入山辺宮原

旧・長野県東筑摩郡入山辺村宮原

②学校が夏休みでしたから、家の農業の手伝いをして居りました。十二時のニュースではよくわからなかったけど、午後、校長先生のお話があるからと云うので、学校へ行って、初めて戦争が負けたと云うことを知りました。

③四姉も離れた所に、軍需工場(富士電気)がありましたから、焼夷弾を落とすようになって、田んぼに一つ落

ちた時は、音と振動のものすごさで自分の家に落ちたかと、身のすくむ思いがいたしました。

鈴木 種雄

69

- ① 福島県原ノ町。
- ② 兵隊。原ノ町飛行場にて、ガソリン給油作業など。
- ③ 八月九日～十一日頃、P51による攻撃を受けたこと。

井上 すす

73

- ① 越谷・出羽村谷中 鈴木方。
- ② 農家の物置をお借りして、叔母と四歳・一歳の子供との生活。
- ③ 前夫の戦死の公報。
農協へ勤務して、田舎の方々の親切と、米作を実体験して、其の大変さを知りました。

星野 三郎

85

- ① 中国・上海市。
- ② 米軍の上海上陸作戦を迎え撃つため、中支派遣軍主力は上海周辺に集結していた。日本軍降伏の情報に依り天皇の戦争集結の詔勅を聞くため、兵舎に集合した。
- ③ 終戦直前は、日本の軍勢力・国力は限界に達していたので敗戦の報は来るべきものが来たと受けとめ、ショックはなかった。広島・長崎の市民のゴセイが終戦の手段に使われた事が残念であった。然し、終戦に依って世界に平和と自由が招来した事は、生涯を通じて最

高の喜びを感じた瞬間であった。

石鍋 隆子

67

- ① 東京都足立区島根町九五五。
- ② 足立区役所勤務、十八年～二十三年迄。
- ③ 電車があまり無いので、よく歩き役所へ行きました。今ではそんなに歩けないと思います。

M・K

85

- ① 越ヶ谷国民学校勤務。
当時は月月火水木金で、休日はない状態。
然し、日曜は休んでも強制はないが、一日休むと翌日はなんとなくへんな感じがした。
- ② 上記に同じ。
校庭に居たことは覚えていたが、玉音放送に気をとられて、外のことは記憶にない。
- ③ マッカーサーが上陸の日、雲霞の如き飛行機の大部隊には度肝を抜かれた。

高谷りょう

85

- ① 疎開先・茨城県龍ヶ崎市長沖町の農家の一隅で、家族と共にラジオで、停戦になり天皇陛下の放送を静かに聞き、感涙しました。
- ② 特別な終戦日となり、緊張して皆でラジオ放送に耳を傾けて居乍ら、戦後どうなる事かと、夫の話も聴いてましたと思います。

③私は、戦後十年勤務した農業協同組合を止め、取手市へ引越して、夫は取手市会議員になり、新聞発行社の仕事が開けて、活気がある生活に変わりました。当時の印象に残ります。

西田 茂 66

- ①勤労動員。北千住・昭和ゴム(?)。
- ②上記工場で玉音放送を聞き、宮城へ行き帰宅(川越)
- ③

谷岡 隆夫 60

- ①疎開先の広島市内の親戚宅。
- ②私達通学の国民学校は、原爆被災者の臨時宿泊所と治療所に早変わりし、当日は休校で在宅。
- ③原爆の威力と悲惨な戦争。

鈴木 秀俊 67

- ①岩手飛行場。
- ②陸軍特別幹部候補生・飛行兵。
- ③終戦の玉音放送。

酒井 達男 67

- ①葛飾区四ツ木小学校。
- ②警備召集で東部二一六三部隊が駐屯していた(一個小隊)。

当時は商売をしている人(米屋・酒店)を、この小学

校に集合させて、主に銃剣術を指導教育していた。

- ③1・東京大空襲。

2・隅田川の惨状。

T・Y 71

- ①実家の疎開先である埼玉県本庄市に居りました。
- ②夫は出征中。一人で住んでいた婚家は四月の空襲で焼失したので、実家に帰って居りました。終戦の詔勅を伺って、今夜から明るい夜が迎えられと云う喜びと同時に今後の自分の生き方を決めなければと考えるようになりました。

③三月十日の大空襲の時には、渋谷区幡ヶ谷に住んで居りました。その夜、東京の中心辺りの空は一面真赤で爆弾を落としたであろう敵機は、明治神宮上空辺を旋回しては、再び下町方面に向かって行き、わが家の白壁が夜目にもはっきりとピンク色に染まって居りました。

鈴木 政子 77

- ①現住所におりました。市内増林三七八五
- ②妊娠八ヶ月なので、七十二歳の祖母と三歳の子を守り家事につとめておりました。夫は学校勤務中。
- ③空襲警報後の空中戦の内、一機が火を引き落ちてゆく(敵か味方かは判らない)。空中は花火のように見えた。大吉耕地に落ちたのかとも思う。

高崎 力

66

- ①越谷市大泊 特甲幹待機中。
- ②中島飛行機大宮製作所に学徒動員としてエンジンの後蓋検査をしていた。当日は特別甲種幹部候補生の入隊を前に実家で休んでいた。
- ③八月十五日午前(自宅にいて)空襲があり、昼時重大ニュースの予告があった。午前十時過ぎ日本の戦闘機がいつになく乱舞するのを目撃し、重大ニュースとは「戦争に勝った」ではないかと期待して正午のニュース聞きとれず、意味解らず、個人としては停戦と判断した。

木村 実

76

- ①千葉県木下町(利根川端)。布佐Ⅱ木下Ⅱ安食Ⅱ成田
- ②利根川へ戦車の通れる橋をかけて居ました。
- ③人生の内が一番強い印象だった。二〇年八月十五日の敗戦の日の玉音放送。

林 和江

61

- ①東京都港区麻布。
- ②学生。
- ③家も燃えてしまい友達も亡くなり、とても悲しい思いがした事がいまも強く心に残っております。戦争は本当にいやだと、子供でしたが、母によく話していました。

鈴木タカネ

66

- ①東京都豊島区長崎三丁目。中野区。
- ②学校疎開の用意。
- ③焼けた東京。インフレ。友達の家族の死。友達の死。

池田 仁

67

- ①八王子近くの仮兵舎になったある小学校。
- ②・十一時まで船舶工兵として、多摩川河原での白熱した戦闘訓練。
 - ・十一時三〇分 全隊員が完全軍装で校庭に整列、炎天下、不安と緊張の中で玉音放送を謹聴。不明瞭な放送だったが無条件降伏を知り、全将兵虚脱状態。
 - ・その後、急激的に軍規、抑圧感が緩みだらだら生活を抜け街並みを通って隊の武器をある集積所に運搬。
- ③終戦後久し振りの外出。わくわくした心を抑え、衛門を抜け街並みを通って隊の武器をある集積所に運搬。無気力で疲れきって歩く市民と行き交う中に、二、三人のキラッと輝いたおさげ髪の女子学生に、はたと釘づけにさせられた。今までの我慢抑圧から開放され、自由と夢を得た転換のはやい乙女だったのだろうか。清潔なセーラー服、輝いた瞳に笑みを浮かべ、敗戦兵に軽く会釈して、かるやかに歩き去る姿にまぶしいほどの気品ある美しさに感動、新しい明るい歴史の転換を垣間見たような気がし勇気付けられた。

宮川 進 55

- ① 滋賀県近江八幡市（当時蒲生郡八幡町）にいました。
- ② 国民学校一年生、はじめての夏休みでした。
- ③ 主権在民・戦争放棄の新憲法に、子供ながら、日本の明るい将来を感じたこと。

堤竹 宏吉 61

- ① 栃木県岩舟町の生家に父母の愛護のもとに居住。数日前から重要録音放送がラジオであるとの情報があり、正午まで待つ。

- ② 国民学校六年生の夏休み中、盛夏晴天の日和。

家業の手伝いと、友人と山野で遊ぶ。

家族全員で終戦のラジオ放送に聴き入る。

悲報につぐ悲報で将来は、暗黒の世相で一杯でした。

- ③ 1・当時母校小学校は、日本の兵隊さんに占拠され、学業不能でした。

- 2・夏休みの登校日には、担任の先生は泣きぐずれ、一緒に悲嘆にくれたのでした。

- 3・教室の教壇上の額縁の文字が印象的。

戦時中↓忠君愛国、滅私奉公、米英撃滅
戦後↓新日本建設、平和国家、友情・親切

岩沢 明 59

- ① 長野県湯田中温泉。

- ② 病氣治療（身体衰弱のため）。

- ③ 湯田中で近村の人々と一緒に敗戦を聞き、多くの人々

は、安堵感と不安感で複雑な心境なのに、二十〜三十代の多くの人々は、まだ戦争を続けると、元気な声をはり上げていた。

古田 美雄 68

- ① 東京・池袋。

- ② 東京・吉祥寺の軍需工場で働いていた。

- ③ 昼間爆撃の掃討のB29に戦闘機が尾部に体当たりしたのを目撃した時。体から汗がサァーと引いた。

戦闘機の翼がキラキラ舞いながら落ち、B29もフラフラしながら視界から消えた。

◆◆◆◆◆戦争末期の出来事を思う時

青山 栄吉

昭和二十年三月九日夜、空襲警報のサイレンが鳴り、私は家族と共に庭の隅に作った防空壕に入っていた。

空襲警報が解除になり、防空壕を出て南の方を見ると、夜だというのに空は赤く染まり、地上の火災の激しさを示していた。数日後、当夜の空襲で浅草、本所、深川など下町一帯の家はほとんど全焼した話を母から聞かされた。こんなことが続いて日本は勝てるのかという、漠然とした疑問を子供なりに感じた。なにしろ物心ついてから目にする絵本や少年雑誌には、日本軍の突撃シーンや空中戦で敵機を撃墜する場面が勇ましく掲載されており、これらを読んでいるうちに、日本軍は無敵の意識が身についていただけに、どうしてこうなるのかという気持ちだった。その後も空襲は激しさを増した。

私が通学していた足立区立淵江国民学校（今の小学校）は、昭和二十年四月の新学期から閉鎖され、全生徒は学童疎開か縁故疎開をしなければならなくなった。

私が五年生になる時であった。学童疎開は長野県に決まり、田舎に知り合いのない私は学童疎開に行くつもりでいた。

しかし、母が伝手を頼りにあちこち奔走したらしく、草加にある今井さんという家に私の籍を移し、草加国民学校に転校する

ことになった。実際の通学は、朝、足立区保木間町の自宅から自転車で行き、そこに自転車を預けて登校という方法になった。当時は、すいとん・お粥あるいは雑炊が主食の食糧難の時代だけに、疎開先での生活のことや、仮に一人だけ生き残っていてもどうなるかを考えた末の選択だったと思う。

草加の学校には、私以外にも疎開で転校してきた生徒がいた。いわゆる疎開生徒と地元生徒との間には、越えにくい溝のようなものがあり、なんとなく対立ムードが漂う雰囲気だった。

私は周囲のことはあまり気にならなかったが、警戒警報と同時に帰宅する時が辛かった。

警戒警報のサイレンが鳴ると、生徒は防空頭巾を被って校庭に集合し、地域別に班を編成して帰宅する。この帰宅要領は淵江国民学校当時、何回も経験済みだったので迅速に行動できた。私の場合、学校から今井家まではそれ程の距離はなかったが、そこに預けた自転車を保木間町の自宅まで帰らねばならず、これが辛かった。今井家は留守がちなためやむを得なかった。私の帰路は旧道を谷塚方向に向かうことになる。

今井家を出てしばらくすると、道路には人影がなくなり、不安な気持ちに襲われることもあった。ただ、家に向かって自転車のペダルを力一杯踏む動作を繰り返した。

谷塚を過ぎ、水神橋にさしかかるころから、今の西保木間町に国道四号線を跨いで、両側に施設されていた高射砲陣地から射撃が始まることもあった。

この高射砲は一万m上空を飛ぶ敵機を撃墜可能な、当時としては最新鋭のものだっただけに、その発射音は相当なものだった

防空頭巾を被っていても耳に響いた。

私の家に着くには、この高射砲陣地から約百m離れたところを通っている旧道を南に向かうことになる。

当時、飛行場、高射砲陣地、軍需工場は、爆撃の第一目標にされておられ、現にこの高射砲陣地にも爆弾が投下され、二、三門の高射砲が破壊されたことを知っていただけに、このあたりを通過する時がいやだった。相当なスピードで走っていても疲労は隠せず、このあたりを通過するころにスピードは落ち、懸命にスピードキープに努めた。

家に着くと、皆、防空壕にはいつていた。母だけは門の脇に立って私を待っており、私の姿が目に入ると道路の中央に出て来て、声はださずに「早く」という小さなジュスチュアをされた。当時は特に感じなかったが、自分が子供を持ってみて親の気持ちかわかった気がした。

こんな日々だったので、七月下旬、夏休みに入ったときはほっとした。そして八月十五日の玉音放送とともに戦争は終り、二学期から淵江小学校に戻った。

草加の学校に通学したのは一学期間という短い期間だった。

転校が緊急避難だったこと、学校では疎開生徒と地元生徒との間に対立ムードが漂うなど、異常な環境での生活だっただけに、五十年を経過した今でも頭の片隅に残っている。

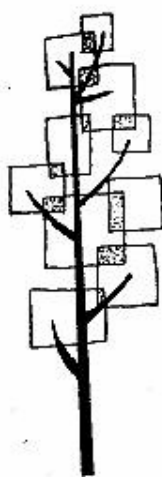
当時、人影のなくなった道路を家に向かって懸命に自転車走らせたと同じコースを車で通る時、五十年のタイムトンネルを抜けた自分の姿が、運転している自分とオーバーラップする。ふと気がつくと心持ち背中を丸めていることもあり、拭いきれ

ないものになっていることを感じさせられる。

近頃思うことは戦争は多くの悲劇をもたらしたことは事実であり、私にもわずかながらその痕跡が残っている。

「戦争＝悲慘＝悪」という方程式にウェイトが置かれ、何故、戦争をせざるを得なかったかという背景については、あまり語られていない。この点について、朝日新聞「声」欄で、高校教師が生徒から「太平洋戦争が悲慘な結果をもたらしたことは教わるが、どうして戦争せざるを得なかったか、また、当時の人達はどう考えていたのか等については説明がない」というレポートを受け取り、あらためてその必要性を痛感した、との記事を読み、その通りだと感じた。

今、郷土研究会の会員として、地域社会が形成されていく過程を、神社仏閣等の見学を通して勉強させてもらっている。地域社会に限らず、歴史を客観的資料に基づき、できるだけ正確に把握することに興味を感じている一人である。



東京大空襲

酒井 達男

今から約五十年前、あのいまわしい劫火の嵐は、月日の歩みと共に忘れ去られようとしている。

昭和二十年三月十日、東京の東部は米軍B29の油脂性焼夷弾の絨毯爆撃により灰燼に帰した。開戦から四ヶ月あまりの有頂天な戦勝気分は、昭和十七年四月十八日のB25の空襲により一変に吹き飛んだ筈だった。被害軽微だったためにその教訓は忘れられたようだった。

十九年十一月一日、米軍新型重爆B29一機が、初めて夜間偵察に飛来してきた。吾軍の数十基の探照燈により浮かび上がった四発の敵機を見たあの時の驚きは、今でも鮮明に覚えている。敵機は北方から葛飾、江戸川方面の上空を悠然と南下していった。その間、地上から高射砲弾が敵機に向かって猛烈に炸裂するが、微動もせずに遠くに消え去って行った。戦後、判明したことが、一万m近くの高々度の敵に対し、これらの砲の飛距離では届か届かず、すべて空砲と同じであつとはまさに漫画と同じであつた。しかも、僅か一機に対し、味方戦闘機は一機も迎撃せず、こんな事で今後の空襲に対してどうやって戦っていくのかという疑念が頭をよぎった。

二十年三月九日、夜十一時ごろ警戒警報になった。ラジオが

知らせる東部軍情報によれば、敵数機房総沖を旋回中と報じたので、やがて東京にくるなと予感がした。まさかあの大地獄になるとは思ってもみなかった。

戦後の米国資料によれば、この数機とはB29四機のこと、後続の大編隊を誘導する役目を帯びていたものだった。

零時すぎ、当時、向島区隅田町の自宅から見て遠く南方に、突然火の手が上がり瞬く間に空が明るくなった。

さては空襲開始かなと思っていた矢先に、けたたましい空襲警報のサイレンが鳴りわたった。初弾は深川に落下したのだ。

二十年初頭、米軍マリアナ基地にある爆撃軍団の空軍司令官に、欧州戦線から転属された鬼将軍カーチス・ルメイが着任したその時から、日本本土丸焼けの運命が決定づけられたといわれている。

当時、十八歳だった私の古びた日記帳には、この日、来襲したB29は大本営発表をそのまま書いた筈の一三〇機となっている。そして米国資料によれば三二五機であり、大きく相違している。これは日本当局が、いかに被害を小さく発表することに腐心していたかがわかるものである。敵の攻撃は従来の高々度戦法を変えて、夜間単機低高度(平均二千m)で東京湾から奇襲をかけてきたため、完全に後手を踏んでしまったようだ。

その日、自宅の庭にあった防空壕には母と姉妹三人が入った。私は母の再三の入壕要請にそむいて、これから迫りくる空襲の実態をこの目で見ておこうと、意を決して壕前に立った。

そしてあの修羅場を見たのである。幼い頃から徹底した軍国教育を受けてきた私の心には、恐怖心はあまりなかった。

どうせやがては死ぬのだという気持ちがあったので、あの業天を覗くことにもなったのだろう。

悪魔の二時間四〇分、火の海となったために昼間のように明るい。探照燈も不要となった。あの巨大怪物が右から、左からと乱舞蹂躪、猛烈な対空砲火音、特に東武堀切駅際の荒川土手上にあった陣地から撃つ数門の高射砲音は凄まじかった。

南から真上にきた一機は、急に火をふきながら北方に飛んでいった。健気にも味方機が突っ込む。敵の後方にビタリとついて機関砲を撃ちまくっているのを、延八機ほどこの目で見た。双発だったので海軍戦闘機月光と思われる。

しかし、残念ながらこの攻撃で敵機は火をふくことはなかった。やがて迫りくる火焰と共に、隅田川の千住側造船所付近の大型ダルマ船十五隻ほどが猛火に包まれ、折からの強風に流されて隅田町側に接岸するさまは大スペクタクルである。地軸を揺るがす戦慄の時間は過ぎてゆく。

米国資料によれば、この攻撃で十四機失ったと記されている。

幸いなことに、隅田川と荒川、綾瀬川に挟まれた地帯が焼け残った。一度はもう駄目だとあきらめて綾瀬川際に避難したが、自宅付近が残ったことは、本当に万一の僥倖だった。

やがて迎えた朝の状況は悲惨そのものだったが、涙は許されなかった。

焼け出されたおびただしい人々の列。火煙で顔がドス黒く、殆どが目をやられている。死んだ子供を背負った人も多くいる。とてもこの世の姿ではない。

これから何日も引きも切らずに、北に向かって歩く人の列は絶

えなかった。

また、隅田川の惨状は酸鼻を極めた。水の面より犠牲者の面が大きく、やはり子供を背負った姿が目だった。渚の捨小舟のように上流へ、下流へと浮き漂うさまは、とても直視できなかった。

こんな状態ではたして戦争は勝てるのだろうか、ふと考え込むことがあった。

当時の私は、日本軍の総反抗が必ず始まり、やがて勝利に輝くことを信じていた青年の一人であった。

今、考えると滑稽なことになるが、当時はそれほど純真だったといえよう。



隅田川畔の惨状

たのだろう。溜息がもれる。

それにしても焼夷弾の強い火力に驚かずにはいられない。

トラックが引き返してきた。毛布を積み替え、上乗りは六人

(運転台二人)、故障トラックの運転手一人を残して出発。

真昼間の新宿には人っ子ひとりいない。ビル街を走り抜け、

代々木の連隊に到着。

中は何か慌ただしい。毛布を納めて昼食。

運転手の受けた命令では、千住の皮革工場で牛皮を引取り、

赤羽被服廠で軍服を積み込み、朝霞被服廠へ帰る予定になっている。

いる。

都心は大通りなので、被害状況は判らない。また、無感覚にもなっている。上野駅ガード下で、兵隊三人に停車させられた。

上野駅は罹災者で黒山の山。

「どこまで行くのか」

「千住から赤羽へ行き、朝霞までだ」

「坂戸・松山方面へ行きたいのだが、電車は動いているか」

「東上線は動いている」

「よし、朝霞まで乗せていってくれ。仕事は手伝う」

かくして兵隊を乗せて出発。

上野駅を過ぎてから、被害の大きさが真実味を帯びてきた。

千住大橋を渡って両側は焼野原。しばらくして左折。

皮革工場は狭い道を挟んで両側が工場、しかも延焼中。

泊まり込みの従業員が、二・三人が消火作業をしている。

二階までメラメラと燃え上がっており、手がつけれない。

事務所へ行き、倉庫に案内された。倉庫にはまだ火の手が廻っ

ていないようだ。

戸を開けた。中は火の海、中柱が燃えている。牛皮の山に、床

の火が二・三寸まで忍び寄っている。一瞬、躊躇した。

兵隊一人が物も言わずに飛びこんだ。

続いて兵隊二人、我々も夢中で飛び込む。火の下をかくぐり、

牛皮を担いでトラックに投げ込む。五・六回往復して、無事に

運びだし、休むまもなく延焼中の工場を後にした。

見渡す限り無人の焼野原。灰色の世界。焼けたトタンが、風

に吹かれて音をたてる。蛇口から水が流れ落ちていく。

チロチロと残り火が見える。時折り風が吹くと熱気がムッ

とトラック全体を包む。そこに二・五米くらいの四角い黒い

物が見える。その側を通ると熱気が身体を包む。

「何だろう」「判らない」

「紙じゃあなかろうか」兵隊が言う。

「そうかなあ」

トラックに揺られて、ただ、あまりのひどさに周囲を無言で眺

めているだけ……こんな焼野原をトラック一台が走り続ける。

赤羽被服廠へ着く。誰もいない。中に入る。ほとんどの建物

の屋根が抜け落ち、煙が昇っている。

瓦礫の山、鉄兜の山、残らず焼けてしまっている。

無駄足だった。あきらめ切れずトラックで一巡して帰途につく。

皆、無口になって……。

朝霞被服廠前で兵隊と別れ、中へはいる。ブレーキ故障のト

ラックは帰っていた。

夕闇にボーッと包まれてご苦労さんと言っているように……。

◆◆◆◆◆ 終戦前後

西田 茂

八月十三日

北千住駅東口・昭和ゴムへ学徒動員で通っていた。

当時、M大の一年生。工場には水兵が多く働いており、噂によると人間魚雷の部品と囁かれていた。

我々は午後五時に作業終了。帰宅の途につく。東上線池袋駅下りホームで、従兄弟と電車を待っていた。突然、N大生に声をかけられ、目白寄りホームの端まで連れていかれた。

「日本は負ける。近日中に重大放送がある。そのときは、東京都庁の裏に集まれ。兵器は揃えてある。親兄弟にも喋るな。名前を教えろ」

人気がないのを見澄まして、小声で言われた。私たちは名前を告げた。「まさか」「本当かなあ」

車の中で、従兄弟と首をかしげあった。

八月十四日

当時、米軍機よりまかれる宣伝ビラを拾ったら、屈けることになっており、隠し持つと処罰された。級友がもっていると聞き見せてもらった。小学校の教科書に載っていた仁徳天皇が、民の竈の炊煙を見ている絵が印刷され、「民の竈の火は消えた。日本人民は飢えている。これは日本の軍閥の所為だ」とある。

軍閥という耳慣れない言葉に、我々は違和感を覚えた。

昨日のことを親にソット話したら「そんな馬鹿な話があるはずがない」と言ったが、その声は弱々しかった。

八月十五日

本日正午、重大放送があると、ラジオは早朝より予告していた。昭和ゴムでは、早めに作業を切り上げ、工場中央に、ラジオを備え、その時を待った。

玉音放送がはじまった。ラジオの声は聞きとりにくかった。が、判った。負けたのだ。工場はシーンと静まりかえった。

やはり本当だったんだ、N大生の言ったことは……。

だが待てよ。「俺は兵隊にいかないで済むのではないか？」子どものころから、心の片隅で漠然と予感していた。敗戦により予感がまさか当ってしまふとは。

M大職員の声が流れた。「本日より連絡あるまで、本学は休校とする。自宅にて待て」

ラジオ前の列はくずれた。工場を出た。友人五・六人と、十三日夜のN大生の話をした。

「どうする」「では行ってみよう。まず宮城へ」

友人の顔は明るかった。どこか心の中でホッとしているのかも知れない。今日より電灯を明るくしてすごせる。もう空襲はない。

東京駅に着いた。三三五五、宮城へ向う人、また、帰ってくる人もいる。何となく明るい表情。宮城前広場にはなぜか大砲が一門、東京駅へ向けて置かれていた。

近衛兵による宮中乱入騒動をまだ知る由もなく……。

二重橋の側には、五人の兵隊が銃剣を持って警戒している。

およそ三十人ばかりが選擇していた。土下座しているのは、一人か二人いたように記憶している。人数は意外に少なかった。

東京都庁へ向った。都庁職員は退庁したのか、誰もいない。都庁裏の焼却場から、薄い煙が一筋、立ちのぼっているのみ。

(後日、鈴木貫太郎首相私邸襲撃事件を新聞で知る)

「もう帰るか」「そうだな」

疲れた足をひきずりながら東上線ホームへ。電車を待つ人はかなりいた。いつもより静か。会話もあり聞かれない。

「おい」不意に肩をたたかれた。三月ごろ出征した知人が兵隊姿で立っている。毛布をはじめ衣料を山ほど背負い、笑っている。「もう帰ってきたのか」

「放送がおわり直ちに解散命令がでたのさ。帰れて嬉しいよ」

「ヘー」あまりの手早さに驚きあきれた。あの軍隊が……。

「よかったな」どちらともなく言った。

十六日以後

いろいろな復員ばなしが流れこんできた。

農家の息子が、馬に荷車をつけ、衣料・食糧を山と積んで、二日ばかりで軍隊から帰ってきた。飼料がなくなると、馬を屠殺して肉を売り、衣料を闇に流し、抜け目なく稼いだ話。

商家の息子は、復員で帰る途中、ついでに関西の得意先へ一通り挨拶してきたという、商魂たくましい者もいた。

こんな話が飛びかう中に、十月一日、M大は授業再開。

十一月、M大祭にセンチメンタル・ジャーニーのメロディが、ハワイアンに乗って流れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 最後の試合

小原 勘三郎

「敵性スポーツ」。野球はこうよばれた。

四月。東京六大学リーグ戦は、軍当局の圧力で解散になった。

今まで徴兵猶予になっていた法・文系の二十歳以上の学生に学徒出陣令が下った。

リーグ関係者は、出陣の思い出となる、最後の試合を実現させようと努力した。軍当局と文部省を恐れる人々を説得する苦労は容易ではなかった。

試合当日、新宿区・戸塚球場は、戦時下とはいえ予想以上の人々で埋められた。試合前のいつもの華やいだ応援合戦は静まりかえり、応援歌は地を這って響いた。

ゲームがはじまった。一投一打に日頃とは違う喚声がわいた。選手は、野球にかけた青春のすべてをぶつけて戦った。

試合は大差でおわった。勝敗はどうでもよかった。

ゲームセットの挨拶がおわると、わきあがる拍手のなかで、スタンドの一隅から歌声があがった。

「海行かば」である。

……人君の辺にこそ死なぬ 顧みはせじ……

歌声は広がり、球場全体を包んでいた。

選手はグラウンドに、観衆はスタンドに立ちつくしたまま、祖国の永遠と、征く者への惜別をこめて、流れる涙を拭おうともせず、大きな声で誰もが歌った。

戦雲急を告げ、敗色ただよいはじめた昭和十八年の秋であった。

胸中の火

匿名

戦中の記憶といえば、この日のことが強烈に残っています。三月十日、東京大空襲の最中、名古屋から帰京する車中、前方の赤く染まった空を眺めて、今までより規模が大きいなと、胸の内は不安でいっぱいでした。

茅ヶ崎で一時停車、仲々発車しません。そのうえ状況がわからず、不安は募るばかりばかりです。

一夜明けて品川で全員下車し、昨夜、本所・深川一帯がB29の大爆撃を受けたことが知らされました。

交通は杜絶し、品川から月島まで歩くしかありません。

出町を過ぎて情報を聞く度に、家・父母弟妹はどうしたことかと気掛かりになり、焦る一方です。

銀座にはいり、歌舞伎座・新橋演舞場・東劇の焼け跡が目にはいるころは、罹災者が重い足をひいて、勝鬃橋方面から続々と引き揚げてくるのに行きあいます。

築地の聖路加病院の近くで、父母の住む月島は罹災を免れたことがわかり、父母弟妹の無事を信じて、気分も落ち着いてきました。

町内の班長をしていた父は、罹災者の世話で忙しく、下の妹と中学生の弟は元気でした。

上の妹は新大橋の知人の家に行っていたのが気掛かりで、母は出かけた後でした。

のちに聞かされたことですが、父が「水はいけない、湯を沸かして接待するように」と炊き出しをし、罹災者に振舞ったそうです。

喉の渇きで水を求めたがりますが、身体によくないし、末期の水にかかることを父は嫌ったそうです。

関東大震災当時の経験が、立場をかえて、そのように振舞ったのでしよう。

上の妹は隅田川の新大橋の上で逃げられなくなり、大勢の人と重なりあって一夜をすごし、奇跡的に助かりました。

気のついたときは、死体の山の中にいたと、あとで話しました。今も火傷の跡が残っています。

十万の死者の中には、防空壕の中で一家全員が亡くなった方。運河に飛びこんで亡くなった友人・知人。

勤務先の社長一家は、荷物を送り出し、明日は岩手へ疎開する前夜に一家全滅など。

この日は忘れることのできない一日です。

戦後五十年経過と、いま騒がれていますが、犠牲になった人々を労ふことは、永久にできないと思うのは、私の驕りでしょう。



| 回数 | 出品年月 | 出品作品名 | 出品者 |
|------|---------|---|---|
| 第24回 | 平成4年11月 | 1) 増林の地蔵尊
2) 旧西方村に散在する庚申塔めぐり
3) 越谷にある三角点と水準点
4) 船渡の不動院
5) 「オビシヤ」語源の検証
6) 越巻学校の跡
7) 元荒川の源流
8) 中町浅間神社の御手洗石
9) 入置申一札之事
10) 明治15年の東京区分全図 | 小原勘三郎
加藤幸一
小島 誠
鈴木秀俊
高橋 清
名倉さわ
宮川 進
山崎善司
吉田敏子
村田留吉 |
| 第25回 | 平成5年11月 | 1) 越谷富士講中の寄進灯籠
2) 越谷に落ちた隕石
3) 旧平方村の石仏類
4) 明治天皇田植御覧の処
5) 仏像の理解と鑑賞
6) 旧出羽村の文化活動
7) 綾瀬川の源流
8) 市神社
9) 一の綱土橋架け替え願書 | 小原勘三郎
小島 誠
加藤幸一
鈴木秀俊
高橋 清
名倉さわ
宮川 進
山崎善司
吉田敏子 |
| 第26回 | 平成6年11月 | 1) 桜井地区(平方を除く)の石仏類
2) 野島地蔵尊の江戸開帳
3) ご朱印状
4) 越谷吾山の碑
5) 長寿と健康の光頭会
6) 新川町で煙草・醤油・砂糖の使い始め
7) 観照院創建時の本尊発見について
8) 明治32年の流星群
9) 古利根川の源流 | 加藤幸一
小原勘三郎
小島 誠
鈴木秀俊
高崎 力
高橋 清
名倉さわ
西田 茂
宮川 進 |

-83-

| 回数 | 実施年月日 | 行先 | 案内者 |
|----|-------------|-------------------|--------------------|
| 37 | 昭和45年11月29日 | 行田 埼玉古墳群 資料館 前玉神社 | 岩井茂
三原善太郎 |
| 38 | 昭和46年 2月28日 | 蒲生 清蔵院 地藏院 照蓮院 | |
| 39 | 3月28日 | 古川 道庭の百庚申塔 密蔵院他 | |
| 40 | 4月25日 | 大門 会田本陣 脇本陣 大門神社他 | |
| 41 | 6月27日 | 天嶽寺 久伊豆神社 有滝7-北ヶ | |
| 42 | 7月25日 | 武里 東福寺 円福寺 | |
| 43 | 10月17日 | 久喜 戸賀鎌武場跡 甘藷院 | |
| 44 | 昭和47年11月28日 | 大宮県立博物館 桑大会館 盆栽村 | |
| 45 | 2月27日 | 新方 聖徳寺 清浄院 | |
| 46 | 3月26日 | 増林 林泉寺 勝林寺 宝生院 | |
| 47 | 4月23日 | 平方 林西寺 | 佐々木資郎
岩井茂 |
| 48 | 6月25日 | 大房 浄光寺 薬師堂 五智堂 | |
| 49 | 7月23日 | 古河 光了寺他 | |
| 50 | 9月24日 | 金沢文庫 称名寺 | |
| 51 | 10月22日 | 蒲生 清蔵院 普請供養塔 藤助河岸 | |
| 52 | 11月26日 | 羽生城跡 田舎教師の墓 | |
| 53 | 昭和48年 2月25日 | 大泊 安国寺 上間久里地藏尊他 | |
| 54 | 3月25日 | 平将門を訪ねて 国王神社 安念寺他 | |
| 55 | 4月22日 | 行田 埼玉古墳 資料館 | |
| 56 | 6月24日 | 野島 浄山寺 金剛院 第六天神社 | 今井隆助
日置宗一・三原善太郎 |
| 57 | 7月22日 | 大相模不動尊 見田方遠跡 宇田家 | |
| 58 | 9月16日 | 大松 清浄院 川崎聖徳寺 | |
| 59 | 10月21日 | 下総国府台城跡 真間の手児奈 | |
| 60 | 11月18日 | 大房浄光寺 神明七左衛門の墓他 | |
| 61 | 昭和49年 3月24日 | 大宮県立博物館 桑大会館 寿能城跡 | |
| 62 | 4月28日 | 下総国府台城跡 手児奈 柴又帝釈天 | |
| 63 | 6月23日 | 騎西町周辺 | |
| 64 | 7月28日 | 春日部小瀬観音 不二山 最勝院 | |
| 65 | 9月27日 | 野火止 平林寺 | 山崎善司
日置宗一 |
| 66 | 10月21日 | 大相模見田方遠跡 南千正二十一仏 | |
| 67 | 昭和50年 3月30日 | 増林 林泉寺 勝林寺 増森二十一仏 | |
| 68 | 4月29日 | 野与党を訪ねて | |
| 69 | 6月22日 | 兄沼通船堀 清泰寺 見性院の墓 | |
| 70 | 7月27日 | 大宮県立博物館 浦和市立博物館 | |
| 71 | 10月27日 | 野島 浄山寺 金剛院 第六天神社 | |
| 72 | 昭和51年 2月22日 | 行田 埼玉古墳群 前玉神社 | |

| 回数 | 実施年月日 | 行先 | 案内者 |
|-------|-------------|-------------------|-----------|
| 73 | 昭和51年 4月25日 | 将門を訪ねて 国王神社 安念寺他 | |
| 74 | 7月25日 | 川崎聖徳寺 大松清浄院 開山塚 | |
| 75 | 10月24日 | 取手方面 染野家 長禅寺 三仏堂他 | |
| 76 | 11月28日 | 朝霞方面 東円寺 本仙寺 | |
| (77) | 昭和52年 2月27日 | 竹の塚方面 炎天寺 桂昌院の墓他 | |
| 78 | 4月24日 | 野田博物館 金乗院 岩名洞窟 | |
| 79 | 6月26日 | 野島 浄山寺 金剛院 第六天神社 | |
| 80 | 7月24日 | 神明七左衛門の墓 迎摂院 浄光寺他 | |
| 81 | 9月18日 | 出羽観照院 大沼大明神 安行戸塚城 | |
| 82 | 10月23日 | 増林 林泉寺 勝林寺 増森二十一仏 | |
| 83 | 11月27日 | 岩槻城跡 浄安寺 竜門寺 時の鐘他 | |
| 84 | 昭和53年 2月19日 | 県立埼玉会館 県立文書館 | |
| 85 | 3月19日 | 大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村 | |
| 86 | 4月30日 | 国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天 | |
| 87 | 6月18日 | 川越方面 喜多院 川越城跡他 | |
| 88 | 7月23日 | 流山方面 東福寺 近藤勇陣屋跡他 | |
| (89) | 9月24日 | 行田 埼玉古墳 資料館 前玉神社 | 日置宗一 |
| (90) | 10月22日 | 関宿 実相寺 宗英寺 貫太郎記念館 | 木原徹也 |
| (91) | 11月26日 | 結城方面 称名寺 弘経寺 慈眼院 | 山崎善司 |
| (92) | 昭和54年 2月25日 | 国分寺方面 薬師堂 武蔵国分寺跡他 | 日置宗一 |
| (93) | 3月25日 | 大相模不動尊 飯島八塚 観音寺他 | 山崎善司 |
| (94) | 4月22日 | 鎌倉 頼朝の墓 八幡宮 銭洗弁天他 | 山崎善司 |
| 95 | 6月17日 | 新方 聖徳寺 清浄院 向畑陣屋他 | 石塚吉男 |
| 96 | 7月22日 | 東京 将門首塚 皇居東御苑 | |
| (97) | 9月23日 | 栗橋古河方面 静御前墓碑 公方館他 | 山崎善司 |
| (98) | 10月28日 | 吉川 千駄庚申塚 密蔵院 戸張家墓 | 中村忠夫・鈴木種雄 |
| 99 | 11月25日 | 西新井大師 中曽根城跡 関原不動院 | |
| (100) | 昭和55年 3月23日 | 日光街道千住宿 橋戸町 河原町他 | 山崎善司 |
| (101) | 4月29日 | 国府台城跡 真間の手児奈堂 帝釈天 | 日置宗一・山崎善司 |
| (102) | 6月29日 | 草加宿 大和屋跡 大川家 松並木他 | |
| (103) | 7月27日 | 天嶽寺 御殿跡 市神社 香取社他 | 石塚吉男 |
| 104 | 9月28日 | 春日部宿 山中観音 浅間山 梅若塚 | |
| (105) | 10月19日 | 大宮県立博物館 楽天会館 盆栽村 | |
| (106) | 11月16日 | 下妻方面 大宝八幡宮 多賀谷氏墓他 | 山崎善司 |
| (107) | 昭和56年 2月23日 | 杉戸宿 河原稲荷 本陣跡 来迎院他 | 石塚吉男 |
| 108 | 3月22日 | 目黒方面 正覚寺 祐天寺 大鳥神社 | |

| 回数 | 実施年月日 | 行先 | 案内者 |
|-------|-------------|--------------------|-----------|
| (109) | 昭和56年 4月29日 | 三浦半島 衣笠城跡 大善寺 油壺他 | 山崎善司 |
| (110) | 6月28日 | 栗橋 静御前の墓 宝治沼 光了寺他 | 中村忠夫 |
| (111) | 7月26日 | 岩槻 文化センター 遷喬館 時の鐘他 | |
| 112 | 9月27日 | 幸手方面 幸手城跡 宝持寺 浅間社 | |
| 113 | 11月29日 | 大袋方面 薬師堂 遠藤家 荒陽の墓 | |
| 114 | 昭和57年 2月28日 | 荻島地区 浄山寺 羽羽橋 玉泉院他 | |
| (115) | 3月28日 | 板橋地区 トリ地蔵 庚申塚 縁切榎 | 中村忠夫 |
| (116) | 4月29日 | 板橋地区 松月院 資料館 赤塚城跡 | (加藤幸) 1 |
| 117 | 6月27日 | 松戸 本土寺 東漸寺 一月寺跡他 | |
| 118 | 7月25日 | 新方地区 台風の為中止 | |
| (119) | 9月26日 | 日光今市地区 杉並木 東照宮他 | 山崎善司 |
| 120 | 10月17日 | 新方 川崎神社 聖徳寺 清浄院他 | |
| (121) | 昭和58年 2月27日 | 深川方面 八幡宮 不動尊 清澄園他 | (加藤幸) 2 |
| 122 | 3月27日 | 市川里見公園 矢切の渡 帝釈天他 | |
| (123) | 4月29日 | 佐倉城跡 臼井城跡 民俗博物館 | 山崎善司 |
| (124) | 6月26日 | 文京地区 湯島天神 小石川後楽園他 | 中村忠夫 |
| (125) | 7月24日 | 新座三芳地区 平林寺 多福寺他 | 丸田富夫 山田政信 |
| (126) | 9月25日 | 栃木大平山 塚田記念館 町並見物他 | 石塚吉男 |
| 127 | 10月23日 | 北鎌倉 円覚寺 東慶寺 建長寺他 | 山崎善司 |
| (128) | 11月27日 | 隅田川の辺り 浅草神社 待乳山聖天 | 山田政信 |
| (129) | 昭和59年 2月26日 | 目黒 不動尊 大鳥神社 祐天寺他 | 鈴木種雄 |
| (130) | 3月25日 | 川越 常楽寺 喜多院 東明寺他 | 丸田富夫 |
| 131 | 4月29日 | 東松山菅谷館跡 箭弓神社 吉見百六 | 山崎善司 |
| 132 | 6月24日 | 草加松原松並木 一里塚 藤助河岸 | 木原徹也 |
| (133) | 7月22日 | 千葉市内 千葉寺 猪鼻城跡 来迎寺 | 中村忠夫 |
| 134 | 9月30日 | 大聖寺 天嶽寺 | 石塚吉男 |
| 135 | 11月11日 | 王子豊嶋氏の遺跡を訪ねて 飛鳥山他 | 山田政信 |
| (136) | 昭和60年 2月24日 | 野田愛宕神社 至徳泉 郷土博物館他 | 木原徹也 |
| 137 | 3月24日 | 上野東照宮 弁天堂 六義園他 | 丸田富夫 |
| (138) | 4月29日 | 鎌倉Ⅲ 宝戒寺 和田塚 北条政子墓 | 山崎善司 |
| (139) | 6月23日 | 千葉氏Ⅲ 勝胤寺 博物館 佐倉城跡 | 丸田富夫 中村忠夫 |
| (140) | 7月28日 | 都電荒川線沿線 回向院 鬼子母神他 | 山田政信 |
| (141) | 9月22日 | 銀座・日本橋方面 十軒店 放灯碑他 | (加藤幸) 3 |
| (142) | 10月6日～7日 | 信州四賀村 (会田家のルーツ) | 山崎善司 |
| (143) | 昭和61年 2月23日 | 川越街道 上板橋宿 安養院他 | 丸田富夫 |
| (144) | 4月29日 | 都内谷中方面 大名時計博物館他 | (加藤幸) 4 |

| 回数 | 実施年月日 | 行先 | 案内者 |
|-------|-------------|-------------------|-----------|
| 145 | 昭和61年 6月22日 | 練馬石神井地区豊島氏の遺跡を訪ねて | 山田政信 |
| (146) | 7月27日 | 四谷方面 見附門跡 お岩稲荷他 | 加藤幸一 5 |
| 147 | 9月27日 | 都内志村城跡 小豆沢神社 一里塚他 | 丸田富夫 |
| (148) | 10月26日 | 三郷方面 石川氏宅 市立資料館他 | 中村舜朔 |
| (149) | 11月30日 | 草加 浅間神社 東福寺 札場河岸他 | 須賀源蔵 |
| 150 | 昭和62年 1月 3日 | 隅田川七福神めぐり | 山田政信 |
| (151) | 3月29日 | 吉川方面 定勝寺 密蔵院 延命寺他 | 中村忠夫 |
| (152) | 4月26日 | 都下小金井方面 金蔵院 野川公園他 | 加藤幸一 6 |
| (153) | 5月24日 | 八幡山古墳 小見真観寺古墳他 | 宮川進 |
| (154) | 7月26日 | 日光御成道を訪ねて(1)本郷地区 | 山田政信 |
| (155) | 9月23日 | 早稲田 目白台方面 高田馬場跡他 | 加藤幸一 7 |
| (156) | 10月25日 | 日光御成道を訪ねて(2)駒込 王子 | 山田政信 |
| (157) | 11月29日 | 都幾川村慈光寺を訪ねて | 宮川進 |
| 158 | 昭和63年 3月27日 | 日光御成道を訪ねて(3)赤羽 岩淵 | 山田政信 |
| (159) | 4月24日 | 竹の塚伊興方面 東岳寺 氷川神社他 | 加藤幸一 8 |
| 160 | 5月22日 | 多摩川台古墳に古代武蔵の盟主を想う | 宮川進 |
| 161 | 7月24日 | 日光御成道を訪ねて(4)川口鳩ヶ谷 | 山田政信 鈴木秀俊 |
| 162 | 10月30日 | 鉢形城跡 善導寺 正龍寺 | 丸田富夫 |
| 163 | 12月 4日 | 高麗方面 聖天院 高麗神社他 | 宮川進 |
| 164 | 平成元年 2月26日 | 古志賀谷館跡 太郎館跡 四郎館跡他 | 山崎善司 |
| 165 | 3月26日 | 日光御成道を訪ねて(5)大門 浦和 | 山田政信 |
| 166 | 4月30日 | 庄和町の文化財と牛島の藤 | 丸田富夫 |
| 167 | 5月28日 | 日光御成道を訪ねて(6)岩槻加倉 | 鈴木秀俊 |
| 168 | 7月23日 | 日光御成道を訪ねて(7)本郷 | 山田政信 |
| 169 | 9月24日 | 日光御成道を訪ねて(8)岩槻北部 | 鈴木秀俊 |
| 170 | 10月22日 | 江の島 西鎌倉方面 | 宮川進 |
| 171 | 12月 3日 | 日光御成道を訪ねて(9)和戸と鷺宮 | 鈴木秀俊 |
| 172 | 平成2年 2月25日 | 妻沼聖天 太田天神山古墳 朝子塚 | 宮川進 |
| 173 | 3月25日 | 日光御成道を訪ねて(10)幸手宿 | 鈴木秀俊 |
| 174 | 4月22日 | 都内新宿方面 歴史博物館 御苑他 | 山田政信 |
| 175 | 5月27日 | 日光方面 含満ヶ淵 東照宮 輪王寺 | 山田政信 |
| (76) | 7月22日 | 関宿 光岳寺 貫太郎記念館 城跡他 | 鈴木秀俊 |
| (77) | 9月30日 | 栗橋 静御前墓 宝治戸沼 本陣跡他 | 山崎善司 |
| 178 | 10月28日 | 栃木出流山満願寺 本堂 奥の院他 | 山田政信 |
| 179 | 12月 2日 | 大宮方面 盆栽村 漫画会館 博物館 | 鈴木秀俊 |
| (80) | 平成 3年 1月 3日 | 谷中七福神めぐり | 山田政信 |

148の案内者は、石川新太郎か？ 説明書には市史編さん委員の石川新太郎氏の名が
資料でている。中村氏の名はでいてない。
(ここに)

| 回数 | 実施年月日 | 行先 | 案内者 |
|-------|------------|---------------------|----------|
| (181) | 平成3年 3月24日 | 春日部 梅若塚 八幡神社 最勝院他 | 鈴木秀俊 |
| (182) | 4月28日 | 古河 古河公方館跡 歴史博物館他 | 山崎善司 |
| 183 | 5月26日 | 鎌倉 極楽寺 長谷寺 大仏他 | 宮川進 |
| 184 | 7月24日 | 古利根水郷と虫追いの川崎神社 | 鈴木秀俊 |
| 185 | 9月22日 | 騎西町 龍興寺 大福寺 私市城址他 | 山崎善司 |
| 186 | 10月27日 | 東海道品川宿を訪ねて(1) 東海寺他 | 山田政信 |
| 187 | 12月1日 | 足利学校 鑲阿寺 館林茂林寺 | 鈴木秀俊 |
| 188 | 平成4年 1月3日 | 下谷七福神めぐり | 山田政信 |
| (189) | 2月23日 | 東松山 黒岩横穴群 吉見観音他 | 宮川進 |
| (190) | 3月29日 | 玉川上水 | (加藤幸) 9 |
| 191 | 4月26日 | 世良田 長楽寺 総持寺 東照宮 | 鈴木秀俊 |
| 192 | 5月24日 | 東海道品川宿を訪ねて(2) 品川寺他 | 山田政信 |
| (193) | 7月15日 | 桜井地区 安国寺 下間久里獅子舞 | 鈴木秀俊 |
| 194 | 9月27日 | 白岡久伊豆神社 興善寺 八幡宮 | 山崎善司 |
| (195) | 11月1日 | 鎌倉 鶴岡八幡宮 浄光明寺 海蔵寺 | 宮川進 |
| 196 | 12月6日 | 野田 キコウマノ工場 博物館 愛宕神社 | 鈴木秀俊 |
| 197 | 平成5年 1月3日 | 深川七福神 富岡八幡宮 弁天堂他 | 山田政信 |
| 198 | 2月28日 | 野島 第六天 一乗院 浄山寺 | 鈴木秀俊 |
| (199) | 3月28日 | 武蔵国分寺 江戸東京たてもの園 | 宮川進 |
| (200) | 4月25日 | 大相模 大聖寺 不動道の庚申塔 | (加藤幸) 10 |
| 201 | 5月23日 | 坂戸 住吉神社 資料館 休台寺他 | 小原勘三郎 |
| 202 | 7月25日 | 金沢称名寺 金沢文庫 戦艦三笠 | 宮川進 |
| (203) | 9月26日 | 大森 西光寺 鹿島神社 大森貝塚他 | 小原勘三郎 |
| 204 | 10月31日 | 太田 内田郷土博物館 大光院他 | 鈴木秀俊 |
| 205 | 11月28日 | 鎌倉 頼朝墓 覚園寺 瑞泉寺他 | 宮川進 |
| 206 | 平成6年 1月3日 | 亀戸七福神 常光寺 亀戸天神他 | 山田政信 |
| 207 | 2月27日 | 高坂 諏訪山古墳 正法寺 資料館他 | 宮川進 |
| 208 | 3月27日 | 与野 長伝寺 正円寺 円乗院他 | 小原勘三郎 |
| (209) | 4月24日 | 古河西部 宗願寺 雀神社 永井寺他 | 鈴木秀俊 |
| 210 | 5月22日 | 麻布 心光院 善福寺 泉岳寺他 | 山田政信 |
| 211 | 7月24日 | 隅田川川下り 葛西臨海公園 水族館 | 宮川進 |
| 212 | 9月25日 | 流山 近藤勇陣屋跡 博物館 東福寺 | 鈴木秀俊 |
| 213 | 10月23日 | 和光市 東林寺 竜鑑寺 吹上観音他 | 小原勘三郎 |
| 214 | 11月27日 | 鎌倉 妙木寺 光明寺 安国論寺他 | 宮川進 |
| 215 | 12月11日 | 忠臣蔵 内匠頭邸跡 吉良邸跡他 | 宮川進 |
| 216 | 平成7年 1月3日 | 日本橋七福神 小網神社 水天宮他 | 山田政信 |

| 回数 | 年月日 | 発表者 | テーマ |
|----|-------------|---------|------------------------------|
| 1 | 昭和40年 4月24日 | 大野伊右衛門 | 方言について |
| 2 | 5月14日 | 大野伊右衛門 | 越谷御殿について |
| 3 | 6月27日 | 新井英彦 | 埼玉県東南部地区の古代人の住居 |
| 4 | 7月25日 | 本間清利 | 助郷の諸問題 新井家文書 |
| 5 | 9月11日 | 八島理事 | 鈴久について |
| 6 | 10月30日 | 大野伊右衛門 | 越谷よもやま話 |
| | 〃 | 木村信次 | しらこばとについて |
| 7 | 11月28日 | 本間清利 | 会田出羽と越谷 |
| | 〃 | 大野伊右衛門 | 芭蕉と越谷 |
| 8 | 昭和41年 1月 8日 | 高崎 力 | 大相模の古代住居跡について |
| 9 | 7月 5日 | 大野伊右衛門 | こしがや由来 浄山寺縁起 |
| 10 | 昭和42年 1月 8日 | 高崎・金井先生 | 見田方古代住居跡について |
| 11 | 2月26日 | 大野伊右衛門 | 久伊豆神社 |
| | 〃 | 本間清利 | 村明細帳 七左衛門村 |
| 12 | 5月28日 | 会員 | 1) 産社祭礼帳 |
| | 〃 | | 2) スライド鑑賞見田方遺跡 |
| 13 | 7月 9日 | 北島正元 | 徳川家康と関東農村について |
| 14 | 8月20日 | 会員 | 郷土研究会のあり方 |
| 15 | 10月 8日 | 三原善太郎 | 下間久里の獅子舞 |
| 16 | 12月17日 | 本間清利 | 会田家備忘録 |
| 17 | 昭和43年 1月14日 | 小沢先生 | 近世資料の整理と分類について |
| | 〃 | 本間清利 | 越谷御殿 |
| 18 | 2月25日 | 本間清利 | 産社祭礼帳近世編 |
| | 〃 | 岩井 茂 | 金沢称名寺文庫を主体として越谷
周辺の歴史を語る |
| 19 | 5月28日 | 本間清利 | 越谷宿について |
| 20 | 8月25日 | 三原善太郎 | 下間久里獅子舞の現地からみた
発祥地考 8ミリ映写 |
| 21 | 12月22日 | 座談会 | 郷土越谷について |
| 22 | 昭和44年 5月25日 | 会員 | 下間久里の獅子舞
テープ鑑賞 |
| 23 | 10月10日 | 是沢恭三 | 越谷御獵場について |
| 24 | 昭和45年 1月25日 | 会員 | テープ及び8ミリ鑑賞
久伊豆神社の例大祭 |
| 25 | 2月21日 | 本間清利 | 越谷市を中心とした河川沿革史 |

| 回数 | 年月日 | 発表者 | テーマ |
|----|-------------|-----------|-----------------------------------|
| 26 | 昭和45年 5月23日 | 会員 | 北川崎のオビシヤ
スライド鑑賞 |
| 27 | 8月23日 | 会員 | 郷土についての放談会 |
| 28 | 昭和46年 1月24日 | 三原善太郎 | 文化史観に立つ神話の見方 |
| 29 | 5月23日 | 本間清利 | 江戸時代の越谷の村方騒動 |
| 30 | 8月29日 | 会員 | ビデオ及び8ミリ鑑賞 久伊豆神社
の例大祭・下間久里の獅子舞 |
| 31 | 9月26日 | 高崎 力 | 越谷市の古代を巡る
見田方遺跡について |
| 32 | 昭和47年 1月23日 | 岩井 茂 | 岩槻城主太田氏代々について |
| 33 | 5月28日 | 大村 進 | 大岡忠光と山県大武 |
| 34 | 8月27日 | 三原 石塚 山崎 | 越谷御殿はどこにあったか |
| 35 | 昭和48年 1月28日 | 岩井 茂 | 金沢称名寺と越谷近郷の関係 |
| 36 | 5月27日 | 会員 | 下間久里の獅子舞
久伊豆神社の例大祭
記録映画 |
| 37 | 8月19日 | 岩井 茂 | 野与党と私市党 |
| 38 | 昭和49年 1月27日 | 本間清利 | 会田七左衛門家 |
| 39 | 2月24日 | 大村 進 | 岩槻藩主大岡忠正 |
| 40 | 5月26日 | 岩井 茂 | 中世東武における河川道路の推移 |
| 41 | 8月25日 | 山崎善司 | 越谷氏について |
| 42 | 昭和50年 1月26日 | 岩井 茂 | 野与党について |
| 43 | 2月23日 | 山崎善司 | 白岡町周辺 |
| 44 | 5月25日 | 石塚吉男 | 会田氏と越谷御殿 |
| 45 | 8月31日 | 小島 誠 | 桜井地区における関東大震災の記録 |
| 46 | 11月23日 | 本間清利 | 日光道中の通行者 |
| 47 | 昭和51年 1月25日 | 竹内 誠 | 江戸と越谷 |
| 48 | 3月28日 | 峰岸都立大助教授 | 古銭と中世社会(浄光寺) |
| 49 | 5月23日 | 大村 進 | 豪族武蔵氏の活躍について |
| 50 | 6月27日 | 島田 資料館副館長 | 絵馬について |
| 51 | 8月29日 | 三原善太郎 | 我々の周辺にある古代史 |
| 52 | 昭和52年 1月23日 | 山崎善司 | 会田家について |
| 53 | 3月27日 | 林 博物館学芸員 | 越谷市の仏像について |
| 54 | 5月22日 | 本間清利 | 関東郡代伊奈氏について |
| 55 | 8月28日 | 大村 進 | 岩槻城主太田氏資の支配について |

| 回数 | 年月日 | 発表者 | テーマ |
|----|-------------|-------|---------------------------------|
| 56 | 昭和53年 1月22日 | 石塚吉男 | 会田氏こぼれ話 |
| 57 | 5月28日 | 石塚吉男 | 新方庄及び向畑の伝説(新方陣屋) |
| 58 | 8月27日 | 星野昌治 | 埼玉県東部付近の民間信仰板碑 |
| 59 | 昭和54年 1月28日 | 木原徹也 | 日光街道脇往還について |
| 60 | 5月27日 | 本間清利 | 地方自治の変遷と越谷 |
| 61 | 8月26日 | 三原善太郎 | サキタマヒメと越ヶ谷
一久伊豆神社について一 |
| 62 | 昭和55年 1月27日 | 星野昌治 | 山王二十一仏庚申板碑 |
| 63 | 2月24日 | 三原善太郎 | 入門のための古文書の読み方
一書道との関連一 |
| 64 | 5月25日 | 本間清利 | 関東郡代 |
| 65 | 8月24日 | 石塚吉男 | 越谷御殿地始末記 |
| 66 | 昭和56年 1月25日 | 木原徹也 | 一宿場町よりみた天保の貨幣改鋳 |
| 67 | 5月24日 | 中村忠夫 | 二郷半領駕籠訴事件について |
| 68 | 8月23日 | 本間清利 | 東部低湿地における交通 |
| 69 | 昭和57年 1月24日 | 星野昌治 | 二十一仏板碑入門
新発見の恩間等覚院跡板碑に関して |
| 70 | 5月23日 | 丸田富夫 | 仏像の見方(スライド併用)
ふるさと越谷(16ミリ映画) |
| 71 | 8月22日 | 蜂谷敬啓 | 鎌倉街道を歩いて |
| 72 | 11月 3日 | 丸田富夫 | 日光の建築 |
| 73 | 昭和58年 1月23日 | 木原徹也 | 二、三の実例より見た明治初期の
越ヶ谷 |
| 74 | 5月22日 | 本間清利 | 武蔵田園簿と江戸初期の代官 |
| 75 | 8月28日 | 山田政信 | 境の神から道祖神 |
| 76 | 昭和59年 1月22日 | 木原徹也 | 日光街道沿いの一里塚・藤助河岸 |
| 77 | 5月27日 | 山崎善司 | 徳川家康と越谷 |
| 78 | 6月24日 | 本間清利 | 河川流路の沿革 |
| 79 | 9月30日 | 花房健次郎 | 梵鐘を訪ねて |
| 80 | 昭和60年 1月27日 | 矢島 実 | 正月の民俗行事と信仰について |
| 81 | 5月26日 | 蜂谷敬啓 | 坂東における豪族層の交替と
武蔵七党の出現について |
| 82 | 8月25日 | 山崎善司 | 越谷会田氏のルーツを探る |
| 83 | 昭和61年 1月26日 | 山崎善司 | 同上ビデオにて |
| 84 | 5月25日 | 矢島 実 | 武蔵における農工社会の民俗行事 |

| 回数 | 年月日 | 発表者 | テーマ |
|-----|-------------|------------|---|
| 85 | 昭和61年 8月24日 | 木原徹也 | 草も木も若しくは我をしりたるや
一水野家と春日部市備後一 |
| 86 | 昭和62年 1月25日 | 本間清利 | 埼玉の街道 日光街道を中心として |
| 87 | 2月22日 | 小島 誠 | 草創期の鉄道あれこれ
国鉄・私鉄・幻の鉄道 |
| 88 | 6月28日 | 山部直喜 | 越谷で見られる野鳥について
越谷で見られる植物キタミソウについて
(スライド&テープ併用) |
| 89 | 8月23日 | 飯山 実 | 岩槻について |
| 90 | 昭和63年 1月24日 | 山崎善司 | 越ヶ谷言葉、方言と訛集について |
| 91 | 2月28日 | 丸田富夫 | 日本の細部手法、墓股について |
| 92 | 6月26日 | 高崎 力 | 越谷における中世の城館跡 |
| 93 | 8月28日 | 山崎善司 | 古志賀谷氏館跡思考(ビデオ併用) |
| 94 | 平成 元年 1月22日 | 林 貴史 | 岩槻宿について |
| 95 | 6月25日 | 山崎善司 | 御殿番小杉藤左衛門尉景房の墓 |
| 96 | 8月27日 | 高橋一夫(県教育局) | ヤマト政権と古墳時代の東国 |
| 97 | 平成 2年 1月28日 | 本間清利 | 瓦曽根溜井について |
| 98 | 6月24日 | 加藤幸一 | 絵馬について |
| 99 | 8月26日 | 宮川 進 | 縄文海進時における最高海水準について
[海はどこまでできていたか] |
| 100 | 平成 3年 1月27日 | 柳田俊司 | 埼玉の歴史より |
| 101 | 2月24日 | 本間清利 | 日光道中について |
| 102 | 6月30日 | 山崎善司 | 野与党諸氏拠点の考察 |
| 103 | 8月25日 | 加藤幸一 | 鳥文斎細田栄之の瓦曽根溜井図 |
| 104 | 平成 4年 1月26日 | 高崎 力 | 検証・新方領耕地整理(1) |
| 105 | 6月28日 | 山崎善司 | 野与党諸氏の拠点 白岡編 |
| 106 | 8月23日 | 加藤幸一 | 旧西方村に散在する庚申塔めぐり |
| 107 | 平成 5年 1月24日 | 高崎 力 | 検証・新方領耕地整理(2) |
| 108 | 6月27日 | 有瀧龍雄 | わが郷土こしがや |
| 109 | 8月29日 | 高崎 力 | 太郎兵衛橋 |
| 110 | 平成 6年 1月15日 | 加藤幸一 | 旧平方村の石仏類 |
| 111 | 6月26日 | 高島英一 | 足立百不動尊 |
| 講座1 | 8月21日 | 山田政信 | 石仏の見方 - 基礎知識 - |
| 112 | 平成 7年 1月29日 | 加藤幸一 | 桜井地区の石仏 |

| | 氏 名 | 〒 | 住 所 | 電 話 番 号 |
|----|-------|-----|--------------------|----------------|
| 1 | 会田 俊 | 343 | 越谷市神明町2-1 | (0489) 62-3300 |
| 2 | 有瀧龍雄 | | 越ヶ谷中町8-26 | 62-2054 |
| 3 | 秋田 成 | | 袋山776-10 | 77-8955 |
| 4 | 青山栄吉 | | 大林356-78 | 76-0558 |
| 5 | 青木豊子 | | 赤山町3-29-5 | 62-9871 |
| 6 | 新井徳有 | | 蒲生西町2-20-4 | 86-7150 |
| 7 | 浅見晴子 | | 越ヶ谷本町11-10 | 62-2986 |
| 8 | 石塚陳正 | | 越ヶ谷2-2-26 | 62-2604 |
| 9 | 井上すず | | 宮本町2-16 | 62-1039 |
| 10 | 井上陽子 | | 越ヶ谷1-9-9 | 65-9521 |
| 11 | 一色英子 | | 弥栄町1-172-6 | 78-0382 |
| 12 | 池田 仁 | | 相模町2-238-2 | 86-7765 |
| 13 | 岩沢 明 | | 蒲生旭町6-8 | 88-4815 |
| 14 | 井田康雄 | | 蒲生愛宕町7-13 | 87-5682 |
| 15 | 磯谷知子 | | 神明町2-357-1 ㊦㊦1-202 | 78-8339 |
| 16 | 石鍋隆子 | | 神明町1-150-1 | 66-8712 |
| 17 | 石川美津江 | | 宮本町5-255-15 | 65-7278 |
| 18 | 一安タミ子 | | 大林469-3 | 76-0345 |
| 19 | 宇田川正治 | | 神明町3-410 | 76-5754 |
| 20 | 小原勘三郎 | | 宮本町3-50 | 64-0005 |
| 21 | 大塚孝博 | | 越ヶ谷本町1-19 | 62-2612 |
| 22 | 岡田和子 | | 花田3-5-8 | 62-3873 |
| 23 | 大鶴シヅ子 | | 西新井1886-6 | 65-0259 |
| 24 | 人熊弥平 | | 袋山1105 | 74-7212 |
| 25 | 小川隆雄 | | 宮本町4-5-4 | 65-6339 |
| 26 | 大河原初男 | | 登戸町36-26 | 86-6778 |
| 27 | 太田つる | | 宮本町3-177 | 64-2723 |
| 28 | 上村 透 | | 相模町7-184-2 | 86-7283 |
| 29 | 上郷千春 | | 相模町3-132-2 | 88-6021 |
| 30 | 川田佐一郎 | | 御殿町4-30 | 64-3240 |
| 31 | 川田ちよ | | 〃 | 64-3240 |
| 32 | 上遠野瑤光 | | 下間久里886-59 | 75-4134 |
| 33 | 加藤富士代 | | 宮本町2-86 | 62-4878 |
| 34 | 木村 実 | | 恩間654 | 75-0872 |
| 35 | 黒田陽一 | | 宮前1-9-3 | 64-2920 |
| 36 | 工藤さだ子 | | 大林241-10 | 76-9680 |
| 37 | 楠田政子 | | 下間久里886-722 | 76-7927 |
| 38 | 工藤松四郎 | | 花田733-21 | 66-0978 |
| 39 | 小島 誠 | | 平方150 | 76-0647 |
| 40 | 小酒井信治 | | 大成町7-79-1 | 85-2354 |

| | 氏 名 | 〒 | 住 所 | 電 話 番 号 |
|----|-------|-----|---------------|----------------|
| 41 | 小林秀男 | 343 | 越谷市弥生町13-20 | (0489) 65-3411 |
| 42 | 小林よしゑ | | 南越谷3-13-9 | 63-0346 |
| 43 | 小出美代子 | | 神明町2-150-1 | 62-5873 |
| 44 | 斎藤友子 | | 越ヶ谷1-3-29 | 62-8554 |
| 45 | 佐々木君枝 | | 赤山町3-126-7 | 64-7767 |
| 46 | 佐藤幸一 | | 千間台西4-20-9 | 77-6064 |
| 47 | 佐藤光夫 | | 赤山町2-149 | 62-6544 |
| 48 | 渋谷正芳 | | 蒲生1-14-9 | 86-3146 |
| 49 | 渋谷澄子 | | 川柳町1-211 | 88-2866 |
| 50 | 塩田孝夫 | | 千間台西3-4-6-405 | 78-0107 |
| 51 | 鈴木種雄 | | 赤山町2-170 | 62-2017 |
| 52 | 鈴木秀俊 | | 宮本町2-117-6 | 64-1009 |
| 53 | 鈴木政子 | | 増林3785 | 63-2005 |
| 54 | 鈴木タカネ | | 大沢1579-9 | 78-3969 |
| 55 | 鈴木定夫 | | 南越谷4-20-3-205 | 85-3971 |
| 56 | 鈴木千也子 | | 神明町2-407 | 74-6258 |
| 57 | 鈴木喜美江 | | 袋山2011-1 | 79-9578 |
| 58 | 鈴木和子 | | 千間台西2-14-5 | 75-3665 |
| 59 | 須賀八重 | | 東越谷9-110 | 62-4668 |
| 60 | 瀬尾辰子 | | 七左町8-188 | 66-8383 |
| 61 | 染谷政之助 | | 宮前1-8-1 | 66-6997 |
| 62 | 谷岡隆夫 | | 宮本町3-117-8 | 62-7527 |
| 63 | 高崎 力 | | 平方1416-1 | 76-3987 |
| 64 | 高橋正輝 | | 東柳田町10-31 | 62-5766 |
| 65 | 高橋 清 | | 新川町1-366 | 87-9254 |
| 66 | 高橋正澄 | | 蒲生西1-3-4 | 89-1617 |
| 67 | 高橋とき | | 大沢2-2-30 | 74-4492 |
| 68 | 田所義朗 | | 東越谷5-4-8 | 65-3313 |
| 69 | 高谷良子 | | 赤山町4-6-14 | 65-9760 |
| 70 | 高山はつ | | 大泊611-89 佐山方 | 75-6803 |
| 71 | 武井福三郎 | | 東町5-23-2 | 89-5480 |
| 72 | 武田和枝 | | 赤山町3-154-13 | 63-2038 |
| 73 | 立川武夫 | | 元柳田町7-26 | 63-0630 |
| 74 | 千葉富久子 | | 越ヶ谷2679-1-709 | 62-2581 |
| 75 | 堤竹宏吉 | | 宮本町5-210-17 | 62-1542 |
| 76 | 豊田 裕 | | 南越谷1-6-75-106 | 87-4202 |
| 77 | 中村忠夫 | | 柳町3-21 | 62-3429 |
| 78 | 名倉さわ | | 新川町1-82 | 86-2558 |
| 79 | 中村建生 | | 平方南町5-3 | 74-3785 |
| 80 | 中山善亮 | | 南越谷3-26-8 | 62-6554 |

| | 氏 名 | 〒 | 住 所 | 電 話 番 号 |
|-----|--------|-----|--------------------|----------------|
| 81 | 中村まさ | 343 | 越谷市平方161 | (0489) 74-0795 |
| 82 | 中村林也 | | 増林1708 | 66-8917 |
| 83 | 中村誠志 | | 東越谷4-10-13 | 62-2387 |
| 84 | 並木栄子 | | 神明町2-380 | 74-0982 |
| 85 | 長峰栄子 | | 蒲生4-15-40 | 89-4402 |
| 86 | 中西昭子 | | 赤山町4-6-22 | 64-3430 |
| 87 | 西田 茂 | | 谷中町1-80 | 62-4537 |
| 88 | 西田弘道 | | 神明町2-149 | 62-7534 |
| 89 | 西沢許女 | | 越ヶ谷2236-B-301 | 64-9571 |
| 90 | 西村 功 | | 下間久里 1168-1 M/A301 | 78-2927 |
| 91 | 新野吉男 | | 千間台西2-19-1 | 77-6453 |
| 92 | 沼倉セツ | | 花田5-19-56 | 64-4045 |
| 93 | 野村勝八 | | 弥十郎272-8 | 78-1133 |
| 94 | 野上志美江 | | 神明町1-153-5 | 62-0150 |
| 95 | 野口時吉 | | 相模町5-51-7 | 85-1338 |
| 96 | 野口時子 | | " | 85-1338 |
| 97 | 長谷川鉄太郎 | | 東越谷2-3-31 | 66-5237 |
| 98 | 原田熊蔵 | | 瓦曾根2-11-19 | 62-1574 |
| 99 | 橋本和雄 | | 袋山436-6 | 79-9708 |
| 100 | 平井五六 | | 神明町2-6-5 | 64-9887 |
| 101 | 平川陽三 | | 七左町8-81-1 | 62-3885 |
| 102 | 平田博子 | | 宮前1-17-14 | 64-1857 |
| 103 | 古田美雄 | | 千間台西5-26-37 | 76-8161 |
| 104 | 古谷京子 | | 伊原2-8-6 | 87-8033 |
| 105 | 本間清利 | | 柳町3-23 | 62-0210 |
| 106 | 星野三郎 | | 越ヶ谷3-4 | 64-0211 |
| 107 | 程塚澄江 | | 七左町1-15 | 85-5844 |
| 108 | 前原勝次 | | 相模町6-565-5 | 68-6037 |
| 109 | 宮川 進 | | 千間台西2-17-16 | 75-9139 |
| 110 | 宮下孝雄 | | 宮本町3-46-1 | 62-3220 |
| 111 | 宮内和代 | | 三野宮1356 | 75-6848 |
| 112 | 三浦喜巳男 | | 南越谷3-23-9 | 64-5755 |
| 113 | 箕輪夕セ | | 大里195-7 | 78-1547 |
| 114 | 森屋英龍 | | 大沢3428-3 | 65-3390 |
| 115 | 森田三郎 | | 大竹535-3 | 74-7730 |
| 116 | 山崎政隆 | | 袋山200-5 | 74-6401 |
| 117 | 山梨隆司 | | 袋山494-1 | 77-6294 |
| 118 | 山口美津江 | | 神明町3-219 | 66-9555 |
| 119 | 吉田敏子 | | 袋山192-5 | 74-3770 |
| 120 | 吉田 倭 | | 南越谷1-6-75-204 | 85-8972 |

越谷市郷土研究会 会員名簿 (市内4)

平成7年 5月現在

| | 氏 名 | 〒 | 住 所 | 電 話 番 号 |
|-----|-------|-----|--------------|----------------|
| 121 | 吉見美津恵 | 343 | 越谷市花田5-12-11 | (0489) 63-5995 |
| 122 | 横川静江 | | 北越谷2-5-8 | 74-1285 |
| 123 | 渡辺容子 | | 谷中町2-274 | 66-8230 |

越谷市郷土研究会 会員名簿 (市外1)

平成7年 5月現在

| | 氏 名 | 〒 | 住 所 | 電 話 番 号 |
|-----|-------|--------|-------------------------|----------------|
| 124 | 山田政信 | 114 | 東京都北区桐ヶ丘1-21-W16-204 | (03) 3906-0725 |
| 125 | 星野昌治 | 279 | 千葉県浦安市入船4-38-2 | (0473) 51-0417 |
| 126 | 木原徹也 | 278 | 野田市中根140-174 | (0471) 22-0654 |
| 127 | 木村信次 | 339 | 岩槻市本丸2-9-3 | (048) 757-6095 |
| 128 | 加藤幸一 | 344 | 春日部市大枝859-5 | (048) 738-4181 |
| 129 | 若松清一 | 344 | 〃 豊町3-7-47 | (048) 736-5370 |
| 130 | 林 和江 | 344 | 〃 大枝812-5 | (048) 738-3036 |
| 131 | 坂巻房子 | 344 | 〃 藤塚326-10 | (048) 737-8978 |
| 132 | 内田敬子 | 344 | 〃 小淵275-7 | (048) 752-5193 |
| 133 | 前 隆子 | 344 | 〃 備後東8-10-5 | (048) 735-8946 |
| 134 | 村上祐乃 | 344 | 〃 備後東7-14-3 | (048) 738-1656 |
| 135 | 高島英一 | 336 | 浦和市太田窪5-16-3 | (048) 882-6912 |
| 136 | 酒井達男 | 340 | 草加市旭町4-4-3 | (0489) 41-9052 |
| 137 | 後藤千代子 | 340 | 〃 八幡町1223-13 | (0489) 36-9880 |
| 138 | 瀬下さつき | 340 | 〃 松原2-B71-405 | (0489) 43-8355 |
| 139 | 鴨脚洋子 | 341 | 三郷市彦成4-3-7-106 | (0489) 59-6256 |
| 140 | 新井登美栄 | 347 | 加須市大室131 | (0480) 65-4476 |
| 141 | 菅原 健 | 274 | 船橋市飯山満町 3-1582-2 12-406 | (0474) 67-0950 |
| 142 | 斎藤重子 | 351-01 | 和光市新倉2-22-1 | (048) 461-2378 |
| 143 | 野沢陽子 | 332 | 川口市朝日1-14-19 503 | (048) 224-3835 |
| 144 | 田中きく江 | 342 | 北葛飾郡吉川町共保114 | (0489) 81-4052 |
| 145 | 林 知子 | 342 | 〃 平沼2105-1 | (0489) 82-5913 |

越谷市郷土研究会 役員

平成7～8年度

| | | | |
|------|--|---|---|
| 常任顧問 | 木村信次 | 小島 誠 | |
| 会 長 | 谷岡隆夫 | | |
| 副会長 | 山田政信 | 鈴木秀俊 | |
| 理 事 | 有滝龍雄
木原徹也
高山はつ
原田熊蔵
池田 仁
野村勝八 | 小原勘三郎
鈴木種雄
名倉さわ
西田 茂
一色英子
林 和江 | 加藤幸一
高崎 力
本間清利
山口美津江
坂巻房子
平川陽三 |
| 幹 事 | 宮川 進 | 堤竹宏吉 | |
| 監 事 | 古田美雄 | 宇田川正治 | |

越谷市文化連盟理事

谷岡隆夫 鈴木秀俊

越谷市文化連盟代議員

鈴木種雄 堤竹宏吉 名倉さわ

市民まつり及び市民文化祭実行委員（展示）

谷岡隆夫 鈴木秀俊 小原勘三郎

越谷市郷土研究会会則

第一章 総則

第一条 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所は幹事宅に置く。

第三条 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり、郷土史料の調査研究を目的とする。

第二章 事業

第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行なう。

- 一、郷土史研究の連絡とその啓発。
- 二、郷土文化財保存の協力。
- 三、機関誌の発行。

四、その他、本会の目的達成上、必要な事項。

第三章 会員

第五条 会員は本会の趣旨に賛同するものを以てする。

第六条 会員は会費として、毎年度初めに金貳千円を納入する。

第四章 役員及び職員

第七条 本会に左の役員を置く。

会長 一名

副会長 二名

理事 若干名

幹事長 一名

幹事 一名

監事 二名

常任顧問 若干名

顧問 若干名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

理事は総会に於いて、会員の中から選任する。

幹事長及び幹事は会長が委嘱し、理事会の承諾を得る。

監事は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

常任顧問は本会に対し、特に功績があった会員の中から

第八条

ら理事会が推薦し、会長が委嘱する。
顧問は理事会で推薦し、会長が委嘱する。
会長は会務を総理し、本会を代表する。
副会長は会長を補佐し、会長事故あるときこれに代わる。

理事は理事会を組織し、会務の執行に当たる。
幹事長は庶務会計に従事し、これを統括する。
幹事は庶務会計に従事する。

監事は会計を監査する。
常任顧問は理事会に出席し、その諮問に応じる。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に応じる。
役員は任期は二年として再任を妨げない。

第九条

第五章 会議

第十条

会議を分かつて理事会、総会とする。

第十一条

理事会は必要の都度、会長が招集する。

第十二条

総会は毎年一回、会長が招集する。

第十三条

本会の会議は出席者の過半数をもって議決する。

第十四条

本会の経費は会費、寄付金及び雑収入をこれに充てる。

第十五条

本会の会計年度は、毎年四月一日から始まり三月三十一日に終わる。

附則

1 本会の会則の変更は、総会の議決によるものとする。

2 本会施行のため必要な規定は、会長が別に定める。

3 本会則の施行は、昭和四十年二月二十七日とする。

改訂 昭和五二・五・二二 平成三・六・三〇

平成六・六・二六

あとがき

会長 谷岡 隆夫

会報第八号の発刊にあたり、多くの方々のご投稿をいただきました。有難うございました。

今回、終戦特集を企画しましたところ、アンケートや体験記をお寄せいただきました。

会員の方々がうけた戦争による心の傷跡と、史跡めぐりなどで拝見する「会員の笑顔」とは別のものをかんじます。

この笑顔は、戦後五〇年の平和がもたらしたものです。

今後も郷土文化に関心のある方々の「趣味タイム」をより豊かに、参加ニーズに合わせた活動を続けたいと願っております。編集を担当された委員の方々に謝意を表し、第八号の発刊をお祝い申し上げます。

編集委員

小原勲三郎

加藤幸一

鈴木秀俊

鈴木種雄

谷岡隆夫

高山はつ

宮川 進

西田 茂

会 報 八号 会員頒布

発行日 平成七年六月

発行所 越谷市郷土研究会

越谷市宮本町三一―一七―八

代表者 谷岡隆夫

印刷所 中田印刷所

越谷市大沢三一―二―十五